

鹿兒島県史料

忠義公史料

第二卷

例言

- 一 本書は、東京大学史料編纂所蔵本「忠義公史料」（初稿本を含む一八三冊）を底本とし、これを「鹿児島県史料 忠義公史料」全八巻として刊行するものである。時代の範囲は、安政六年から明治五年に至る十四年間で、第二巻は文久二（一八六二）年から文久三（一八六三）年の内容を収めて刊行した。
- 一 底本の巻ごとに頁を改め、上段の頭初にその表紙を記載し、扉については表紙のわきに註記した。
- 一 原編者市來四郎の掲げた見出しはそのまま掲げ、見出しを欠くときには、新しく「 」で掲げた。
- 一 原本および異本の現存するときは、努めてそれと対比して校訂し、文末に「 （所蔵）にて校訂」などと註記した。
- 一 刊行巻ごとに、見出しに一連番号を附した。一つの見出しが数種の内容を含むときは、小番号を文首に附した。
- 一 固有名詞については、できるだけ正字を用いることにした。また、特殊文字の「 （しめ）」は、そのまま用いた。
- 一 書翰は、底本の体裁に基づき、片仮名を用いた。その他も底本の通り片仮名と平仮名を用いた。変体仮名は普通の仮名に改めたが、江だけはそのまま用いた。
- 一 平出・抬頭および闕字は、原則として底本の体裁によった。闕字のときは一字あけにした。
- 一 日記・新聞・会議録および但書は、原則として底本の体裁によった。
- 一 砲戦附図等の地図および花押は、写真等により底本のとおりとした。
- 一 原註および原編者註（ ）は、できるだけ右脇に移したが、長文のもの、あるいは見出し・目録・参看史料名の

ときは底本の体裁によった。

一新に註を附するときは、「ハ」を附して、原編者の註と区別した。

一人名および地名については、国内国外を問わず適宜傍註を附した。その際、藩の呼称は維新史附録（維新史料編纂事務局編）により統一した。国内地名については、県内は昭和四十九年現在の市郡名を用い、県外は主として都道府県名を用いた。なお、外国地名は片仮名書きとした。

一人名等については、底本の体裁によったが、原編者の明らかな誤記は、校訂者が訂正した。

一本文には適宜読点を附し、人名（外国人を除く）・地名・品名・数量等の連続するときには、並列点を附した。

一朱書は、その部分を「」で示し、「〔朱〕」と傍註を附した。

一頭註および付箋は、「」で行間に示し、「〔頭註〕」「〔付箋〕」と註記した。ただし、後筆のものは削除した。

一欠所部および解説困難な箇所は原編者註である本マ、と虫喰の箇所は、□で囲み、本マ、・虫喰または〔○○カ〕と傍註を附した。

一文意の通じない字または箇所には、「〔ママ〕」または「〔衍カ〕」・「〔○○カ〕」と傍註を附した。

一点線……の箇所は、底本の体裁によった。

一本文初めの内題、見出しの上の筆印、校正済・校了、第○○号の文字、後筆の傍線および傍点・鉤括弧、原編者が註記する予定の（ ）は、これを削除した。

一欄外に掲げた年代は、それぞれの巻の表紙に記載してある年代である。

一東京大学史料編纂所蔵本に鉛筆書きしてある巻順を一部変更した。

一見返しに、柳田龍雪筆「薩英戦争絵巻」（尚古集成館所蔵）を掲げた。

忠義公史料 第二卷 目次

例言

文久二年(壬戌)

薩州記事卷一(四二—三)

一	文久二壬戌年八月廿一日島津三郎家來於東海道生麥村英國人三名英婦一名殺傷致候始末……二	
二	文久二壬戌年八月二十一日嶋津三郎家來於東海道生麥村英人ヲ殺傷致候ニ付自公辺償金被差出候始末……	四三
三	三港拒絶之始末……	五三
四	水府浪人自殺ニ付長州藩届書正月十五日……	六五
五	島津久包ヨリ国元ヘノ書翰正月二十九日……	六七
六	中原尚勇ヨリ届書正月十五日……	六七
七	中原尚勇ヨリ届書三月……	六八
八	文久二年二月二十五日吾国意ヲ奉シ入京シタル次第略記 <small>中路延年自筆校正</small> ……	七〇
九	京都林光院梵敬弓削右馬之允之儀ニ付歎願……	七八
一〇	京都探訪第二……	八〇
一一	京都探訪第三……	八〇

一一	大坂永井清左衛門探訪第一	八一
一二	永井探訪第二	八九
一三	無名ノ書牘	九〇
一四	久光公御上京ニ就テ予達	九三
一五	侍医朝稻改名	九四
一六	上京予備兵賦	九四
一七	横濱 <small>日本文久二年壬戌四月十三日 千八百六十二年五月十一日</small> 南部彌八郎報	九五
一八	岩倉具視堀次郎ニ贈ル書翰	九五
一九	内密	九五
二〇	宣旨	九五
二一	宣旨	九六
二二	岩倉具視口述書四月二十三日	九六
二三	御内書四月二十四日	九六
二四	近衛忠房書翰一四月	九七
二五	同上書翰二四月二十五日	九七
二六	近衛忠房口述書四月二十五日	九八
二七	近衛忠房書翰三四月二十九日	九八
二八	八田知紀詩卜風説	九九

目次

三〇	五代友厚上海行経費予算貿易ノ統計	一〇二
三一	当時朝廷及ヒ幕府ノ形勢	一〇二
三二	長州内情探訪ノ報告	一〇三
三三	デキソンヨリ通辞立石斧次郎へ贈ル書翰英文和解	一〇四
三四	薩藩士道島正邦碑銘	一〇六
三五	茂久公ニ代リテ久光公御参府発表	一〇八
三六	久光公御参府準備	一〇八
三七	久光公御参府宿割	一〇八
三八	久光公二ノ丸御移転延日布告	一〇九
三九	久光公二ノ丸へ御移転	一〇九
四〇	久光公御上京ノ概況	一一一
四一	久光公御上京警備人員江戸邸ニ於テ	一一一
四二	西郷隆盛帰麿頭末当時菊地源吾卜唱	一一三
四三	茂久公擊剣家ノ輩へ訓諭書	一一五
四四	橋口柴山有馬田中ニ与ル書	一一五
四五	久光公御上京随行人名	一一六
四六	長州侯上書写江戸邸報告	一一七
四七	兵庫大坂等ニ浪士屯集動静視察及警戒京都邸報告	一二〇

四八	朝廷御沙汰書薩州ト心ヲ合せ云々	一二一
四九	文久二年四月二十三日浪士発動ノ形勢京都町奉行へ届書	一二三
五〇	文久二年四月二十三日浪士鎮撫事件京都町奉行へ届書	一二三
五一	暴徒鎮撫使ノ輩ヲ賞ス	一二三
五二	寺田屋闘争ノ前頃	一二四
五三	大久保利通日記抄寺田屋事件ノ事実	一二五
五四	当時ノ形勢及ヒ寺田屋事件ノ報	一二八
五五	寺田屋事件届書	一三四
五六	寺田屋ニ於テ取押ヘタル浪士ヲ京都藩邸ニ護送ノ始末	一三五
五七	浪士鎮撫叡感ノ宸翰	一三六
五八	御上洛ニ就キ供奉云々	一三七
五九	御軍制改正ニ就テ云々達書	一三八
六〇	松平薩摩守贈位	一三八
六一	万石以上之妻子子女手形手續達書	一三八
六二	有馬新七等処刑申渡書	一三九
六三	寺師宗道島津登へ書翰	一四一
六四	茂久公將軍上洛供奉請願ノ事実	一四二
六五	毛利慶親書翰五月二日	一四三

六六	大原家記鈔	一四四
六七	演舌近衛忠房	一四五
六八	寺田屋事件連類者帰麿并達書	一四五
六九	御親書不時勢揃調練ノ褒詞	一四五
七〇	徳川慶喜松平慶永之儀箇条詔書別紙五月十八日	一四六
七一	島津久光出府可周旋詔書	一四六
七二	久世大和守上京停止之趣近衛家報知書	一四七
七三	近衛忠房書翰五月十八日	一四九
七四	近衛忠房書翰五月十九日	一五〇
七五	中山忠能書翰五月十九日	一五〇
七六	久光公関東御下向布告旧邦秘録鈔	一五一
七七	関東勅使差向ニツキ詔書	一五一
七八	近衛忠房書翰五月二十日	一五一
七九	岩倉具視書翰	一五三
八〇	近衛殿密翰	一五三
八一	近衛忠房書翰五月二十一日	一五三
八二	近衛殿内書	一五四
八三	久光公関東御下向御発途	一五五

八四	鵜木上田特別注意達書……………	一五七
八五	岩倉殿ヨリ三郎様へ御文箱云々照会……………	一五七
八六	大原重徳久光ニ往復書彙……………	一五七
八七	岩下方平島津石見カ病気危篤ヲ大久保ニ報ス……………	一五八
八八	田中綏猷父子被誅殺顛末……………	一五八
八九	寺田屋ニ於テ伏誅人名及ヒ年齢……………	一五九
九〇	島津石見兵ヲ率テ上京ス……………	一六〇
九一	中島健彦詠歌……………	一六〇
九二	久世廣周上京停止之趣近衛家報知書添書五月……………	一六〇
九三	將軍上洛ニ関スル届書六月朔日……………	一六〇
九四	近衛忠房書翰六月三日……………	一六一
九五	大原重徳久光ニ往復書彙……………	一六三
九六	正親町三條實愛書翰六月十日……………	一六三
九七	中山忠能書翰六月十日……………	一六四
九八	大原重徳手控書六月十日……………	一六五
九九	大原重徳書翰六月十二日……………	一六六
一〇〇	大原重徳口上六月十三日……………	一六七
一〇一	大原重徳返書六月十四日……………	一六七

目次

一〇二	大原重徳口状六月十六日	一六七
一〇三	島津久光面談ニ付大原重徳呈書六月十六日	一六七
一〇四	大原重徳書翰六月十八日	一六八
一〇五	大原重徳書翰六月二十四日	一六九
一〇六	松平慶永返書六月二十五日	一六九
一〇七	三策ヲ群臣ニ諮詢スル沙汰書	一六九
一〇八	関東江勅使差立ルニ当ツテ決セラレタル三事	一七〇
一〇九	徳川慶喜江之書付探索依頼七月朔日	一七〇
一一〇	酒井忠義進退ニ関スル近衛忠房密翰七月五日	一七一
一一一	岩倉具視来書ニ関スル大原重徳口上書七月八日	一七二
一一二	正親町三條實愛書翰七月九日	一七四
一一三	中山忠能書翰七月九日	一七五
一一四	政事総裁職ニ関スル大原重徳書翰	一七五
一一五	正親町三條實愛中山忠能書翰七月十五日	一七六
一一六	大原重徳書翰七月十八日十九日	一七七
一一七	正親町三條實愛中山忠能書翰七月二十日	一七八
一一八	大原重徳書翰七月二十一日	一七九
一一九	近衛忠房書翰副書七月二十七日	一七九

一一〇	近衛忠熙書翰七月二十七日	一八〇
一一一	近衛忠房書翰七月二十七日	一八一
一一二	大原重徳書翰八月六日	一八三
一一三	勅書推戴ニ関スル幕府請書八月七日	一八三
一一四	近衛忠房書翰閏八月十三日	一八四
一一五	松平慶永上京沙汰ヘノ答書八月十八日	一八五
一一六	西郷隆盛木場傳内へ与ル書翰一	一八五
一一七	全上二	一九三
一一八	全上三	一九三
一二九	松木弘安より川本幸民江書翰第一	一九五
一三〇	全上第二	一九六
一三一	全上第三	一九七
一三二	近衛忠熙書翰八月二十一日	一九八
一三三	近衛家御両殿様ヨリ御直ニ御渡之御書取	一九九
一三四	徳川十五世紀抄	一九九
一三五	近衛忠熙書翰八月二十五日	二〇二
一三六	仙臺藩士遠藤文七郎書翰八月二十八日	二〇三
一三七	四姦二宮女ニ関スル近衛忠熙密書	二〇五

目 次

一三八	薩長確執説……………	二〇六
一三九	近衛忠房書翰閏八月十一日……………	二〇七
一四〇	近衛忠房書翰……………	二〇八
一四一	近衛忠房書翰閏八月二十日……………	二〇九
一四二	大原重徳口述書閏八月二十二日……………	二〇九
一四三	戸田忠恕国政意見書閏八月……………	二一〇
一四四	茂久公關ヶ原ノ難戦ヲ追想妙円寺御参詣……………	二一一
一四五	江戸ノ形勢報告……………	二一三
一四六	藩政改革ヲ令ス……………	二一三
一四七	諸侯ノ妻子国邑居住ノ令ニ依リ茂久公御廉中其外御帰国……………	二一五
一四八	麻疹流行……………	二一五
一四九	大原重徳書翰九月十八日……………	二一六
一五〇	茂久公江戸御参観年割布達……………	二一七
一五一	浪士石部駅ニ於テ乱妨始末道嶋正亮紀事鈔……………	二一七
一五二	藩吏菱刈汾陽免黜セラル……………	二一八
一五三	將軍上洛布告……………	二一八
一五四	青蓮院宮尊融書翰九月晦日……………	二一八
一五五	江戸報告……………	二一九

一五六	公武周旋依頼書……………	二一九
一五七	三條へ長州佐々木男也持参ノ勅使東下攘夷決行ノ議九月十八日……………	二二一
一五八	戸田忠恕御陵修補願書……………	二二二
一五九	献上米初穂備……………	二二二
一六〇	岡藩主中川久昭一件……………	二二四
一六一	久光ノ上京ヲ促ス中山忠能書翰十月一日……………	二二六
一六二	久光上京ニ関シ小松清廉書翰十月四日……………	二二七
一六三	島津齊彬贈位ニツキ近衛忠熙書翰十月十日……………	二三〇
一六四	小松清廉宛本田親雄書翰十月十日……………	二三〇
一六五	府下各町商人共へ下ヶ渡シ金錢高……………	二三一
一六六	攘夷勅諭書……………	二三一
一六七	殿中動静一……………	二三二
一六八	明治三十一年三月十六日日本田男(親雄)ノ実話島津久光献米顛末……………	二三七
一六九	今熊野伴右衛門の来歴……………	二三九
一七〇	西郷氏伏見会見の談補遺……………	二四〇
一七一	堀次郎宛島津久包書翰十一月四日……………	二四一
一七二	中山實善大久保宛藤井正徳書翰十一月五日……………	二四一
一七三	軍制改革令……………	二四一

目次

一七四	久光上京ヲ促ス書翰十一月十三日	二四四
一七五	久光上京ヲ促ス近衛忠熙書翰十一月十三日	二四四
一七六	齊彬贈位ニツキ近衛忠熙書翰十一月十九日	二四五
一七七	上洛ニツキ諸道中筋荷物小車使用許可立合	二四五
一七八	勅使攘夷ニツキ帝都警備ニツイテ仰出十一月	二四六
一七九	勅使滞在ニツキ非常警衛ノ仰出十一月	二四六
一八〇	島津刀劍献上ノ一件及ビ閑白人事ノ件中山忠能書翰	二四七
一八一	島津久光宛中山忠能書翰	二四八
一八二	中山實善大久保宛岩下方平高崎五六書翰十一月晦日	二四九
一八三	京師事情報告書十一月	二五〇
一八四	島津久光宛山内豊信書翰十二月朔日	二五〇
一八五	島津久光宛松平慶永書翰十二月朔日	二五〇
一八六	近衛忠熙宛松平慶永書翰十二月朔日	二五二
一八七	大久保宛本田親雄書翰十二月四日	二五二
一八八	本田彌右衛門大久保正助へ書翰	二五四
一八九	中山實善大久保宛小松清廉書翰十二月九日	二五四
一九〇	中山實善大久保宛岩下方平書翰十二月十七日	二五八
一九一	中山實善宛大久保書翰十二月二十一日	二五九

一九二	同上書翰十二月二十四日	二六二
一九三	中山實善宛藤井書翰十二月二十五日	二六四
一九四	藤井正徳宛岩下書翰十二月二十五日	二六六
一九五	池田慶徳伊達宗城細川慶順名代建言書十二月二十六日	二六七
一九六	松平肥後守守護職及ヒ久光公御上京御沙汰書	二六九
一九七	久光公守護職御辞退之願書	二六九
一九八	大慈寺柏州和尚事蹟	二七一
一九九	中路延年事蹟	二七三
二〇〇	弓削正繼自記島津公勤王始末ニ付正繼ニ関スル件ノ大略	二七五
二〇一	中川久昭八幡山崎辺台場新築被仰付十二月	二七七
二〇二	殿中動靜二	二七七
二〇三	和宮降下大赦	二七七
文久三年(癸亥)		
二〇四	総攬	二八三
二〇五	京師報告	二八三
二〇六	藤井良節大久保一蔵ニ京師ノ事情報告	二八三
二〇七	当時京師ノ形勢	二八四
二〇八	藤井良節大久保一蔵ニ京師ノ事情報告	二八四

目次		
二〇九	軍制改革後ノ操練	二八五
二一〇	衣服ノ制度ヲ革ム	二八五
二一一	衣服制度發布	二八五
二一二	癸亥正月大久保一藏江戸報告	二八六
二一三	癸亥正月九日大久保一藏中山中左衛門へ贈ル書	二八八
二一四	攘夷策略下問布達	二九〇
二一五	琉球通寶通融布告	二九〇
二一六	茂久公大操練ヲ見ル	二九一
二一七	軍制変更御城下六組	二九一
二一八	城下士編伍令	二九六
二一九	吉井友實大久保一藏へ書翰	二九七
二二〇	久光公御上京茂久公他日御上京云々達書	二九八
二二一	久光公至急御上京ノ勅命	二九八
二二二	農政奨励布告	二九八
二二三	禄高所有制限令	三〇二
二二四	金銀貨幣価格変換布告	三〇二
二二五	藩内産業奨励	三〇三
二二六	当時京攝ノ形勢報告	三〇三

二二七	砲術館ヲ廢シ撃劍場トス……………	三〇四
二二八	御軍役ニ付平常御沙汰ノ趣御別紙ノ通……………	三〇四
二二九	攘夷策略御下問……………	三〇五
二三〇	放鷹場ヲ廢止藩令……………	三〇五
二三一	安田助左衛門日記抄軍賦ニ就テ建言……………	三〇六
二三二	非常警報布告江戸邸……………	三一
二三三	城下各組組織交換……………	三一
二三四	五代才介ヲシテ汽船ヲ上海ニ買フ……………	三一
二三五	異国船渡来ノ予備……………	三一
二三六	勤務時間延長ノ達書……………	三一
二三七	御供ノ人員服制変更達書……………	三一
二三八	生麥殺傷事件英国人申立ノ趣示達……………	三一
二三九	英艦生麥殺傷事件談判ノ為メ渡来ノ達……………	三一
二四〇	英艦渡来ノ準備異国船御手当ノ次第……………	三一
二四一	異国船渡来ノ節御作法左ノ通被仰渡候……………	三一
二四二	英国艦隊横濱へ入港応接ノ報……………	三一
二四三	在京都田ヨリ大久保ニ洛中ノ形勢ヲ報ス……………	三一
二四四	鹿兒島湾内要衝ノ地頭職任命……………	三一

二四五	各郷警衛地達書	三一九
二四六	海防準備嚴警	三二〇
二四七	軍役人員調査	三二〇
二四八	諸郷軍役人員調査	三二五
二四九	乗馬数調査	三三六
二五〇	山川郷諸調	三三七
二五一	江田平太郎家記鈔	三四〇
二五二	一陣調練ノ次第	三四一
二五三	忠義公春嶽公へ御書翰	三四一
二五四	茂久公大操練ニ臨マル	三四二
二五五	久光公御親書ヲ以テ從駕ノ人員へ御示達	三四三
二五六	幕府沙汰書并伊掃部頭へ	三四四
二五七	長崎奉行九州各藩へ達書	三四五
二五八	茂久公御親書示達	三四五
二五九	久光公御帰国	三四六
二六〇	久光公兵庫御着ノ報大久保小松ニ報告	三四六
二六一	齊彬公御贈官口宣着麁布達	三四八
二六二	京師飛報久光公御帰国ノ急報	三五〇

二六三	神奈川新聞……………	三五〇
二六四	長崎ノ形勢報告……………	三五三
二六五	五ヶ所砲台大操練……………	三五三
二六六	梵鐘ヲ琉球通寶資料ニ充ツ……………	三五三
二六七	小松帶刀大久保一蔵へ与ル書……………	三五三
二六八	長崎在勤中原猶介四月三日ヲ以テ政庁へ報告……………	三五四
二六九	台場御手当之次第……………	三五五
二七〇	御旗本備御手当之次第……………	三五七
二七一	御先手備御手当之次第……………	三五九
二七二	御城下守衛御手当向之次第……………	三六三
二七三	三郎様御旗本備御手当之次第……………	三六五
二七四	水軍隊御手当之次第……………	三六七
二七五	花倉御茶屋立添……………	三七〇
二七六	各所砲台及ヒ水軍操練……………	三七〇
二七七	對州警戒達書……………	三七〇
二七八	八幡奉行等ノ形況報告……………	三七一
二七九	久光公御帰国太守公御迎行……………	三七一
二八〇	島津又之進元服並雜報……………	三七二

二八一	三郎様御着城……………	三七二
二八二	久光公御着城……………	三七二
二八三	藩庁其他諸局出退時刻変換……………	三七三
二八四	久光公先塲御参詣……………	三七三
二八五	襄田傳兵衛大久保一蔵江書翰二通……………	三七三
二八六	攘夷拒絶ノ嚴令……………	三七四
二八七	谷村小吉書翰……………	三七四
二八八	小松帶刀家族へ与ル書翰……………	三七四
二八九	舶来大小砲買入ノ為メ派出……………	三七六
二九〇	吉野村牧場馬追及ヒ太鼓踊其外牧場由来……………	三七六
二九一	英夷申立切迫云々達示……………	三八二
二九二	琉球国在留仏人退去届書……………	三八二
二九三	大操練御出馬……………	三八二
二九四	各所砲台大操練……………	三八二
二九五	柴山良助山之内一郎ニ送ル書翰……………	三八三
二九六	前ノ濱へ英国船襲来後ノ手当……………	三八四
二九七	新ニ買入レタル船名……………	三八五
二九八	麻疹大流行……………	三八五

二九九	松平修理大夫様ヨリ伺書	三八六
三〇〇	道島正亮紀事抄	三八六
三〇一	大坂物価報告	三八七
三〇二	外夷拒絶ノ大令布告ニ備ヘル軍賦条令	三八七
三〇三	忠義公御親書訓令	三九〇
三〇四	御側役ヨリ御小姓与番頭へ口達	三九〇
三〇五	琉球通寶鑄造ノ事実	三九二
三〇六	実地試験操練	三九三
三〇七	出陣相図ノ諭達	三九三
三〇八	太守様三郎様御上京云々布達	三九四
三〇九	蛮夷掃攘ノ為一橋中納言出発 <small>藩達</small>	三九四
三一〇	操練及ヒ軍賦	三九四
三一一	在京田中仲右衛門報告	三九七
三一二	芝屋敷家作取毀届書新納	三九七
三一三	久光公御帰国届書	三九七
三一四	茂久公大操練御出馬江田平藏日記鈔	三九七
三一五	大坂藩邸報告	三九八
三一六	英艦渡来ノ準備	三九八

目次	
三二七	軍事ニ関ル事情……………四〇一
三二八	安田助左衛門日記抄……………四〇一
三二九	生麥ニ於テ英人殺傷償金事件伺書……………四〇一
三三〇	英艦渡来ノ形勢演達……………四〇三
三三一	参考 中山中左衛門日記鈔……………四〇三
三三二	本田彌右衛門中山大久保へ書翰生麥事件……………四〇三
三三三	全上照会……………四〇四
三三四	癸亥五月十四日在京本田親雄報告御親兵一彙等……………四〇六
三三五	本田彌右衛門報告……………四〇八
三三六	藩内穀価騰貴……………四〇八
三三七	二番三番ノ二夕組操練……………四〇八
三三八	御親兵賦……………四〇八
三三九	在崎中原猶介藩庁ニ報告……………四一一
三三〇	洋式紙幣発行……………四二二
三三一	吉利高橋等進退……………四二二
三三二	勝姫君帰国……………四二二
三三三	銃器大変革……………四二二
三三四	鵜木孫兵衛暗殺セラル道嶋正亮紀事抄……………四二三

三三五	齊彬公御贈位……………	四一三
三三六	千眼寺慈國寺合併戦争準備……………	四一五
三三七	大操練……………	四一七
三三八	鈴木其他進退……………	四一九
三三九	汽船白鳳丸大坂へ進航……………	四一九
三四〇	姉ヶ小路少将遭難報告 本田弥右衛門大久保中山へ……………	四一九
三四一	中山中左衛門大久保一蔵へ書翰 細島ヨリ……………	四二一
三四二	喜入攝津小松帶刀ニ与ル書……………	四二二
三四三	忠久公靈祀……………	四二二
三四四	英艦渡来ノ形勢論 達藩内布達……………	四二三
三四五	開戦ノ準備……………	四二三
三四六	当時藩内ノ人気……………	四二四
三四七	英国艦隊襲来準備……………	四二五
三四八	攘夷期日布令……………	四二五
三四九	中川家謝詞……………	四二五
三五〇	参考 伏見大黒寺有馬新七等墓碑ノ傍ニアル石燈ノ歌……………	四二五
三五一	本藩商賈村山某報知書牘 六月朔日……………	四二八
三五二	小倉村上銀右衛門報告 六月二日……………	四二九

三五三	姉ヶ小路少将殿刺客嫌疑者仁禮源之丞云々藩達	四三〇
三五四	小松帯刀其他沖ノ小島砲台巡視	四三一
三五五	小倉本陣村上銀右衛門ヨリ中村吉左衛門村田與兵衛へ報告	四三一
三五六	小倉人某書翰六月五日	四三二
三五七	姉ヶ小路暗殺ノ嫌疑者	四三五
三五八	肥後球磨相良家ノ使者来麿依頼ノ条件六月七日	四三六
三五九	英人金時計ヲ太守公へ送ル	四三七
三六〇	祇園祭六月十五日	四三七
三六一	馬關ニ於テ長藩夷船砲撃ノ始末在崎中原猶介友人へ報告書	四三八
三六二	茂久公御参府御奉書	四四一
三六三	松木弘安ヨリ申越候書状之写六月十七日	四四二
三六四	五ヶ所砲台操練	四四二
三六五	諸所砲台装置砲数	四四三
三六六	参考 大小砲数及費用表	四四五
三六七	在江戸喜入攝津同僚へ報告	四四八
三六八	喜入攝津小松帯刀へ書翰	四四九
三六九	英艦渡来申立云々達書	四五〇
三七〇	汽船青鷹丸延岡藩砲発	四五〇

三七一	参考道島正亮紀事抄	四五一
三七二	茂久公御近習三名ノ不都合御内沙汰	四五一
三七三	神奈川碇泊英艦鹿兒島ニ発航達書	四五二
三七四	喜入攝津一橋殿ヨリ英艦鹿兒島へ発航ニ就テ平穩云々演達	四五二
三七五	英艦渡来云々其他報告	四五三
三七六	江戸西丸炎上其他浪士横行等ノ報	四五四
三七七	京都雜報	四五五
三七八	京師ノ形勢報告	四五七
三七九	五ヶ所砲台及ヒ水軍隊大操練	四五八
三八〇	英艦隊渡来ノ事由ヲ問ハシム	四五八
三八一	英艦隊当日ノ形況	四五九
三八二	参考安田助左衛門日記鈔	四五九
三八三	各砲台其他準備	四五九
三八四	各郷ノ兵隊各持場ニ出張ス	四六〇
三八五	櫻島ノ警衛	四六〇
三八六	兵糧彈薬ノ準備	四六〇
三八七	英国軍艦七艘鹿兒島湾ニ侵入ノ形勢	四六〇
三八八	英艦隊前乃濱海ニ廻航国書ヲ提出ス	四六一

三八九	参考安田助左衛門日記鈔	四六四
三九〇	英国々書ニ対スル答書	四六五
三九一	艦隊ノ挙動六月二十八日	四六六
三九二	在館琉球人避難	四六六
三九三	英艦隊薪水魚卵ノ類ヲ買ハムト乞フ及ヒ刺客人名	四六七
三九四	和平破レムトス六月二十九日	四七一
三九五	市來正右衛門寺師次右衛門書翰	四七二
三九六	市來靜里寺師宗道へ与ル書	四七三
三九七	四文錢新鑄布告	四七七
三九八	全国一般米価高直	四七七
三九九	江戸在邸岩下方平外国事件報告ノ大意	四七七
四〇〇	当時ノ雜記道島正亮紀事鈔	四七八
四〇一	薩州功罪判案	四七八
四〇二	所司代牧野備前守殿江差出候書付写	四八一
四〇三	薩州之罪案	四八二
四〇四	鹿兒島湾内各所砲台装置ノ砲数	四八六
四〇五	国父久光公御旗本隊	四八九
四〇六	舊邦秘録	五一三

四〇七	市來寺師へ贈ル書翰	五一四
四〇八	舊邦秘録	五一五
四〇九	戦争当朝ノ報	五一五
四一〇	舊邦秘録	五二五
四一一	英艦ト戦争長崎奉行へ届書	五二九
四一二	舊邦秘録	五二九
四一三	大小砲製造	五三〇
四一四	破壊英艦小根占海ニ止リ航行スルコト能ハス	五三一
四一五	戦争ニヨル英国側死傷者	五三一
四一六	戦争ニ就テ我受ル所ノ損害	五三二
四一七	戦争ニ就テ彼ノ損害	五三二
四一八	佳節拜賀ノ式停止七月七日	五三三
四一九	戦争ニ就テ救恤	五三三
四二〇	再襲ニ備フル準備	五三三
四二一	小根占海ニ碇泊シタル英艦引退	五三四
四二二	英艦放發シタル彈丸ノ数	五三四
四二三	造士館員建言七月七日	五三五
四二四	神瀬修築ノ建言	五三六

目次

四二五	高橋縫殿ニ軍役奉行心添ヲ命ス	五三九
四二六	佐土原侯兵ヲ率ヒテ来麿	五三九
四二七	砲台新築令	五四〇
四二八	癸亥七月八日英国ヨリ幕府へ差出シタル書外国新聞訳	五四〇
四二九	英国艦隊横濱へ退去ノ報	五四一
四三〇	舊邦秘録	五四一
四三一	久光公御上京ヲ促サル	五四二
四三二	言路洞開ノ令ヲ布レタリ七月十日	五四二
四三三	戦争中敵弾来レル個所	五四三
四三四	再襲来準備達書	五四四
四三五	諸郷兵解散	五四四
四三六	久光公仮棲買上	五四四
四三七	島津淡路転宿七月	五四五
四三八	英国艦隊戦況談究益	五四五
四三九	伊地知正治大久保一蔵へ与ル書翰	五四六
四四〇	城地移転布達	五四八
四四一	國分郷名改称	五五一
四四二	太鼓踊ノ形況	五五一

四四三	近衛公二條公久光公へ与ル書翰	五五一
四四四	近衛公御父子久光公へ御書翰	五五二
四四五	薩英戦争褒賞一	五五二
四四六	江戸ニオケル薩英戦争風聞	五五四
四四七	諸局平常開席	五五六
四四八	薩英戦争褒賞二	五五六
四四九	兵糧方達七月十五日	五五八
四五〇	銅器類供出令七月十五日	五五八
四五一	櫻島各所砲台ノ修築	五五九
四五二	水戸藩戸田外二名ノ書翰	五六二
四五三	中山中左衛門書翰大久保一藏宛	五六三
四五四	中山中左衛門免職	五六三
四五五	長州藩援助ヲ乞フ	五六三
四五六	太守公宇治瀬神社告祭式	五六五
四五七	大久保一藏へ小松帯刀ノ書翰	五六六
四五八	火巧製造所創設	五六六
四五九	和田九十郎中原猶介竹下清右衛門云々	五六七
四六〇	越前藩老入薩ノ報	五六七

目次

四六一	長崎通信……………	五六九
四六二	長崎奉行鹿兒島ニ探偵ヲ派遣ス小松帶刀報……………	五六九
四六三	太守公千眼寺御解陣……………	五七〇
四六四	御一門四家初メ諸士軍勞褒詞……………	五七〇
四六五	英艦鹿兒島灣ニ迫ル……………	五七一
四六六	戦争褒賞ニ就テ……………	五七九
四六七	川上龍衛久齡自記……………	五八三
四六八	喜入攝津久高カ自記抜抄……………	五八四
四六九	紹述編年抄……………	五八九
四七〇	久光公御上京御沙汰……………	五八九
四七一	久光公御上京ニ付訓諭……………	五九〇
四七二	久光公外夷処分ノ建言……………	五九〇
四七三	戦後ノ困却……………	五九二
四七四	当時ノ米価……………	五九二
四七五	青山愚知略履歴天山流師範……………	五九二
四七六	英船入港見聞記……………	五九四
四七七	道島正亮紀事抄 <small>開戦前ノ形況</small> ……………	六〇六
四七八	道島正亮家記鈔……………	六一四

四七九	鹿兒島戰爭始末新聞記事	六一五
四八〇	英寇來襲鹿兒島港砲擊記錄	六三二
四八一	軍事上ニ於ル日本	六五三
四八二	日本ノ交易ニ關係セル神奈川開版之別段新聞紙	六六二
四八三	我会社ヨリ告ル新聞	六六二
四八四	薩州英戰爭之儀英人所著之新聞	六六七
四八五	薩州ヨリミニストル江送レル返書之大意	六六八
四八六	橫濱新聞	六六九
四八七	外国新聞	六七四
四八八	薩摩侯松平修理大夫執政川上但馬ヨリ英吉利公使コロネルニールへ贈ル日本文書 書翰ノ翻譯	六七八
四八九	千八百六十三年第八月二十一日橫濱新聞大日本七月八日也	六八〇
四九〇	日本貿易新聞	六八一
四九一	日本江向ヒ我等ヨリ言出セル事件	六八六
四九二	舊邦秘録	六八九
四九三	舊邦秘録橫浜新聞鈔記他	六九一
四九四	鹿兒島灣ニ於テ英國艦隊ト戰鬪概況	七〇四
四九五	江戸詰御用部屋書役ヨリ差遣候書狀写	七一八

目 次

四九六	舊邦秘録……………	七二〇
四九七	八朔ノ佳儀略式ノ布告……………	七四四
四九八	藩内各所大風雨米価暴騰悪疫流行……………	七四四
四九九	越前藩老来麿……………	七四五
五〇〇	御一門四家初メ諸士へ戦争ノ褒詞……………	七四五
五〇一	再襲準備……………	七四五
五〇二	銃薬局上申……………	七四五
五〇三	太守公各砲台巡視修築ヲ命セラル……………	七四八
五〇四	各藩調練天覧……………	七四九
五〇五	近世野史……………	七四九
五〇六	京師ノ至急報告……………	七五三
五〇七	在崎中原猶介友人某へ送リタル書翰……………	七五五
五〇八	岩下佐次右衛門大久保一蔵へ書翰……………	七五六
五〇九	在江戸堀平右衛門小松帯刀へ書翰 一橋公板倉侯へ面謁云々……………	七五六
五一〇	吉井中介大久保中山へ書翰……………	七五九
五一一	長崎ニ於テ大砲及ヒ汽船ヲ購求ス……………	七六一
五一二	村山齊助大久保一蔵へ報告……………	七六一
五二三	小倉村上銀右衛門報告……………	七六四

五二四	廣島藩戰捷賀使來麿及貿易取組	七六四
五二五	茂久公海路東行ノ御沙汰書	七六五
五二六	福岡藩老黒田山城戰捷賀慶使來麿	七六五
五二七	紙幣発行布達	七六五
五二八	在崎襄田傳兵衛書翰八月十一日	七六五
五二九	道島正亮紀事抄	七六六
五三〇	高崎左太郎中山大久保へ書翰	七六六
五三一	久光公御上京布達	七六七
五三二	大和行幸布告	七六七
五三三	近衛忠熙公高崎佐太郎へ賜書	七六八
五三四	近衛忠房公高崎佐太郎へ賜書	七六九
五三五	中川宮及ヒ近衛忠房公高崎佐太郎へ賜書	七六九
五三六	八ヶ所砲台大操練	七七〇
五三七	近他領探訪書	七七〇
五三八	大小砲薩州詔及再ヒ襲來ノ報	七七一
五三九	在坂木場傳内報告	七七一
五三〇	中川宮及ヒ近衛殿御父子二條殿参内	七七二
五三一	中川宮近衛忠房公高崎賜書	七七三

目次

五三三	尊融親王近衛忠房公高崎佐太郎へ御書翰	七七三
五三三	堺町御門御警衛交代ノ始末高崎奈良原報告	七七三
五三四	全上ノ始末第二	七七七
五三五	村山下総外数名報告	七七九
五三六	福井藩老岡部豊後戦勝賀慶ノ為来麿	七七九
五三七	乾門警衛	七八〇
五三八	在坂木場傳内報告	七八〇
五三九	林休左衛門へ滞京加藤十兵衛書面	七八一
五四〇	久光公早々上京被命	七八二
五四一	白石同僚へ報告堺町門ノ一挙	七八二
五四二	谷村小吉大久保一蔵へ書翰京都ノ形勢	七八四
五四三	大和行幸御延引	七八六
五四四	藩士御褒賜	七八六
五四五	島津侯建白書	七八七
五四六	奈良原幸五郎帰国報告	七八八
五四七	英国戦争後曲直各国へ御示達稟請	七九〇
五四八	英艦隊掃攘ノ褒勅布告	七九一
五四九	伊地知正治建言	七九一

五五〇	上京藩士訓誡久光公	七九四
五五一	無名ノ檄文薩人ナラン	七九四
五五二	久光公逸話	七九五
五五三	上書函引取布達	七九五
五五四	英艦隊再襲ノ風説ヲ誡ム	七九六
五五五	神瀬其他各所砲台修造ニ就キ土石運搬勞役請願	七九六
五五六	御城下一組軍賦	八〇〇
五五七	御府内八ヶ所台場御手当賦各三拾發賦	八〇四
五五八	当薩摩屋敷ヨリ内意ト申越候書取	八二三
五五九	英艦砲弾凶	八二三
五六〇	戦争褒賞	八二四
五六一	村井修理少進筆記ノ二	八二五
五六二	舊邦秘録	八三九
五六三	在京黒田嘉右衛門報告清綱旧名	八四〇
五六四	黒田嘉右衛門建言	八四一
五六五	佐土原縁組一件差出人不明	八四二
五六六	半朱琉球通寶布令	八四三
五六七	久光公御上京及ヒ警衛兵隊旧邦秘録抄	八四三

五六八	英吉利人へ返書九月十三日	八五一
五六九	日本交易別段新聞	八五二
五七〇	西郷隆盛米良助右衛門ニ与ル書翰	八五五
五七一	横濱ニ於テ岩下高崎等償金談判	八五七
五七二	三島通庸小伝鈔柴山景綱起稿	八五七
五七三	大小砲亜墨利加へ注文代価予算	八五九
五七四	道嶋正亮紀事抄	八六七
五七五	薩州ヨリ言上之趣	八六八
五七六	高崎奈良原等へ褒賜高崎正風家記鈔	八六九
五七七	舊邦秘録 <small>和睦談判</small>	八七一
五七八	不時勢揃褒賞達書	八七一
五七九	村山下総報告	八七二
五八〇	襄田傳兵衛転役	八七二
五八一	久光公御上京届書江戸邸届書	八七二
五八二	舊邦秘録抄久光公御建言	八七三
五八三	大坂報告	八七四
五八四	在京島津主殿書翰	八七四
五八五	大迫吉左衛門柴山良助へ長藩ノ挙動ヲ報ス	八七五

五八六	小松帶刀妻へ書翰	八七五
五八七	全上	八七六
五八八	中山侍従官位返上達書	八七八
五八九	二本松新邸五ヶ門唱呼	八七八
五九〇	伊地知正治意見建言	八八一
五九一	道嶋源五郎上書	八八五
五九二	国老中へ御示達鹿兒島ニ於テ	八八八
五九三	江戸邸取毀達書	八八九
五九四	久光公へ密宸翰下賜	八八九
五九五	英艦将ト岩下其他和睦談判	八九〇
五九六	英吉利人へ書翰	八九三
五九七	薩摩侯償金ヲ出ス	八九四
五九八	横濱ニ於テ汽船ヲ購求	八九五
五九九	久光公伊達宗城公へ御書翰	八九六
六〇〇	鹿兒島新屋敷郷学校規則	八九六
六〇一	大坂大火ノ再報道島正亮紀事抄	八九九
六〇二	神瀬砲台築造ノ形況	八九九
六〇三	密宸翰奉答書	八九九

目次

六〇四	薩藩献米諸神社へ御奉献	九〇五
六〇五	鹿兒島各所ノ砲台修造	九〇五
六〇六	御内意之覺木場佐内	九〇七
六〇七	舊邦秘録	九〇八
六〇八	御宸翰文久三年十二月三日密	九一〇
六〇九	小松帶刀家族へ与ル書翰	九一二
六一〇	於京師九藩建言尹宮御身上ニ就テ	九一四
六一一	美玉三平戦死ノ説道島正亮家記	九一五
六一二	貞姫君近衛忠房公ニ結婚	九一六
六一三	英国卜和陸ノ終局ニ就テノ説	九一六
六一四	参考小松帶刀日記鈔	九一六
六一五	汽船焼亡ノ報	九一六
六一六	道島正亮家記	九一七
六一七	長州糸屋敷ヨリ御届書	九一七
六一八	櫻木邸ニ於テ忘年会	九一七
六一九	生麥殺傷事件遺族扶助料払及ヒ軍艦調文	九一八
六二〇	汽船焼亡ノ和歌	九一八
六二一	將軍上洛ヲ促サムカ為家人ヲ出府セシム	九一八

六二二	赤塚有村大脇ノ三士意見書	九一九
六二三	姓名不詳ノ要書	九二三
六二四	老西郷大島流竄中ノ事蹟	九二七
六二五	再度ノ島下リ一	九二八
六二六	全上二	九二九
六二七	五代才助上申書器械取寄セ等ノ件々	九三〇
六二八	江田平蔵外三人供被仰付事	九四三
六二九	税所篤清自記 <small>吉祥院</small>	九四四
六三〇	近衛忠房公高崎猪太郎へ書翰	九四八
六三一	口上覚	九四八
六三二	風説姉ヶ小路殿暗殺下手人	九四八
六三三	参考 寺島宗則自記抄	九四八
六三四	洋製汽船買入数	九五一
六三五	藝藩交易ノ顛末	九五一
六三六	九月十四日応接之大意	九五三
六三七	鎖港談判ノ大意	九五五
六三八	横濱風説南部弥八郎報告	九五六
六三九	日本貿易新聞	九五七

目 次

六四〇	高野山ヨリ御届中山忠光等ノ事件	九六〇
六四一	和州浪士長州邸へ入ル云々達書	九六二
六四二	京都報告兵庫開港期日	九六二
六四三	一揆討手ノ面々へ達書	九六二
六四四	海軍掛へ聞繕書面	九六三
六四五	英国軍艦渡来一件	九六三
六四六	英国新聞	九六五
六四七	二月十九日英国船将ヨリ差出書翰之大意	九六八
六四八	亥二月二十一日英吉利人へ御返翰	九六九
六四九	当月二十七日在京諸大名方へ春嶽様ヨリ御渡シニ相成候書付	九六九
六五〇	大坂三郷町触	九六九
六五一	大坂御城代ヨリ達書	九七〇
六五二	文久三年癸亥十二月薩摩ノ汽船ヲ下ノ關ニ擊沈メタル事実附十六節	九七一
六五三	落合直亮君ノ国事鞅掌ニ関スル事歴附十六節	九八六
六五四	玉里邸御所蔵書類集文久三年ノ部	九九七
六五五	親王席次第	一〇〇九
六五六	大樹上洛シ国家ノ治平ヲ計ルベキコト等	一〇〇九
六五七	文久年間張紙	一〇一〇

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久二年

〔原守縦二五・九センチ 横一八センチ
扉に、表紙の文字の外に、「元国事鞅掌史料」
(紙数九一枚)の記載あり〕

薩州記事卷一

一文久二壬戌歳八月廿一日嶋津三郎家来於東海道生麥村
英人三名英婦一名殺傷致候始末

第一

一松平修理大夫殿御家来届書写

第二

一島津三郎家来届書写

第三

一松平修理大夫殿御家来届書写

第四

一御老中衆ヨリ英国公使へ被相贈候御書簡写

第五

一御老中水野和泉守殿御宅へ薩州家来御呼出被仰渡候
御書付写

第六

一英国公使ヨリ外国事務宰相へ相呈候書簡写

第七

一同断

第八

一戊八月廿二日於御老中板倉周防守殿御宅御同人并水
野和泉守殿亞国ミニストル蘭国セネラルル応接書写

第九

一同月廿五日於横濱若年寄遠山美濃守殿佛国公使応接
書写

第十

一戊八月廿五日於横濱若年寄遠山美濃守殿英国公使心
接書写

第十一

一 御老中衆ヨリ英国公使へ被相贈候御書簡写

第十二

一 戊戌八月六日神奈川奉行組頭若菜三男三郎殿英国公使心接書写

第十三

一 風説

第十四

一 同断

第十五

一 同断

第十六

一 同断

第十七

一 於生麥邨嶋津三郎家来殺傷致候英人名前調書写

第十八

一 浪人為警衛ノ川崎宿ヨリ程ヶ谷宿迄番所被相建候調書写

書写

第十九

一 松平修理大夫殿御家来指出候書付写

第二十

一 英国岡士ヨリ外国事務宰相へ相呈候書簡写

第二十一

一 亜国ヨリ条約ノ義ニ付申出候書付写

第二十二

一 御老中衆ヨリ各国公使へ被相贈候御書簡写

第二十三

一 英国岡士ヨリ外国事務宰相へ相呈候書簡写

薩州記事卷一

一 文久二壬戌年八月廿一日島津三郎家来於

東海道生麥村英国人三名英婦一名殺傷致

候始末

第一

〔島津茂久、薩州藩主〕
松平修理大夫殿御家来届書写

近頃外国人共馬上二三行並へ、不作法ニ 御府内且端

々迄モ乘廻り、歩行ニテモ同様無行儀ニ行廻り候ニ付

テハ、修理大夫参府ノ節ハ勿論、実父島津三郎義往來〔久光〕

行逢候砌、兼々被 仰付置候趣モ御座候間、可成丈ハ

加勘弁罷在候儀ニ候へ共、万一先方ヨリ無礼法外相働

候者夫成ニハ難差置、左候時ハ对公辺奉 恐入候次第

ニ御座候、尤諸大名往来ノ儀ハ被定置候御法モ有之候間、無作法ノ儀無之様、兼テ各国長官ノ者へ被 仰渡置被下度、乍其上不法ノ儀共有之候節ハ、無是非御国威ヲ不汚様、時宜相当之処置仕ルヘク候間、其段ハ被聞召置度奉存候、此段申上候、以上、

(文久二年)
戊六月廿三日

松平修理大夫内

(江戸留守居)
西 筑右衛門

右六月廿三日差出、同月廿七日左ノ覚書被相渡候事、

覚

書面之趣ハ外国人共無礼候儀無之様、各国長官へ其筋ヨリ精々為相達置候儀ニハ候得共、素ヨリ習風モ異リ言語不通ニ候得ハ、精々穏便ニ取計可申候、其次第二寄候テハ、御国非道ノ儀モ出来可申ニ付、厚ク加勘弁取計候様可致候事、

右島津出府ノ次第ハ、官武通紀ニ相記候故略之、

第二

島津三郎家来届書写

嶋津三郎儀、昨廿一日東海道生麥村通行ノ節、先供近

へ外国人乗馬ニテ向ヨリ来候処、横合ヨリ浪人体ノ者

三四人、外国人へ何乎及混雜候体ニ付、三郎供方ノ者共引纏ヒ居候所、右浪人体ノ者外国人壹人ヲ打果シ、其余外国人ハ逃去、浪人体ノ者モ行衛相知不申、三郎供方ノ者所業ニ及候儀ニハ決テ無御座候、此段御届申上置候、以上、

八月廿二日

嶋津三郎使者

國分市十郎

右ハ神奈川奉行へ届候由、

第三

松平修理大夫殿御家来届書写

嶋津三郎儀昨日御当地出立仕候段ハ、御届申上候通ニ候、然ル処神奈川宿手前ニテ、異人トモ四人馬上ニテ行列内へ乗込候ニ付、手様ヲ以テ丁寧精々相示候得共、無体ニ乗入候ニ付、無是非先供ノ内足輕岡野新助ト申者兩人へ切付候処、右異人逃去候ヲ、右新助追懸行越、夫形何方へ差越候哉行衛相知不申候、猶精々探索致シ尋得次第、其節ノ時宜承届早速御届可申上候得共、先

八月廿二日

(神奈川)
程ヶ谷駅ヨリ申付越候、以上、

松平修理大夫家来

西 筑右衛門

右ハ御老中へ届候由、神奈川奉行へ届候書面ノ趣意
違ニ相見得申候、三郎ノ狼狽是ヲ以テ大略被察申候、
尤神奈川奉行ヨリモ右趣意違ノ由懸合候得ハ、先届
書ハ全ク誤リ候事ニテ、返シ呉可申由申聞候得共、
神奈川奉行不承知ニテ相返不申、趣意違ノ俣夫々相
違候由ニ相見得申候、

第四

御老中衆ヨリ英国公使へ被相贈候御書翰写

貌利太尼亞〔代理公使〕シャルセ・ターフェル

兼〔總領事〕コンシユル・セネラール

〔閣下〕エキセルレンシー

〔Edward St. John Meale〕
イ・シフト・シモン・ニール江

以書翰申入候、一昨廿一日、松平修理大夫厄介嶋津三
郎儀、川崎ヨリ〔下丸〕神奈川トノ間通行ノ節、右同勢ノ内ヨ
リ、貴国商人等へ手疵ヲ負セ、遂ニ絶命ニ及シ者モ有
之由、一昨夜神奈川奉行ノ報告ヲ得テ始テ承リ、甚氣
ノ毒ノ事ニ存候、最トモ修理大夫家来ヨリ届出候趣モ
有之、且即刻神奈川奉行ヨリ其支配向ヲシテ、嶋津三

郎相札セシ所、申立方不都合ノ儀モ有之候ニ付、猶篤
ト糺明ノ上委細ニ申入ヘク候、既ニ昨日丑・蘭商公使
へモ早速面会及ヒ申談候趣モ有之、夫々処置及ヒ候積、
就テハ猶追々可申入候得共、此段不取敢先申入置候、
拜具謹言、

文久二戌年八月廿三日

〔安宅、老中、寛野藩主〕
脇坂中務大輔花押

〔忠精、老中、山形藩主〕
水野和泉守全

〔勝俊、老中、備前松山藩主〕
板倉周防守全

第五

御老中水野和泉守殿御宅へ薩州御家来御呼出被仰渡

候御書付写

当時品川沖ニ外国ノ舟々罷在、互ニ往復致シ候様ニ付
キ、修理大夫所持ノ蒸氣船へ、外国人上船致シ候儀無
之共難申候間、外国奉行支配ノ者并ニ通詞ノ者、品川
千秋丸へ為乗組、昼夜共見張罷在候、若シ外国人共右
修理大夫船へ可乗組体ニ候ハ、右ノ者共押送り船ニ
テ差留メサセ候積、外国へ相達置候間、右ノ趣修理大
夫乗組ノ者共へモ為相心得、右様ノ儀等有之候ハ、
外国奉行支配向申談穩ニ取計、不都合ノ儀出来不致様、

同人家来呼出シ無急度可達事、

帆柱へ紋ノ印、艦ノ方へハ日本ノ印可立事、

右ハ生麥村一条ニ付、外国船ヨリ薩州船へ乗組、苦

情申出候事モ可有之トノ御主意ヨリ、本文ノ通被

仰渡候由ニ相見得候事、

第六

英国公使ヨリ外国事務宰相へ相呈シ候書簡写

西曆千八百六十二年九月十五日横濱不列顛使臣

館ニテ

外国事務宰相台下ニ呈ス

薩州侯家老即伯父ノ粗暴ナル家来ニ、昨夕方不列顛人

ニ対シテ惡ムヘキ所業ヲ為シテ、其一名ヲ殺害シ、外

兩人ヲ傷ケタルコトニ付、余復ヒ日本政府ノ申訳ヲ乞

フ、

台下此非道ノ所業ヲ為シタル事件、及ヒ其人ヲ既ニ知

リ給フ事疑ヒナシ、然レトモ余台下ニ、其首タル個条

ヲ御簡易ニ告ルコト要用ナリ、

(William Marshall) (The oddhrope Charles Clary) (Charles Lanex Richardson)

マイチャル、カラーク、リチャルトソンノ三名、昨夕

方一貴女ボラデイルヲ誘ヒ、十分自在ニ遊歩スルヲ得

ヘキ東海道川崎へ、馬ニテ進行セリ、

神奈川ヨリ二里ノ所ニテ、一名ヲ從ヘル先番ニ逢リ、

是レ薩州侯家老即祖父ノ先番ナル事明ナリ、

右ノ先番ノ者甚無礼ニ、三人ノ者ハ引退ケト命セリ、

此三人不快ナルコトヲ避シカ為メ引退ケリ、

此時三人ノ者ムゴク襲レタリ、而シテ其貴女ハ劍ヲ以

テ追撃サレケレトモ、驚キ其場ヲ遁レ去レリ、

マイチャル、カラークノ二人ハ、恐怖スヘキ傷ヲ受ケ

タリ、

リチャルトソンハ數ヶ所ニムゴキ傷ヲ被レリ、而シテ

地ニ倒レ已ニ死シタレトモ、乗物ニ乘リタル高貴ノ士

官ノ差図ニテ、數ヶ所ニ傷ヲ被レリ、

其行列人ハ、其惡事ノ首長ト共ニ行列ヲ進メ行ケリ、余

不列顛人ヲ殺害セル此ノ非常ノ所業有シコトノ為メ、

日本中ニ響キ渡ル程ノ緊シキ申訳ヲ、日本政府ニ望事

ヲ速ニ台下へ告ケテ、時ヲ移スコトナシ、但此所業ハ、

此国ノ非道ナルハ住人ノミナラス、權威ヲ与ヘタル粗

暴人ニシテ、且殺害ヲ好メル番兵ノ助ケニヨツテ行フ

所也、最其非道ナル所業ノ為ニハ、其頭目ニ立ツ所ノ

人其申訳ヲナス事、猶家臣ノ誤ヲ其主人是ヲ詫ルカコ

トシ、余次ニ掲ル過チヲ、台下注意シ給ハンコトヲ請

フ、昨日台下ヨリ余ニ告知シテ、本月十五日勅使京師ニ帰ルニ付、当日及ヒ翌日、不列顛人等東海道ニ出行ヘカラスト請ヘ給ヘリ、

余直ニ其書ノ回答ヲ出シ、是ヲ和蘭文ニ訳シテ送ラントセシニ、不図危難モアラント云ヒ給ヘシ日ノ前ニ、此ノ惡ムヘキ所業ヲ為セリ、粗暴非道ノ男子等外国人ニ行逢フ時ハ、如何ナル事件ヲ引出シモ計リカタキヲ能ク乍知、其数多ノ旅行ヲ政府ヨリ許シ給ヘテ、此非道ノ人ヲ警メ、或ハ制スル大君ノ番兵一人モ路上ニ居サルヲモ、又茲ニ述ヘサルヲ得ス、都テ右様ノ事ハ甚タ惡シキ所業ナリ、

無罪ノ不列顛人ノ血ヲ以テ印セル事、斯ク陸續ト打続キ、罰ヲ受ケサル悪人ノ為メニ、恐ルヘキ嚴刑及ヒ償ヒヲ当今定ルハ、余カ職掌ニアラス、此事ハ我政府ノ裁判所ニ決定スヘシ、

是故ニ今余確然ト、日本政府ニテ此殺害人ヲ捕ヘ、是ヲ檻ニ守リ給ハン事ヲ願フ、若シ薩摩侯ノ家老即伯父ヲ要トスルコトアラハ、彼レヲ見出ス事疑ヒナシ、日本政府ニヲキテ、此度ヨリモ猶重大ニシテ、尤容易ナラサル難洪事件ヲ防ク為メノ予備ノ所置トシテ、余台

下ニ下件ヲ請フ、則横濱ヨリ神奈川迄ノ道ヲ乞ヒ、不列顛人等條約面ニ從ヘテ、旅行シ得ヘキ諸所ヲ守護スルタメ、仮令其数多キヲ要ス共、常ニ強キ番兵ヲ備ヘタル多ノ番所ヲ、甚タ近キ距離ニ設クヘキ命ヲ、速カニ下シ給フヘシ、

此処置ヲ為サ、ル時ハ、此後起リタル事ハ日本政府ノ拘リ合ヒトナルナリ、

此処置ヲ施シ設クタルタメ、余台下ニ一週日ヲ許スナリ、恐惶敬白、

不列顛女王殿下ノ

シャルセタフェール

イ・シント・シヨン・ニール手記

日本在留書記官

エル・ユーステン訳
(Richard B. Brown)

第七

英国公使ヨリ外国事務宰相ヘ相呈候書簡写

昨夕英人ヘ乱暴ヲ仕懸ケタル者有之ニ付、我又日本政府ヘ嚴敷談判ニ及フ也、右乱妨ニアヒタル者、一人ハ死シ、二人ハ傷ヲ被レリ、皆薩摩ノ国司ノ伯父ニテ、其後見ヲ為ス人ノ家来ノ暴虐ナル者ノ所為ナリ、

右異変有之事、又其暴虐ヲナシタルモノ等ハ、既ニ御承知ハ有ル事相違ナシト知ル、我又其大略ヲ告ケサルヲ得ス、マイチャル、カラーク、リチャルトソンノ三氏、昨夕ボラタイレ氏ノ内室ヲ伴ヒ、馬上ニテ川崎ノ方へ罷越候途中、神奈川ヨリ二里計リ先ニテ、何人欽存セス一組ノ行列ニ行逢候、後ニナリテ始テ薩摩ノ国主ノ叔父、且後見ナルコトヲ知レリ、其時彼等無法ニ退キテ、帰ヘキ由命セラレケレハ、三氏ノ者共不快ナル場合ヲ避ントシタルニ、忽乱妨ニ攻懸タリ、於是婦人ハ刃ノ下ニ傷ヲ被リテ逃ケ、マイチャル、カラークノ二人ハ深手ヲ負ヒ、リチャルトソンハ数多ノ傷ヲ被リ斃レ死シタルニ、輿中ノ大将号令シ(全ク風説)、猶又數回數所ニ傷ヲ被ラセ、其俣行列ハ行過タリ(久光公親話記参照)、

英国臣民ノ是迄殺サレタルハ、此地ノ住民ノ暴虐ニアラス、或ハ取締ヲ為スヘキ警衛ノ士ヨリ出テ、或ハ又臣下ヨリモ出タリ、斯ク暴虐ナル事ノ打続キシニ付、日本政府へ日本中警キ渡ル程ノ嚴敷掛合アルヘシ、但其事ヲ只今告知サントシテ、爰ニ時ヲ費スハ無益ノ至ナリ、

只我爰ニ論スヘキハ次ノ事件ナリ、昨日閣下ノ報告ニテ、第十五日ニ帝ノ使節、都ニ帰ラントスル事ヲ知ラセ、且其日并其翌日ハ、英人等東海道ニハ出サルヨフ申タリ、我其節直ニ返書ヲ認メ、蘭文添管ヲ為ントシタル折柄、右異変ノ起リタル故ニ、此日ハ申越レシ約束ノ日ヨリハ一日前ニテ、即文通ノ有之シ日ナリ、其俣旅行ノ者アリシハ、是政府ニテ外国人ト出逢ヒ、大變ニ及フベキコトヲ察シテイタシタルナリ、加之此時大君ノ兵士番士ノ類、一人トシテ暴人ヲ戒メ捕フル者アラス、

右ノ次第ハ我恥ト為スベキ事也、但英国無罪ノ者ヲ殺シタル事度々ニ及フヲ知ル、コレニ報スル嚴刑ヲ論スル事ハ我任ニ非シ、本国政府ニ裁判アルヘキ事也、我強テ望ムニハ非サレト、只今ノ内殺セシ咎人ヲ召捕ヘ、日本政府ニテ禁錮シ置レ度事ナリ、薩摩ノ国主ノ叔父ハ招キ次第、無相違来ルベシ、

日本政府ノ此上ノ難義無之様、何卒直ニ命ヲ下シ、勇兵ヲ撰ミ、常詰ノ番所ヲ置キ、其數何程ニテモ厭ハス、成丈距離ヲ近クシ、英人往来スル所ハ是ヲ警固アルベキ様、我信実ニ望ム所ナリ、

若シ右ノ事ヲ施シ行ヒタマフ事無之ハ、向後ハ日本政
府ニテ、自ラ随意ニ所置シ給フヘシ、恐惶謹言、

猶以此事ヲ施シ行ハンカ為ニ、七日間猶予スヘシ、

イ・シント・シヨン・ニール

ハフムチャルジーアフハ
(カ)
(エル・ユーステン)

イルシル・エウシテン

自筆

右両書簡旨意同シテ字句異ナリ、今参考ノタメ合記

ス、

第八

戌八月廿二日於御老中板倉周防守殿御宅御同人并水

野和泉守殿亞国(Pran)ミニストル蘭国セネラール応接書写

一一応接抄畢テ、

外国人

一先日御逢ノ儀被仰下候処、御同役様ノ内、御不快ノ

方モ有之候趣ニテ、御断ニ相成、此程ハ如何被為入

候哉、

御老中

一先日申入候処、其砌兩人引込故両度迄断ニ及ヒ、氣

ノ毒ノ事ニ候、一人ハ出勤ニ候得共、(編按老宅)中務大輔ハ未

タ全快不致候、

外

一御病症ハ如何様ノ儀ニ御座候哉、コレヲ病ニテハ無

御座候哉、

老

一最初ハ腹痛ノ処、当節ハ疝痛ニ相成、全コレヲ病ニ

ハ無御座候、

外

一外国御係リ御三人様ニテ、此席へ御列座ノ御方ハ、

誰人様ニ御座候哉、

老

一上座ハ水野和泉守、次ハ板倉周防守、其次ハ参政遠

(友詳、若年寄、苗木藩主)
山美濃守・稲葉兵部少輔ニ候、右兩人ハ初テ面会致

シ候、(堀之敏、若年寄、推谷藩主)出雲守同様ニ懇親被致度、ハルリス在職中ハ

格別懇親致シ候故、同様懇親致度候、

外

一御懇親ノ所ハ何レモ替リ候儀ハ無之候得共、万一事

敗候儀出来候テモ、私ノ罪ニ無御座候、

老

一先日両度迄断ニ及候間、其後面会ノ儀可申入候ト存、

終ニ今日ニ及候、

外

一此頃御逢相願候ハ、全ク外国事件ノ事ニ御座候、

外

一亜国并各国ミニストル在留中、其国ノ外国事務執政ニ面会ノ儀申入候節、平日ハ兎モ角、非常ノ節ハ時計ニテ五分時程前ニ申入候得ハ、面会致シ候儀ニ御座候処、今日ノ如キ節ニ御逢相願候ハ、早速御逢被下候様仕度候、

老

一差懸候儀故、不都合ノ儀モ有之候処、強テ面会致候趣ニ付、面会致候、

外

一從是申上候ハ、私并和蘭セネラールヨリ申上候間、篤ト御了解被下度候、

外

一右申上候ハ、昨日東海道筋ニ於テ變事御座候間、其儀一通リ申上候、

外

一昨日午後、英国ノ者四人内一人ハ女ニテ、神奈川ヨ

リ三里程隔リ居候場所ニテ、薩州藩ニ出會申候処、

供人数モ多勢ニ御座候間、道傍へ片寄り扣居候、尤

英人共ハ武器等携ヒ居不申、道傍へ扣居候処、供連

ノ内ニテ何欵騒立候様子ニ御座候間、心付右ノ様子

ヲ見候テ、婦人へ先ニ逃去ル様ニト申付候内、供ノ

内ヨリ刀ヲ拔連浪藉ニ及候、右女ノ頭ノ所ニ刀当リ、

帽子并髮迄モ切落シ、狼藉者男子ノ方ニハ掛リ不申、

却テ婦人ノ方ニ掛リ浪藉致シ候(風説)方、甚卑怯

ト被存候、且婦人ヲ保護致候者一人殺害ニ遇ヒ申候、

外兩人ハ深手ヲ負候故、其ハ亜国岡土所へ駈込候テ

助リ申候、右岡土所無之候得ハ、兩人共絶命ニモ及

候儀ニ可有之、右ニ付亜国商人兩人程英ノミニスト

ル方へ駈付、事件先知ニ及候、其英ミニストル方へ知

ラセ候者一人立歸リ、神奈川上陸場ヨリ亜国岡土所

へ参リ候途中、又々一人拔劍ニテ狼藉ニ及ヒ候(誤

説)故、右商人ハ短筒ヲ持居候間、是ヲ向候ニ付、

難ハ遁レ申候、其内直ニ亜国岡土所ニ国旗ヲ逆シマ

ニ引揚ケ、是ハ異變ノ事御座候節、合図ニ致シ候印

ニ御座候、右旗見受候哉、蘭ノ軍艦船將神奈川ノ方

ニ参リ候処、右モ東海道筋ニ差懸リ候故、殊ノ外混

雜ニ付差扣候処、又々其者へ刀ヲ抜カケ候者有之候故、右船將引戻シ、日本ノ附添人同道ニテ、岡土所

辺山手ノ方相廻リ參申候、其ノ後ニ至リ佛国ノミニ

ストル護卒召連、横濱ヨリ神奈川岡土所マテ參リ、

東海道ノ通りニ差懸リ候処、乗物ニ乘リ候者ニ出逢

候処、其者刀ヲ拔、駕籠ノ内ヨリ飛出申候、是ヲ見

受、佛国ノミニストルノ護衛ノ卒、ミニストルヲ囲

ヒ候節、刀ヲ半分程抜カケ候ヲ、皆抜放シ襲ヒカ、

リ候様ナル所為ヲナシ候(薩人ニハアラス)テ家ニ欠

込候間、其所ニ向ケ短筒ヲ打掛候処、手疵ニテモ負

ヒ候哉、後ノ処相分リ不申、一体ノ所ハ先右之通ニ

御座候、夫ニ付私共心付候処ハ、第一東海道往還ハ

道中広ク御座候得ハ、片寄扣居候間、何モ狼藉致ス

筈ハ無之ト奉存候、且又素ヨリ右ノ狼藉ヲ受候次第

モ無御座、前申上通四度迄狼藉ニ及候、右事件ニ付

御手前様ノ方ノ御聞込ノ処、如何様ニ御座候哉、一

ト通相伺度候、

老

一 今般神奈川ヨリ申越候処ニテハ、途中ノ事ニテ、奉行所ヨリハ懸隔リ居候事故、未委敷事ニモ至リ兼候

間、外国奉行モ早速横濱表へ差遣シ、事実取調候事
ニ有之候、

外

一 夫ニテハ、最初英人共ノ狼藉ノミ御聞込ニ御座候哉、

老

一 夫ノミニテ、其後ノ儀ハ只今初テ承候、

外

一 最初ノ儀文ヲ御聞込ニ候得ハ、如何様ノ御所置ニ相

成候哉、御召捕ニモ相成候哉、

老

一 其事ニ付委細ノ所承度候間、外国奉行差遣候事ニ候、

一 鳴津三郎ハ東海道ヲ上リ參リ候故、何レ外国奉行横

濱ヨリ帰府致シ候ハ、一件ノ模様モ相分可申候、

外

一 此儀ハ一大事件ニ御座候間、暫時モ御捨置ニ相成候

テハ、狼藉致シ候者遠ク逃去可申候、

老

一 是迄〔東京都港区〕東禪寺一条モ有之、引続右様ノ次第有之候テハ、

政府ニテモ甚心配被致候間、何レニモ近々所置ニ可及候、

外

一 一体右様狼藉殺害候者ハ、早々御召捕ニ相成、御罰ノ方モ可有之候処、其俣御捨置ニ相成候テハ、無余儀外国人ノ手ヲ下シ候様相成可申候、

老

一 夫故早々召捕、罰シ方等致度候得共、彼ハ追々道中上リ參リ候儀故、甚心配致シ候、

外

一 差向候テ、狼藉人御召捕ニ相成候儀ニ可有之、右召捕ノ御手配伺度儀ニ御座候、

老

一 夫モ追々彼等ハ逃去候故、一時ニ召捕候ト申儀ニハ至リ兼候間、其段篤ト了解有之度、厚志ノ取扱有之候様致度候、

外

一 和蘭公使并私其他各国公使等御国ニ在留罷在候者、都テノ懇親ヲ保護仕候職掌ニ候、此度ノ事件、殊ノ外難事ニ及可申哉モ難計奉存候、就テハ右難事ヲ避候タメニ、今日ノ御對話相願候儀ニ御座候、

老

一 厚意ノ段忝存候、

外

一 明日横濱へ罷越シ、各国公使へ種々相談可仕候得共、先ハ狼藉御召捕相成候儀ハ、早速為承度奉存候、

外

一 明日横濱へ罷越シ、未御召捕ノ御手續ニモ不相成、各国公使ニ相話シ候ハ、御国ノ不都合ニモ相成可申、殊ニ昨夕軍艦二艘入津イタシ、当時同港ニ於テ七艘ノ軍艦碇泊罷在候、且最前申上候通り、同所モ殊ノ外人気騒立居候間、万一右等ノ事ニテ、東海道ヲ断切候様ノ場合ニ至リ候テハ、実以大変ノ事ニ御座候、

老

一 左様ノ場合ニ相成候テハ、実ニ大変ノ事ニ有之候、右等ノ始末ニ至ラサル様周旋厚ク頼入候、尤召捕方ノ儀ハ精々手ヲ尽シ可申候得共、今直ニ召捕候トノ訳ニハ難至候間、左様心得被居度候、

外

一 固ヨリ右東海道筋断切候様トノ儀ハ、私共ノ所存ニハ無之、全ク申上候通同所人心騒擾致シ居候故、万

老

一右様ノ場合ニ至リ可申哉モ難計奉存候間、明日私
共同所へ罷越候ハ、右ヲ取鎮ノタメニ御座候、

外

一千万辱存候、最前申入候通、何分ニモ今日ヨリ召捕
方へ為取掛候ト申、手続ニハ至リ兼申候、

老

一此度神奈川表ニ於テ狼藉者有之候ニ付、私共急速罷
越候儀ニハ無御座、全ク右人心騒立候儀ニ付、罷越
候趣意ニ御座候、夫々御罰シ被成可申トノ御請合ニ
御座候得ハ、其御口証ヲ以各国公使へ申談候得ハ、
人心取鎮方都合ニモ相成可申哉ト奉存候間、此儀御
確答奉伺度候、

外

一素ヨリ召捕候儀ニハ候得共、今日直ニ召捕候ト申訊
ニハ參リ兼候、何レニモ召捕相罰シ候儀ハ必然ノ事
候、可然周旋頼入候、

一只今ノ処ニテハ、未何者ト申儀相分兼候哉ニモ御座

候得共、弥薩州ノ家来ニテ、其者共ノ名前等相分り

候上ハ早々召捕、必夫々御罰シ被成候哉、其辺ノ所

老

跪ト御受合ノ御挨拶相伺度候、

外

一何レニモ薩州之方相糺、其者共ノ名前等相知候上ハ、
必相罰シ可申候、

老

一其罰ハ何レニテ御罰シ相成候哉、

外

一政府ニテ相罰申候、

老

一左様ノ儀ニ御座候得ハ、各国ミニストル総名代トシ
テ相伺候、弥薩州ノ家来ト相極候上ハ、必御罰シ被
成候儀御受合被成候哉、

外

一罪人相極候上ハ必相罰可申候、

老

一只今申上候ハ、及狼藉候者薩州人ニ不限、何者ニテ
モ御罰シ相成候哉、其処猶伺度候、

一素ヨリ薩州ノ家来ニ不限、無謂人命ヲ絶候様ノ振舞

有之輩ハ必罰シ候ハ、当然ノ事ニ御座候、

外

一左様被仰聞候得ハ、狼藉者逃去不申様、御所置被為在候哉、其所尚又何度候、

老

一夫ハ只今申入候通、不逃去様ニトノ儀、所置ハ外ニ無之、薩州方へ申達シ相糺シ候得ハ、必ス相知レ可申候、

外

一夫ニテハ京都又ハ国元着ノ上ニテ、御召捕相成候儀ニ候哉、

老

一左様ニテハ無之、当所ニ屋敷有之候間、此方ニテ相糺シ候儀ニ有之候、

外

一只今御召捕方ノ御所置相成兼候トノ儀ニ候得ハ、右ノ者トモ弥遠隔相成、探索出来兼候様相成可申哉ト奉存候、

老

一左様ニハ候得共、当地屋敷ノ方ニテ相糺シ候事故、狼藉者距離ノ遠近ニ不拘、夫々取計方ノ手続モ有之

候、且假令只今早速召捕方差向候トテ、大勢ノ人数故切害及候哉相知不申候、

外

一神奈川表ヨリ為知不參内、途中ヨリ申来候者有之、右ハ親敷其所ヲ見受、嶋津三郎ト申者ノ由、其者ノ供ノ内ヨリ抜劍狼藉ニ及候趣、左候得ハ右三郎ヲ御吟味不相成候テハ、狼藉人名前相分リ申間敷候、

老

一尤ニハ候得共、同人儀ハ身柄ノ者ニ有之、召捕候儀ハ出来不申、何レニモ其主人方へ申達シ、家来ノ者ヲ呼出シ相糺候儀故、三郎ヲ不相糺候トモ、不相知儀ハ無之候、其許ニハ兼テ承知可有之候得共、薩州ト申所ハ兎角人氣不宜風ニ有之候、

外

一薩州公ハ江戸ニ被為在候哉、

老

一國許ニ居候、

外

一此召捕方ノ儀、御所置御座候以前ニ、薩州公ニ御相談相成候哉、御相談無之候テ御召捕ニ相成候哉、

老

一是迄モ何レニモ談シ不申候テハ、数百人ノ内何ノ誰ノ所為ニ候哉不相知候間、一応談シ候上ニテ召捕方ニ取懸候、夫モ亡命致シ候者ニテモ有之候得ハ、其者ニ疑ヒ懸リ、召捕方手続ニモ相成候得共、左様ニ無之候テ、突然召捕候儀ニハ至リ兼候、乍去国許迄相談申遣候ニハ無之、在府家来ノ内ニ相糺シ候儀ニ有之候、

外

一留守居ノ者ハ、三郎ヨリハ高官ノ者ニ御座候哉、

老

一三郎ヨリ高官ノ者ハ居不申候得共、政府ヨリ沙汰及候得ハ、嚴敷探索方取計候事ニ御座候、

外

一左候得ハ、留守居ノ者ニテ取扱候儀ニ御座候哉、

老

一左様ニ候、右へ談候得ハ、其者ヨリ国許へモ申遣候儀ニ有之候、

外

一明日横濱表へ罷越、御召捕方御所置ノ処相嘶シ可申

候得共、一旦騒立居候事故、右等ノ事ニテ十分ニ無

之候間、折合可申哉難計、尤第一ノ所ハ、英国ノ方ニ御座候、罪人御召捕方御所置可有之ト奉存候、其次ハ佛・亜・蘭ニ御座候、是等モ夫々御召捕方被成候儀ト奉存候、

老

一明日ノ所ハ厚意ヲ以取計之処、何分頼入度候、何カ所置振ノ処、十分トハ被思間敷候得共、前申入候次第故、差向ノ所外ニ致方無之候間、格別厚意ノ廉ヲ以、可然取鎮方周旋致呉候様頼入申候、

外

一明日早天神奈川表へ參申候、陸行仕候得共往還ハ参リ不申、裏通々行可仕候、

老

一左様ニ候哉、扱一人即死・式人手負ノ趣キ、婦人等ハ如何有之候哉、

外

一即死ノ者ハ、英ノコンシユル直ニ見分仕候処、散々ニ切ラレ、外兩人ハ深手ノ趣、助リ可申哉難計、婦人ハ極淺手ノ由ニ御座候、

老

一 実ニ氣ノ毒ノ儀ニ有之候、

外

一 今朝御達シニテ、神奈川コンシユル所へ護衛ノ者、
夫々御手当被下候趣相伺、難有奉存候、

老

一 其儀ハ外国奉行へ精々申遣シ、神奈川奉行相談致シ、
嚴重ニ可致ト申付置候、

外

一 両人共明日神奈川表へ罷越シ、兩三日彼地逗留仕可
申、亞ミニストルハ帰府後御面会可申上候、

老

一 帰府ニ候ハ、早々面語可致候、

外

一 蘭セネラールハ先日書簡差上置候間、右御返答相持
居候、

老

一 御返簡今日指遣シ可申積リニ候処、^(右カ)箇様ノ儀ニテ差
遣不申、幾日頃宜候哉、

外

一 幾日ニテモ日限ハ被仰下候様仕度候、

老

一 左候ハ、此事件ニテ混雜モ致シ居候事故、何レ是
ヨリ可申入候、

外

一 亜ハ早々御逢被下候哉、

老

一 是ハ早々面会可致候、

外

一 日限ノ儀ハ幾日頃宜御座候哉、

老

一 廿七日・廿九日ノ内ニ可致候、

外

一 蘭ハ幾日頃御逢被下候哉、

老

一 亜国ノ方先約ニ付其後ニ可致候、来月二日・三日ノ
内ニテハ如何ニ候哉、併シ亜国ノ方廿七日ニ御座候
ハ、廿九日ニテモ宜敷候、

外

一 亜ハ廿九日ニ可相願候間、蘭ハ晦日ニ相願度候、

老

一承知致候、何時ニ候哉、

外

一兩日共第九時ニ罷出可申候、

老

一前申入候通、昨日ノ事件ニテ和親ニ差響キ、是カ為
メ東海道ヲ取切候杯ノ儀ニテハ甚心配致シ候間、夫
等ノ儀無之様精々周旋頼入候、

外

一今日御逢相願候ハ、騒立候ヲ取鎮候為メニ相願候儀
ニ御座候、東海道ヲ必取切ト申訳ニハ無之、若シ左
様ノ儀ニモ至リ候テハ、大變ノ事ニ御座候、昨日ノ
便ニテ右様心付候間、申上候儀ニ御座候、

老

一何レニモ右様ノ儀無之様、厚意ノ取計頼入候、

外

一東海道ヲ取切候ト申儀ハ、各国公使ヨリ申出候儀ニ
ハ無之、居留ノ者共夫等ノ談ヲ唱ヒ候故、万一右様
ノ場合ニ至リ候テハ心配ノ儀ニ付、申上候事ニ御座
候、

老

一左様ニ候哉、

老

一過日ハ珍敷果物等ヲ被贈辱存候、

外

一若シ此度ノ一条ニ付、神奈川ヨリ緊要ノ事件御申越
ノ儀御座候ハ、早々為御知被下度、此節ノ儀故如
何様ノ事有之候哉モ難計候、

老

一承知致シ候、右ハ両所へ可申遣哉、一所へ申遣候テ
宜候哉、

外

一両方へ被仰下度、御書簡ニハ及不申、御口上ニテ宜
敷御座候、

老

一承知イタシ候、

外

一遺憾ト申ハ今日御談申上候儀十分ニ無御座候、

老

一此方ニテモ左様ニ存候得共、何分事実尽シ兼候間、

夫等ノ処能ク了解有之度候、政府ニテモ格別心配被致、夫々所置及ヒ候、其間右様騒立候儀無之様、厚ク被合周旋願入候、

外

一 承知仕候、
右畢テ退座、

第九

戊八月二十五日於横濱若年寄遠山美濃守殿佛国公使
応接書写

一 一応挨拶畢テ、
若年寄

一 過日異変ノ儀ニ付テハ、外国奉行ヲ以申入置候処、
尚又尋問致度罷越候、

佛公

一 此程神奈川宿往還ニヲイテ、不慮ノ儀差起候ニ付、
只今政府へ差上候書簡取認、反訳取懸中ニ有之候間、
右大意可申上候、此程変事ノ節、自国護卒共多人数
右場所へ罷出候ニ付、私モ出張致シ、精々取鎮方差
凶ニ及ヒ居候得共、往還筋殊ノ外混雜紛擾中、右護
卒ノ内運上所役人ヲ狼藉者ト認誤致シ、砲発手負ノ

趣実以痛傷スヘキ事ニ有之(薩人ニ非ス)、甚氣ノ毒ノ事ニ存候間、其訳柄巨細相認、御詫申上候積ニ有之候、

若

一 被申聞候趣相分候、其混雜ノ場合心配ノ事ト察入候、
併シミニストルニハ怪我モ無之、大慶存候、

佛

一 尤其節ノ変事ニ付テハ、私儀十分精神ヲ尽シ取計リ候事ニテ、英国人殺害被致候ニ付テハ、各国人一同騒立、已ニ神奈川宿ニヲイテ、戦争ニモ可及イキホヒ有之候処(高崎五六カ云フ処モ如此)、私儀罷出取鎮方取計候ニ付、其場ハ其俣ニ相収リ候得共、若左様モ無之候ハ、忽チ一層ノ大事ニ及ヒ可申候、

若

一 厚意ノ取計忝存候、

佛

一 固ヨリ私心付ノ丈ハ無腹蔵申上候素意ニ有之、乍然無罪無過ノ者モ妄殺手疵及候、乱妨人ノ儀ハ最モ以テ悪事ニテ、私ニヲイテモ甚不快ニ存候、

佛

一自國護卒ノ者ヨリ日本役人ヘ手負セ候ハ、実以氣ノ毒被存候、就テハ考ヘ候ニ、右様ノ異変サヘ無之候ハ、如是ノ事ハ有之間敷ト存候、甚残念ノ至リニ存候、

若

一全誤認致シ手負セ候事ニテ、間違ニ相違無之上ハ無余儀次第ニ相聞候、尤疵ヲ蒙リ候者ハ、其許自身被見廻候ヨシ、手厚ノ取扱ニ存候、

佛

一自國護卒ノ者ヨリ日本役人ヘ手負セ候ハ、実氣ノ毒被存候、心中ヨリ相生シ候事ニテ、私ヘ及狼藉候ヘハ見舞等ハ不仕候、

若

一被申立候趣細閣老ヘ可申通候、今日ハ尋問迄ニ付、差向候談判モ無之候ハ、此迄ニ可致候、

佛

一此程變事ノ儀ニ付、外国奉行モ罷越候上ハ一応申立置候得共、尚申上候当通行致シ候者ニテ、重立候者有之カニテ、其全勢ノ中ヨリ乱妨人差起リ候儀ニ付、其重立候者何レニモ、右ノ惡事ハ引受申訳不仕候テハ難

相成、就テハ政府ニ於テモ薩侯ヘ御達シ有之、御取

調有之候趣ニ承知仕候、此度殺害ニ逢候者ハ英人ニ付、同國ミニストルヨリ委細可申立候得共、向後各

國在留ノ者安堵ノ商業相宮、無懸念遊歩等出来候様御衛護被成下置、是迄東海道上下往還ノ大名行列相

立通行致シ、其砌行違候ハ、無礼ノ様ニモ存取、不都合ノ儀相起リ候間、行違不申様仕度、已ニ先頃兩

都開港延期ノ儀モ御談判行届候上ハ、外国人居留遊歩ノ場所ハ、先ツ此処ニ候得ハ、遊歩等ハ自在ニ仕

候様不相成候テハ、狹隘ノ御所置ニテ、在留モ窮屈ニ相成候間、已後八十里規程内番所等マゴ補理、且標識

ノ有之候番兵御差置相成、緩急ノ節応援仕、外國人共安堵致シ遊歩相成候様御所置被下度相願候、右標

識無之候テハ、矢張狼藉人ト誤認致シ、此程ノ如キ不都合ヲ相生シ可申候間、申上候事ニ候、

若

一素ヨリ英國公使ヨリ申立候趣モ有之候ニ付、番所等建候事ニ有之候、

佛

一何レ此後ノ一週日中ニハ江戸表ヘ罷出、閣老方ヘ御

逢相願候積ニ候間、其節右等ノ儀ニ付、巨細御談判
可申上、今日ハ態々御尋問被下難有奉存候、尤月曜
〔マ、〕
并我八月・火曜同日・兩日ノ内江戸表へ罷出、出都ノ儀
申立候間、其節御逢同様御取極被仰下候様仕度候、

若

一被申立候趣閣老へ可申通候、

右畢テ退座、

第十

戊八月廿五日於横濱若年寄遠山美濃守殿英国公使

接書写

一一心挨拶畢テ、

英公

一御名前何度候、

若年寄

一遠山美濃守ト申候、

英

一先日ノ儀ニ付、態々御出張被下候哉、

若

一左様ニ候、

若

一此度ノ儀ニ付書簡ヲ差出候処、右返簡等取調居候テ

ハ手間取候ニ付、不取敢拙者尋問方罷越候、

若

一嶋津三郎家来ノ内、此程乱妨致シ候者其呼返シ可申

旨、修理大夫重役へ政府ヨリ御沙汰有之候、

英

一右乱妨致シ候者、江戸へ御呼寄相成候事ニ候哉、

若

一左様ニ候、

英

一左候得ハ、右罪人ヲ修理大夫ヨリ差出シ候ヲ、御待

被成候儀ニ候哉、

若

一三郎家来ノ者呼戻シ、其上ニテ糺明致シ候積ニ有之

候、

英

一不残御呼寄相成候哉、

若

一三郎ハ大家ノ厄介ノ事故、家来モ多人数ニ有之、不

残呼寄候事ニハ無之候、

英

一左候得ハ、是非トモ御呼戻シ相成候事ニ候哉、

若

一右ハ修理大夫家来へ相達置候儀ニ付、是非共差出可申候、

英

一凡幾日頃迄ニ引渡シ相成候哉、

若

一朧ト期限ハ不相分候得共、遠カラス差出候運ヒ可相成候、

英

一右乱妨致シ候者ハ三郎家来ニ候得ハ、三郎始メ御呼戻シ可然儀ト存候、

若

一三郎御呼戻シニハ不相成、家来ノ内呼出シ候事ニ有之候、

英

一只今相伺候ハ、過日狼藉致候者共ヲ下知致候三郎ヲ御罰シ被成候哉、

若

一右ハ篤ト糺明ノ上ニテ、三郎下知致候ニ相違無之候

ハ、呼戻シ、相当ノ所置モ可有之候、

英

一御罰シ被成候場所ハ何処ニ候哉、

若

一右ハ罰シ方次第様々有之候事故、糺シ方相濟候上ナラテハ難差極候、

英

一御罰シ方ノ儀ニ付テハ、追々可申上儀モ有之候得共、先当今ノ所ニテハ、犯人御探索御召捕方緊要ニ候、

英

一御見出シ兼相成候様成行不申様致シ度候、

若

一右ハ政府ニヲキテモ精々糺明致シ候積ニ付、見出シ兼候儀ハ有之間敷候、

英

一一只今御沙汰ノ趣ハ相分リ申候、過日指上候書簡ノ御返答、今日御口上ニテ可被仰聞トノ趣、委細相伺申度候、

若

一來書中、神奈川遊歩十里程内番所取建候トノ儀ハ、此方ニ於テモ懸念ノ場所、就中東海道筋ノ間、六郷川ヨリ以南程ケ谷迄ノ間、要所々々ニハ取建候積リニ候、尤一週日中ニハ所詮間ニ合申間敷候、

英

一何レ来ル月曜日我八月廿九日出府致シ、其翌日水師提督同道ニテ御逢相願、右番所等ノ儀御談判仕候積ニ御座候間、今日ハ右等ノ儀ハ相伺申間敷、外ニ御申間相成候儀有之候ハ、相伺可申候、

若

一委細被申聞候趣、事務執政へ可申立候、外ニ此方ヨリ申上入候儀ハ無之候、

英

一今日ヨリ五日同出府、六日同御老中方へ御逢相願心得ニ御座候、

若

一二十九日ハ亜国公使、晦日ハ蘭国公使ノ面会ノ積治定致シ居候間、差支可申候、

英

一二十九日・晦日、亜・蘭公使へ御逢ノ儀ハ、固ヨリ

承知仕居候得共、同日ニテモ御差支無之儀ト存候故、相願候事ニ有之、若シ御差支ニ候ハ、一日引上ケ、二十八日ニ可仕候、

若

一歸府ノ上執政へ申立、両日ノ内何レニカ相定可申候、

英

一御老中方へ委細被仰上被下候、御逢相願候ハ緊要ノ事件有之候故ノ事ニ候間、西洋風習ニテハ時カ五分前申入候得ハ、尊貴ノ人タリトモ必ス面会致シ候事ニ有之候、私儀モ緊要ノ事件難捨置ニ付、相願候事ニ有之候、

若

一歸府ノ上委細申立、治定ノ上ニテ申越候様可致候、

英

一後來變事有之候節ハ、政府ニテ御引受相成候様申上置候事故、番所等ノ儀ハ、私ニヨキテモ強テ差構不申候得共、私相願候ハ、外国人共安心遊歩相成候様トノ事ニ有之候、

若

一右ハ於政府ニモ殊更ニ心配致シ、以來外国人共安心

ニ遊歩相成候様、夫々所置致シ候積リニ付、已後安心ノ場合ニ致シ度候、

英

一御邦政府ニヲキテモ私書簡ノ趣御承知被成、番所等御取立ニ相成候トノ御沙汰ノ趣ハ相分候得共、一週日間ニ御出来難相成トノ儀ハ、相分リ不申候、

若

一右ハ其筋々へ命令ヲ下シ、神奈川奉行ヲシテ地所見分爲致、其上作事等爲取懸候事故、彼是手間取申候事ニ候、

英

一固ヨリ私ニヲキテハ彼是申上候筋ハ無之、只々外国入共安心遊歩相成候様ノ御処置、相願候儀ニ御座候、

英

一何レ五六日ノ内ニハ御逢相願可申、其節ニ至リ候テハ、既ニ一週日ニモ相過候事故、其節御処置相成候テ、模様相伺可申候、

若

一被申聞候趣、委細事務執政へ可申通候、

英

一勅使ハ最早出立相成候哉、

若

一昨日程ケ谷宿通行相済申候、

右畢テ退座、

第十一

御老中衆ヨリ英国公使へ被相贈候御返簡写

貌利太尼亞シャルセタフヘール

兼エキセルレンシー

(Edward St. John Ward)
イ・シント・ジョン・ニール江

去月廿二日 勅使帰京ニ付、貴国商人、東海道筋出行不致様触示シ置レ度旨、書簡ヲ以テ申入候処、貴国第九月十五日付ノ返簡被指越披閱セリ、右ハ既往ノ事ナレハ、彼是論弁ニモ及ハサレト、猶後々ニモ関ル事アレハ、茲ニ一定セサルヲ得ス、一体十里四方遊歩ノ儀ハ条約中明文モアレハ、此地内出行差止ルハ我等ニ於テ不好事ナレハ、万一不都合ヲモ醸サンカト懸念不少ヨリ、前条ノ通り申入候事ニテ、素ヨリ懇親ノ意衷ヨリ出、禍ヲ未崩ニ防^(明カ)ン為ノ所置ナレハ、宜敷諒察セラレ候事ヲ望ム、併シ報告ノ遅キヲ以テ、通達方間ニ合不申トノ儀ハ尤ニ聞ユレハ、以後右様ノ節ハ可成丈急

速申達候様可致、此段報告如斯ニ候、拜具謹言、

文久二戌年閏八月二日

脇坂中務大輔花押

水野和泉守全

板倉周防守全

第拾二

戊閏八月六日神奈川奉行組頭若菜三男三郎殿英國コ

ンシユル応接写

一一応挨拶畢テ、

コ
ンシユル

一此度川崎ヨリ程ヶ谷迄ノ海辺、御番所御建立ニ相成

候ニ付テハ、御番所々々何レニカ番士御指置被成候

儀ニ可有之、就テ相伺候、右番卒進退方ノ儀、如何

様ノ御所置振ニ候哉、何レ始終御番所最寄々々ヲ、

番士見廻リ候儀ニ可有之哉ト奉存候、

組頭

一始終其最寄々々ヲ見廻リ候訳ニハ難相成、先ツ諸関

門同様ノ心得ニテ、其諸警衛向ノ事ニ付テハ、其許

ノ差図ヲ受候迄ニモ無之、已ニ政府ヨリ夫々達シモ

有之候事ニテ、此方ノ心得方モ有之候得ハ、何レニ

モ不都合不相生様処置可致候、就テハ右ノ儀ニ付、
姑ク此方ニ可被任候、

コ

一固ヨリ、私共ヨリ夫レ是ト差図ケ間敷儀ハ申上候訳

無之候得共、併シ是迄異変ノ起リ候節ニ臨ミ、番所

ニ詰居候政府役人、外国人モ援救致シ候驗無之、依

テ右様ノ儀、爾来無之様御処置有之度ト奉存候故、

心付候丈無腹蔵申上候事ニ有之候、仮令番所ハ番士

御指置被成候共、其前ニテ異変起リ候節、手ヲ束ネ

居候様ニテハ、実ニ無益ノ事ニ奉存候、

組

一第一是迄吉田橋関門ニ不限、諸関門共番士見張居候

前ニテ、外国人逢殺害候儀嘗テ無之、其許被申聞候

趣ニテハ、何カ是迄番所前ニテ異変有之候テモ、番

士手ヲ束ネ、一向差構不申候様被申聞候得共、前申

入候通、是迄右様ノ儀無之候、何レノ番所前ニテ右

様ノ異変有之候哉、其許慥ニ見覚候ハ、一々承知

致度候、

コ

一先日生麥異変ノ節、番士存居候得共、手ヲ束ネ居申

候、

組

一夫ハ何ノ処ニ候哉、

コ

一番所近辺ニテ異変有之候得共、番士一人モ不出候、

組

一何レノ番所ニ候哉、

コ

一長延寺近辺ノ番所ニ御座候、

組

一其許被申聞候通り、成程其近辺番所有之候得共、併

シ拙者考ニハ、異変ノ場所ヨリハ余程距離致居候故、

番士不心付儀ニ可有之候、

コ

一関門ハ余程手近ノ様ニ奉存候、然ルニ関門ヲモ閉ズ、

平生ノ如ク三郎家来通行為致候儀ハ、甚不都合ニ奉

存候、

組

一其番所ヨリ殺傷ヲ受候ハ相見ヘ候哉、

コ

一相見得申候、

コ

一逢殺害候者何レニ居候哉ト番士ヘ相尋候処、一向相

不心得趣ニ相答申候、

組

一見張前ニテ異変有之候節、相知候儀ハ勿論ノ事、手

近ノ処ニテ有之候節ハ忽相知候得共、遠方懸隔候処

ニテハ、何分相知不申候、

コ

一私推考ニハ、全ク役人存居候得共、実ハ島津三郎ノ

家来ヲ恐怖致候ヨリ、偽リ不知真似ヲ致候儀ニ可有

之、関門ヲ閉サル儀モ、畢竟ハ右等ヨリ生シ候儀ト

奉存候、

組

一決テ左様ノ儀無之、番所最寄々々ハハ忽相知レ候事

故可駈付候得共、已ニ廿町余モ距離致居候ニ付、何

分不相知候、併仮令廿町余距離致居候トテモ、屈曲

無之見通シニ相成候節ハ、不取敢馳付候様可致候得

共、全ク不存故ニ候、素ヨリ薩藩ヲ怖候訳ニ無之、

又薩藩ヲ関門通行為致候義、彼是申出候得共、彼ハ

素ヨリ堂々タル大藩ニテ、衆人ノ知処ニ候ヘハ、呼
ヒ戻シ度候節ハ、何時ニテモ呼寄候儀相成、敢テ閑
閑ニモ不及候、併シ浪人狼藉ノ節ハ申迄モ無之、不
取敢閉閑可致候、

コ

一 此間生麥異変ノ節、政府ノ役人通り懸リ候得共、一
向差構不申様ニ御座候、

組

一 夫ハ曾テ不存、其許ニハ通り懸リ候役人ヲ睨ト見留
候哉、

コ

一 存居申候、

組

一 儘ニ見知居候ハ、可承候、

コ

一 早々申上度有之候間、明日奉行所へ御逢願度、御不
(早急)
快ニテ御歩行御難儀ニ候ハ、私ヨリ御役宅へ罷出
可申候、

組

一 承知致候、兎モ角モ一応奉行ニ可申聞候得共、併先

頃ヨリ不快ニテ、独ニテ起臥モ不出来程ニテ、何分
出勤相成兼候間、申談度儀有之候ハ、何事ニ依ラ
ス拙者ニ可被申聞候、左候得ハ奉行ニ申聞、否ヲ可
及挨拶候、依テ明日面会ノ儀被見合候様致度、其中
全快次第出勤可致候、

コ

一 此間中ヨリ越前守様御引込、御出勤無之御帰府ニ相
(福井侯)
成候事故、定テ右交代ノ鎮台ハ、御壮健ノ御方御越
之儀ト奉存候処、矢張圖書頭様モ御不快ニテ、病人
(不立頭長行力)

ト病人ト交代致候モ同前ニテ、急事件有之候テハ甚
指違候間、(違力) 壮健ノ鎮台圖書頭様ノ交代ニ相成候様仕
度奉存候、且越前守様ニハ、当所御在勤中御不快ノ
(松平茂昭)

趣ニテ、御出勤無之候得共、先頃ベレクル出府、御
Präsident フランス公使
老中方へ対話ノ節其席へ列シ居申候、左候得ハ御在
勤中御不快ノ儀ハ訝敷奉存候、

組

一 以ノ外ノ事ヲ被言聞候、越前守ニハ御用召ニテ、疾
ヨリ帰府可致ノ処、圖書頭不快ニ付、段々延引ニ相
成候処、追々快気交代致候処、越前守ニモ幸ヒ江戸
表ニテ快方ニ相成候故、閣老邸へ出席致候儀ニ可有

之、且圖書頭ニハ全ク病癒候テ、交代致候ニハ相違無之候得共、途中駕籠ニテ被振候故持病再發致シ、夫カ為此程引込中ニ候、全ク病人ト病人交代致シ候儀ニハ無之候、

コ

一御病臥中御逢願上候モ氣ノ毒ニハ奉存候得共、御面晤不致候テハ不叶候事モ有之候間、是非御逢有之候様仕度候、夫ニテモ弥御病臥ニテ御逢出来兼候節ハ、此上致方無之、依テ各国岡士ヨリ壯健ノ鎮台ヲ代リニ相成候様、以書簡閣老方へ願上候様可仕候、全体組頭衆ノ御出勤モ、余リ遅刻ノ様ニ奉存候、

組

一運上所へ出勤而已ニ無之、出勤懸夫々用談モ有之、奉行役邸マテ毎朝出勤致シ、殊ニ此度奉行役邸遠方ニ相成候故、往返ノ間合モ有之、自ラ遅刻ニモ及候、已ニ今一人ノ同役モ只今出勤致シ候程ニテ、敢テ刻限違ニハ無之候、

コ

一運上所出勤刻限ノ儀ハ、第拾時ヨリ出勤、四時退散ノ定ニ有之、然ルニ其刻限ニ御出勤無之儀ハ如何ノ

訳ニ候哉、

組

一何レニテモ其刻限ニハ出勤致居候、

コ

一成程御奉行所ニハ御不例ノ事故、御治療專一ニ被成候儀ハ御尤ニ候得共、併シ外国人一命存亡ノ義ニ付テハ、少シハ御推察有之可然儀ト奉存候、

コ

一開港以來運上所士官、ドル銀計貪リ候事而已考、外国人ノ一命ヲ失ヒ候事ニハ、一向御關係無御座候、

組

一夫ハ以ノ外粗暴ト申者ニテ、素ヨリ我国ニテ毫釐モ条約面ニ洩候税ヲ取立候儀無御座候、可取立分ハ取立、毛髮程モ取立間數分ハ不取立、是迄右様悖候税取立候驗無之候、且外国人ヲ及殺傷候者ヲ其場ニテ所置不致、何ニカ等閑致、時日ヲ移シ候様ニモ可思候得共、全ク左様ニハ無之、政府ニ於テモ今度異変一度ノミナラス、已ニ及再三候事故、此度ハ一際配慮被致夫々取調中ニ候、且外国人警衛向ノ儀ニ付テハ、一向關係不致様ニ申聞候得共、現在其許モ承知

ノ通、所々関門等ヲ設ケ置、狼藉者ノ予防致置、然
ニ此度ノ異変起リ申候ニ付、亦々不厭雜費貳拾數ケ
所ノ番所ヲ設ケ候儀ハ、利欲ノ為歟、外國人ノ為カ、
愚昧ノ者ニモ可相分、況ンヤコンシユル職ヲモ被任
候者、之ヲ可弁ハ道理ナリ、然ルニ右様不都合ノ事
被申聞候ハ、以ノ外ノ事ニ候、

コ

一 左様被仰聞候得共、一体ノ御趣意私ニハ徹底不仕、
全体越前守様ノ御所置不宜候、関門設置候儀ハ何等
ノタメニ候哉、此程生麥異変ノ様ナル時、閉関致シ
遮リ候為ニ可有之、然ルニ三郎通行ノ時、平穩ノ時
ノ如ク閉関不致、通行為致候儀ハ余リ不都合ノ義ト
奉存候、其上三郎泊所程ケ谷迄夜拾時頃使者ヲ遣シ、
外國人干戈ヲ動スモ難計候間、早々立退候様ト御示
シニ付、三郎其夜退去致候趣ニ御座候(示云々ハ渠カ
誤聞ナラン)

組

一 種々存外ノ事被申聞候、三郎泊所マテ已ニ拙者為懸
合出張致候得共、決テ左様ノ示シ致候儀無之候、且
鎖門不致儀ヲ云々被申聞候得共、彼ハ固ヨリ堂々々

コ

ル大諸侯ノ厄介ニテ、官位モ有之、諸侯ニ準スル程ノ
者ニ候得ハ、逃去候様ノ卑劣ケ間敷働ハ致間敷、就
テハ呼出候儀ハ何レニテモ易キ事ニテ、已ニ彼カ家
来ヲ呼出シ、此節於江戸表吟味モ有之程ニテ、素ヨ
リ逃去候志有之候ハ、其夜ノ中ニ程ケ谷可逃去候
得共、翌朝ニ至リ悠々ト出立致シ候、拙者ヨリ立退
候様ニト申聞候儀ハ毫髪モ無之候(事実)

コ

一 程ケ谷駅へ何時ニ御越被成候哉、

組

一 夜四時頃ニ候、

コ

一 馬ニテ御越被成候哉、

組

一 左様ニ候、

コ

一 何レノ街道御廻被成候哉、

組

一 何レノ道參リ候トモ、夫等ヲ聞ニ不及候、

コ

組 一御懸合被成候節、家来ノ名ハ何ト申候哉、

組 一夫等ヲ被聞如何致シ候積ニ候哉、

組 一供頭ノ様ニモ承リ候故、夫ヲ伺ヒ候儀ニ御座候、

組 一供頭原田才之丞ト申者ニ御座候、

組 一江戸ニ居候哉、

組 一不存候、

組 一一番ノ家来ニ候哉、

組 一夫レモ不心得候、其家ニ応シ種々之位階モ有之、拙

者引合候者ハ供頭ト申、一行列中重役ニ候、

組 一三郎家来二組ニ分レ通行致候ヨシ、右之供頭ト申者

ハ、三郎行列ノ方ニ附添ヒ候頭ニ御座候哉、

組 一如何候哉不心得候、

組 一始末柄御調ニ御出張ノ事故、殺害致候者誰ト申ス儀

組 御分リニ相成候儀ト奉存候、

組 一取糺候得共、知レ兼候趣ニ申聞候、

組 一不心得趣申上候ニツキ、夫ヲ御信シ被成候哉、

組 一不信候、

組 一御信用無之候ニ付テハ、定テ御謹督被為在候儀ト奉

存候、

組 一左様ニ候、信用不致候故段々及督責候処、取調之上

奉行ヘ可申立トノ趣、夫マテニテ引取申候、

組 一此間忠四郎様ヘ生麥異変ノ始末書願上候、右ハ早々

御遣シニ相成候様仕度候、

一承知致候、

コ

一 早々御遣シノ趣ニ候得共、右ハ何頃マテニ出来致候哉、私モ昨日生麥ニ参リ夫々調置申候、

組

一 一昨日ト申聞候事故、(小笠原奉行、老中格)圖書頭ヘモ申聞置候得共、未不相知候、

コ

一 明日二時前御奉行所ヘ御逢仕度候、

組

一 明朝迄ニ否可申入候、

コ

一 左候ハ、明朝マテニ否御申越可被下候、二時ニハ各国岡士寄合有之候間、可成ハ早目ニ願上候、

コ

一 今夕方迄ニテ宜候間、番所建立ノケ所並番士員数等悉御申越可被下候、

組

一 圖書頭ヘ一応可申聞候得共、未不極ケ所モ有之候間、委敷申遣シ候訳ニハ相成兼候、

コ

一番屋ハ未造作ニ不相成儀ニモ可有之候得共、私モ最寄々々ヲ一見仕候処、已ニ縄張等致シ置候ニ付、大凡ハ心得居ラレ候得共、併シ御書簡ニ見較度奉存候間、早々願上候、

組

一 昨日拙者モ一見致候得共、何分都合不宜ケ所モ有之、夫カ為未極サル所モ有之候間、不残取極候^{上カ}処ニテ可申入候、

コ

一 昨日ヨリ造作ニ御取立ノ由ニ承リ申候、

組

一 都合宜敷場所ハ取懸居候、

コ

一 先月二十三日、公家衆神奈川御通行ニ付、東海道筋外国人歩行留之儀御達シニ有之候得共、其前二十日三郎通行ノ儀ハ何共無之、右ハ如何之訳ニ候哉、夫カ為外国人不慮之災ヲ受候、

コ

一行違之儀ニモ可有之哉、亜国江ハ二十二日御通行之

組 訳ニ有之、英之方江ハ二十三日ト有之候、

一 公家衆之儀ハ步行留之儀達置候得共、東海道駅通行之諸候之儀ハ、是迄違候例無之候ニ付別段不達、此前之勅使通行之儀ハ違候得共、三郎通行之儀ハ別段不達候、

組 一 二十三日勅使御通行御見合之儀ハ、別段違無之候、

組 一 外之事トハ違ヒ、延引ニ相成候儀不達筈ハ無之候、

組 一 二十三日ヨリ二十六日マテノ間、佛国軍艦ヨリ神奈川アメリカコンシル所マテ大砲持ち出シ、嚴敷備置候得共、一向御通行無之候様奉存候、

組 一 二十四日通行致候ニハ相違無之候、

組 一 二十三日ヨリ二十六日マテノ間、大砲備置見張致居候ニ付、御通行ト相成候節ハ不知筈無之候、

組 一通リ抜ケ候跡江、見張ノ者出張致候儀ト被存候、

組 一 御通行之節ハ不知筈無之候、

組 一 何レニ致候テモ、公家衆無滞通行済相成候上ハ、今更彼是ト論ニモ不及、併シ其許之周旋ニテ、先無滞通行相済候段ハ、於拙者ニモ辱被存候、

組 一 御書簡ヲ以御達無之故、夫レヲ申上候儀ニ候、全体右様重大之事、下番ヲ以御断ニ相成候儀ハ、余リ輕々敷御取計ヒ被成候儀ト奉存候、十里内外国人ノ歩行ヲ差止め候儀ハ、不容易儀ニ有之候、

組 一 夫之事ハ已ニ既往ニ属シ候事ニ候得ハ、今更論スルニモ不及、爾來之儀ハ通行済ニ相成候事迄モ、一々書簡ヲ以可相達候、

組 一 兼テ談置候ニハ、異変ノ時門ヲ鎖シ候積リ之処、此間異変ニ臨ミ一向其義モ無之、兼テ之取極トハ大ニ相反シ申候、弥右様之訳ニ候得ハ、追々本國ヨリソ

ルタート多人數呼寄、十里内ヲ警衛致シ候様可仕候、
左候ハ、十里内通行致シ候帶刀人無之様可相成候、

一何レ猶又可談候、
右畢テ退席、

第十三

風説

一明日御奉行所御逢之儀相知候哉、

組

一是ヨリ奉行へ相尋候ハ、否可相知候、先刻モ及断候
通、疾病ニテ着座モ不出來程ニ有之、就テハ延日之
儀申越候モ難計候、

コ

一先刻モ申上候通、若弥御逢出來兼候程之御不快ニ候
ハ、各国コンシユルヨリ代リノ鎮台御在勤ニ相成
候様可仕候、此度生麥一件ニ就テハ、品々申上度儀
有之候、

組

一被申聞候趣ハ委細奉行へ申聞、速ニ可及返詞候、

コ

一此書付ハ、生麥ニオイテ逢殺害候者ヲ埋葬致シ候入
用之積書ニ御座候得共、素ヨリ日本之為ニ被殺候者
ニ候得ハ、英ヨリ可私管無之儀ニ被存候、

組

一島津三郎過ル二十一日八ツ半時頃川崎宿先合、生麥ト
申宿ハツレヨリ二丁程手前通行之処、神奈川之方ヨリ
異人四人内忝人婦人中ニ立、三行ニ相並來リ、三郎駕
籠近ニ相成、既ニ行列江乘込候様子ニ付、供方ノ面々
手真似ニテ色々ト制候得共、一向聞入等モ無之(高島
一次カ表話ニ符合ス)、既ニ駕籠近クマテ參候処、三郎
何カ差(差圖ハ誤題)イタシ候様子ニ相見得、直様駕籠脇(三人ハ事悉)四五人刀
ヲ拔キ異人江相向候処、大ニ驚キ候体ニテ逃カケ候処、
忝人ハ脇腹ヲ被突、忝人ハ左胸中ヲ被突、忝人ハ左腕
ヲ余程被切込候様子ニ御座候、然ル処四人共一同行列
内外之無差別、神奈川之方江引返シ候処、右宿外ヨリ
松並木ニ二丁半程逃去候テ、忝人落馬致シ候ヲ、供方之
内跡ヨリ追掛、左肩先ヨリ背中江カケ切込候由、右ハ
其場ニテ相果申候、
一跡兩人腕ヲ切ラレ候者、忝人ハ左肩ヨリ同横腹ヲ被突
候者、右ハ馬乘之忝神奈川宿瀧ノ橋際乘蓮寺ト申法華

寺江逃込、同所ニテ横腹被突候者因果申候、

一 婦人ハ馬乗ニテ左之方江両足ヲ垂レ、乱髪ニテ飛カ如ク、注進ニモ參候哉、横濱迄逃去、少シハ怪我致候哉、面体ヨリ左之襟ニ血付居候ヨシ、兩三度モ落馬致候ヨシ、然ル処不取敢馬上ニテ兩人罷越候得共、木戸ヲ打候故引返シ候処、コンシユル始十二人馬上ニテ、夫レ々武器ヲ携ヒ、歩行ニテ劍付鉄砲ヲ持候異人二百人余、神奈川宿迄罷越候処、其節ハ島津三郎人数下候間近迄異人參リ候得共、一向ニ異人出手シ等不仕候由、コンシユルヨリ堅ク制候ヨシニ御座候、無程右人数引取候由ニ御座候、

一 夕七ツ時過、生麥松並木ニテ即死候者引取ニ罷越候異人、何レモ劍付鉄砲ニテ五十人程參リ候ヨシ、日暮ニ及候テ、神奈川宿宮ノ河岸渡場ヨリ船ニテ引取候、其節警衛之異人共之内ニテ、玉込鉄砲ヲ乱妨ニ宿之方江向ケ相発候処、忝怪我致シ候者モ有之ヨシニ御座候、一 島津三郎程ケ谷宿泊ニ相成、其夜御本陣近ク迄嚴重之御固有之候ヨシ、実ニ往来モ留リ候程之コトニ御座候、翌朝未明ニ出立ニ相成候由、

一 右同人、供人数最初江戸着之節ヨリハ余程相増シ候由、(増員ハ誤聞)

最右場所ハ間宿ニ候哉、先供等切々ニ相成候方ヨリ、自然乘込候由ニ御座候、

一 異人四人年齢、通り掛リ候者見受候ニハ、忝人ハ二十五六歳位場所ニ死候者、忝人ハ三十七八歳位左脇腹ヲ被突候者、忝人ハ三十六七位左之腕ヲ被切候者、婦人ハ二十一歳位之由、武器等ハ所持不仕由、

一 右異人英吉利人ニテ、横濱百疋番之旅宿ニ罷在候商人ニ御座候、

一 勅使御通行相済候迄、異人出行御指留ニ相成居候処、

押テ川崎大師辺江罷出候由勅使一条、旨武通紀ニ載ス、此處略下同シ。

一同二十二日昼八ツ時過、右相果候異人横濱ノ内異人之寺江葬式御座候処、見送之異人何レモ劍付鉄砲ニテ、人数之程ハ相分兼候得共、千人以上之事ニ候由、其節船中ニテ大砲打候事夥敷事ニ御座候由、行カ

八月二十七日

第十四

風説

一 島津三郎帰途、生麥辺ニテ夷人兩人打果シ、兩人疵為負候始末、夷人之方為指不都合無之哉ニ候ヲ、三郎駕中ヨリ切レ々ト声掛候杯(事實ハ前記ノ如シ云々ハ程

造ノ説ナリ)、乱端ヲ醸シ候ヲ不顧仕方、右ニ付翌日閣老宅ニテ夷人応接有之候得ハ、此度之儀ハ何レトモ可申達様之レナク、本国江申遣シ、命令次第ニ仕候ヨシ申答候迄ニテ、至テ一通之応接ニテ相止候由ニ候、万一此方ニ理無之候テハ、當時外国使節モ被遣置候折柄、人質ニ相成可申、是尤彼之奇貨ニ有之、左候得ハ国内之動揺ハ申迄モ無之候、右之次第彼篤ト心得居、彼是申立候、最早大事件ニ可及ト、人々浩歎罷在候由ニ候間、是非大勇力之諸侯勇出、公武之間和解ヲ引受指働、内憂計モ急々相除キ不申候テハ難相成儀ト、人皆渴望罷在候趣、

第十五

風説

一薩人神奈川ニ於テ外国人ヲ切害仕候一条、其後之模様昨今之処承候ニ、右事件ニ付去月廿九日ヨリ毎日閣老宅ニテ外人応接有之、今日ハ英・佛一同応接之由ニ候得共、趣意一円不相知、

一濟海寺・東禪寺両夷人宿所江、横濱ヨリ人数余程参リ屯成致シ候処、昨今ト相成何レモ引取、両所共拾五六人ヨリ二十人程ツ、相残リ、薩船之動揺ヲ伺居候由、

一品川碇泊之薩船江荷物並人数共乗込、何時ニテモ出帆不差支様支度調候得共、公義御手判不被相渡、毎日々責付候由ニ候処、今以被相渡ザルヨシ、

一夷人殺害事件ニテ、島津三郎供頭様之者壹人途中ヨリ引戻シ候ヨシ(原田才之丞屈ノ為メナリ)トイヘトモ、切人無行衛故、右供頭之者下手人ニ出候事ニモ不参、如何相成候哉ト薩邸議論紛々之由(事実)

一右事件ニ付、翌日政府ヨリ亞・英兩國ミニストルヘ取扱方御頼相成候由、

一佛国ニテハ、是非島津ヲ打取り不申候テハ不相濟ヨシ申立、亞国ニテハ御頼ミノ廉モ有之故カ、何分取扱ヒ兼候由、英国ミニストルハ仮官ニテ、其上人物モ至テ下落イタシ候者之ヨシ、何レノ議論モコレナク、却テ船將ハ俊才之者ニテ、簡程之事件ニテ戦争ニ可及筋ニ無之、尤モ日本政府之所為ト申ニモ無之候間、戦争ハ見合セ、何分日本政府江欠合、挨拶ニ向ヒ所置シ候方可然、勿論本国政府之議論モ可有之候間、右返事相待候上ニテモ不遲由申立候趣ナリ、

閏八月五日

第十六

風説書

一 去月二十一日島津三郎歸京之節、神奈川近辺生麥村ト申所ニテ夷人ヲ殺害致候義ハ、夷人ヨリ敢テ無礼等仕候訳ニハ無之、却テ夷人之方ニテ三郎之行列ヲ不妨様相避居候得共、供方之者俄ニ左右ニ張り、右異人ヲ中ニ入レ、強テ無礼之様申唱殺害仕候由、其所為所謂釀乱之魁トモ可申、実ニ可惡事ニ御座候由風唱御座候事、

一 右一条後、三郎戸塚駅江相泊候ニ付程ヶ谷駅泊之処ニ道ヲ急キ、一駅ヲ行越候ヨシ、神奈川奉行支配定役清水又三郎ト申者罷越懸合(事夷)候得ハ、浪人体之者突然參リ狼藉仕候儀ニテ、供方之所為ニハ無之旨相答、如何様懸合候テモ更ニ承引無之、彼是夜半ニモ及ヒ、神奈川奉行ニテモ大ニ心配、又々組頭若菜三男三郎ト申者ヲ被相遣、尤モ其節ハ親敷見物仕候、同所百姓ノ勘次郎ト申者口証ヲ持參リ、又々懸合候処、終ニ供方之所為之訳ニ漸ク相答(事夷ナリ)候由、其節之所置狼狽トハ乍申、実ニ可惡事ノヨシ相唱申候事、

一 其翌日戸塚駅曉ハツ時出立、大急ニテ箱根山ヲ行越候由、何様之訳カ相分不申候得共、夷人ヨリ被追掛候事ヲ恐怖仕候事ニモ可有之、其狼狽兼テ之氣象ニ似合不

申トテ、人皆一突仕候由ニ御座候事、

一 右一件之節英女一人鬢先ヲ被切、漸ク其場ヲ遁レ、早馬ニテ横濱迄參、右之次第ヲ注進仕候得ハ、佛蘭西之軍卒夫々兵装ヲナシ(事夷)、神奈川本覺寺聖采利加人前釋寺之由ヲ警衛仕、其装実ニ戰場同様ニ相見得、何レモ眼光等モ平生ニ變リ、尤指揮之行届方誰有テ賞歎不仕者無之由、右ハ三郎江敵スル訳ニハ毛頭無之、万一薩人狼藉仕候節、防禦之為ト相見得申候、世間ニテ三郎江敵スル訳ニ相唱候得共、全ク右之訳ニハ無之様相見得申候、然ニ茲ニ一之可笑事有之候、右異人警衛之中江、神奈川同心之内上番相勤候者、山木善四郎ト申者徘徊仕候処、夷人ヨリ薩人ト被疑、何方之者ニ候哉ト被相尋候節、薩人ニテハ無之、公義役人之由相答候得ハ、薩人ニテハ無之ト申立(言カ)ヲ聞誤、薩人ナリト心得、直様ヒストール砲ニテ腰辺ヲ被打抜候由(事夷ナリシト)、少シノ間違ヨリ右様之事ニ相至、夷人之粗忽今更是非ニ不及、尤夷人ヨリモ頻ニ相詫、ミニストル等直々見舞ニ參、懇情ヲ相尽候由ニ相聞得申候事、

一 薩州ノ軍艦品川沖ニ碇泊仕居候処、生麥一条ヨリ右船(天祐丸)ヲ夷人共軍艦ニテ相囲ミ居候故、打拵等ニテモ仕候哉

風唱御座候処、此次ニ相成右薩船出帆、何之子細モ無之、唯其後ヨリ夷人共右軍艦ニテ横濱迄罷越候ヨシ、左候得ハ薩船ニ敢テ害ヲナシ候訳ニハ無之、自己之警衛ト相見得申候、夷人之不踈暴事、実ニ感心ナリトテ風唱御座候事、

一 島津三郎供頭山口彦五郎ト申者、途中ヨリ御召返ニ相成、先以テ屋敷江被相預候由、右ハ異人殺害下手人ト申事ニ御座候(召返シニ非ス、届ノ為メ差返シタルナリ)

一 神奈川一件ニ付、薩州ヨリ其節之供頭一人呼戻シ相成、公辺江差出候処何分供頭計ニテ、其節之始末相分兼候間、其節其場所ニ立懸候者ニテ、別人差出候様御違有之由、尤右供頭ハ御吟味中御家来之者江御預ニ相成候由ニ御座候事(白洲ニ於テ一回糺問ヲ受ケ、邸預トナレリ)

但右被仰渡候節、水野公薩州留守居西筑右衛門御呼出ニテ、同人ニ御談ニハ、此度之儀ハ御国体江モ係リ、不容易事ニ候条、兼テ薩州人ノ癖ニテ、切腹等致候上ニテ差出シ候様ニテハ不都合ニ候間、其事相心得差出候様、丁寧ナル御談之趣ニ相聞得申候事(事美)

一 生麥一条追テ六ヶ敷相成、島津三郎ヲ御召捕ニ相成不申候得ハ、外国人トテモ聞濟不申、已ニ先日中薩邸ヨ

リ犯人一人召捕差出、評定所ニテ恣通り御僉議之上、(正記之山口云)同道人江御引渡ニ相成候、然ニ外国人申立候ニハ、島津三郎駕籠ヨリ相出、指揮仕候者ニ相違無御座候、左

候得ハ殺害仕候者罪無御座、主人ノ命ヲ聞候ハ從夫之当然ニテ、罪之有之候ハ三郎ニ御座候、是非御召捕ニ相成度、若当年中ニ政府ニテ御召捕ニ不相成候ハ、本国江申遣、軍艦ヲ呼寄、私共一手ニテ来春早々薩州江罷越、右三郎ヲ召捕候、尤政府ニテ是迄段々御厚情ヲモ被相尽、殊ニ此度程ケ谷駅ヨリ川崎迄数ヶ所之番所御造立被下、御懇切ニ預候得ハ、聊政府江対シ怨無御座候、只政府ニテ御手ノ届カヌ故、私トモ手ニテ召捕候ト申上候事ニ御座候、

閏八月

第十七

生麥村ニテ島津三郎家来殺害等致候異人名前調
英商百一番蘭商アースホネル之宅ニ暫時滞留之英商、
一 生麥村松原ニテ死ス、馬切ラル、
(Charles Lenox Richardson)
リチャルトソン 二十八歳即死
同百番船

一 右之前肩深手、左之腰斜ニ深手、二ヶ所浅手、

(William Marshal) 本覚寺ニテ
マイチヤル 治癒致居候

一右之耳カスリ、鬢髮切ラレ額少々カスリ、後腰疵少々有之、

(Borviale) 横兵へ馬ニ
同人妻之妹 立箱リ

一 巫商人元三十番今六番船ホープ同居之英人

一 左之肩ヨリ腕ニ懸ケ深手、足半ハ切ラレ、馬モ切ラレ、

カラク 本覚寺ニテ治
療致居候
(Woodthorpe Charles Clark)

右之通ニ御座候、

第十八

浪人警衛之為メ川崎宿ヨリ程ケ谷宿マテ番所被相建候調書写

但生麥村騒動有之、異人ヨリ申立候ニ付、俄ニ被相

建候由、

一 川崎宿ヨリ程ケ谷迄都合二十二ヶ所

但五丁ツ、相隔相建候由、

一人数式百五拾人

但御目見以上之者四人有之由、

一 給料八月ニ金壹両二人扶持

右早々御取建ト相見得、晴雨ニ不拘当時造営仕居候、

第十九

松平修理大夫殿御家来差出候書付写

島津三郎下向之節、於生麥供方足輕岡野新助異国人ヲ切付、其俣何方江欽立去候ニ付、外国人共ヨリ再庇苦情申立候趣御座候由ニテ、島津登并私被 召呼、委細被 仰渡候趣具ニ旅中江申遣候処、猶又早速巨細手ヲ分ケ取調候得共、何分今以行衛相知不申候、併シ此者義ハ孰レニモ召捕指出候心得御座候間、暫御猶予被成置候様奉願候、右ニ付テハ其余携候者モ可有之、精々取調可差出、且又右一件、且又其場之次第相心得候者呼戻、可指出旨被 仰渡、供頭山口彦五郎ト申者指出シ、町御奉行様ニテ御尋有之候得共、先行列之内之儀ニ付、委敷様子モ分兼候ニ付、先供之内ニテ右次第相心得候者、両三人可差出旨御達有之、尤右之趣御精細度々御沙汰承知仕、其都度々々其筋役人共江細々申合、旅中江差遣候処、前文申上候通精々取調候得共、何分勇壯之若者共数百人有之、行列江立障り候ニ付、新助右之通取計候事ニテ、仮令尋当候共可指出筋無之、行列江無礼相働候者打果候ハ、古来ヨリ之国風仕来候旨申立、其場之様子混雜中故、外ニ誰ケ様ト見留候者モ素ヨリ無之、先供之内ヨリ差出候逆モ御精答難申上様

ニテ、夫共被召出候事ニ候ハ、我々一同被差出度旨
杯申張り罷在、騒立モ可仕哉之形勢御座候得ハ、此上
取調可致様モ無之、就テハ於 公辺ニ御程能外夷共江
被 仰渡被下候テモ承伏不仕、万一国元江軍艦差向候
様申出候共、外ニ致方モ無之事ニ候間、薩州江渡来仕
候ハ、 皇国之御威光不相汚様、精々穩ニ取扱応接致
シ候様可仕候間、右之趣可然被 仰諭被下度段可申上
旨、三郎申付越候、此段申上候、以上、

閏八月廿五日

松平修理大夫内

西 筑右衛門

第二十

英国岡士ヨリ外国事務宰相江相呈候書簡写第五十号

西曆千八百六十二年十一月十四日

我文久二年九月二十五日於横濱

外国事務宰相台下ニ呈ス

第九月十四日不列顛之臣民ヲ殺害シ、且暴戾ヲナシタ
ル事ニ付、余カ報告セル処ノ回答トシテ、第十月九日
台下ヨリ書簡ヲ給リ、此国ノ法律ニテ殺害人、及ヒ此
暴行ヲナシタル仲間ヲ裁判スルニハ、アル旧例ニ依テ

ナサ、ルヲ得サル事ヲ告ケ給ヘリ、

日本政府ヨリ薩摩公ニ命ヲ下シテ罪人ヲ捕ヒ、江戸江
送ルヘキ事ヲ伝フルニ十分ナル時日ヲ費スヘシトイヘ
ルハ、最ナル事ナリ、然レトモ殺害一件モ既ニ兩日ヲ
経タルニ、台下ヨリ薩摩侯ニ命ヲ伝ヘテ、其事成就セ
シヤ否ヤ、又罪人ヲ捕ヘテ事実ヲ正スヘキ第一ノ所置
ヲナセシヤ否ヤヲ、余ニ報告スルヲ以肝要トシ給フ事
ナク、又当然ト考ヒ給ハス、

一是故ニ日本政府ニオイテ、此度ノ大暴ヲ取捌キ給フ所
ノ仕方ニヨツテ、遂ニハ日本ニ得ヘキ曲直ニ大關係ア
ル事ヲ、正シク台下ニ告クルヲ以テ、余カ職務ト為サ
、ルヲ得サルニ至レリ、

一薩摩公相当ナル時日之内ニ 相当ノ時日ハ道路ノ遠近ト其他、命
機様トニヨツテ幅ク定メ得ベシ

令ヲ受ケシ如ク所置スル事ヲ拒ミ且怠リ、又台下此間
ニオイテ、日本政府ノ名ニテ所置アリナカラ、唯々命
令ヲ下シタリトイヘル計ニテ、外ニ正実ナル説ヲ告ル
事ナク、時限ナシニ過シ給フ事、若シ後日ニ顯ル、時
ハ、日本政府ヨリ不列顛政府ニ向テ無礼ヲ謝シ、尊敬
シテ大ニ賠償ヲセサルヲ得サルニ至ルヘシ、然レトモ
不列顛政府ハ、其国民ヲ罪ナクシテ殺害セラレ、免ス

ヘカラサル惨刻暴戾ナル所業ヲ、日本政府ニ向テ告訴スヘキヲ命スル事ヲ務ム、

英国女王ノシャルセタフェー

ルエトウール

イ・シント・ン
ジョン・ニール 手記

日本在留書記官

エル・ユーステン 訳

第二十一

亜国ヨリ条約ノ義ニ付申出候書付写

一 亜国ミニストルヨリ申出候条約改正仕度箇条ハ、五ヶ条ニ御座候、且右五ヶ条御取行ニ相成候ハ、生麥一件ニ付、英国ニテ忿怒仕居候義モ相解ケ可申様申上候、右五ヶ条左之通、

第一

一 高麗并對馬御開

第二

一 エントレホット御製作

第三

一 製茶櫃包無税

第四

一 馬并獸類輸出

第五

一 諸品輸出無税

第二十二

御老中衆ヨリ各国ミニストル江被相贈候御書簡写

各国ミニストル江

以書簡申入候、東海道之内往還附替之儀ニ付、先頃中ヨリ以書簡申入、猶外国奉行ヨリモ談合ニ相及ヒ置シ如ク、其筋之モノニオイテ地勢ヲ篤ト為相調候処、是迄厚木往還ト唱來候一筋之道路之外、附替ヘキ場所無之由、右ハ別紙(圖説)繪図之通、西ハ平塚・藤澤之間、馬入川之西ヨリ北ニ分レ、直ニ江戸江達スル道筋ニシテ、神奈川ヨリハ凡五六里程モ隔居、条約遊歩之間纒ニ路程十里之外ニ不出候得共、外国人非常之憂等懸念之上取計候事ニテ、右往還筋大名其外通行ノ節ハ、懸念之筋モ有之候ニ付、其段神奈川奉行ヨリモ其コンシユル江相達候節ハ、英国人遊歩致見合候様致度、尤平常之歩行迄差留候筋ニハ無之、殊ニ居留地ハ程遠キ場所故、絶テ差障モアルマシク被存候ニ付、弥右道筋ニ可取整ト存候間、此段及打合候、右同意アランコトヲ望ム、

拜具謹言、

板倉周防守花押

水野和泉守全

右ハ島津三郎生麥一条ヨリ右様御吟味相成候ニ付、

姑ク爰ニ記ス、

第二十三

英国公使ヨリ外国事務宰相江相呈候書簡写

西曆千八百六拾二年十一月二十五日

我文久二年

外国事務宰相台下ニ呈ス

余当港ニ在留ノ英国ノコンシユルヨリ承リシニ、川崎ト程ケ谷トノ間ニ二十三ノ番所ヲ建テ、此内ニ役人ヲ置タル事ヲ、神奈川奉行ヨリコンシユルニ申遣シタルヨシ、並ニ右番所ノ手配ヲ英国ノ人民ニ知シムベシト、奉行ヨリコンシユルニ頼ミタル由ナリ、

条約書ニテ外国人ニ許シタル境内ノ、東海道ヲ無難ニスル事ノ極テ肝要ナル事ハ、第九月十四日英人ニ對シ暴戻ヲ行ヒ、且彼等ヲ殺害セシ一件ヨリ以来、余ト台下ト談判ニ及ヒ、且書簡ニテ掛合タル大切ナル評議ノ事ナリ、

右之如ク憐ムヘク、且不幸ナル事ノ再ヒ生セサル様ニ、

防クヘキ手配ニナサント、台下ヨリ余ニ約シ給ヒシ事

ノ成否ニ付テハ、余台下ヨリ報告アラシム事ヲ待居タリ、

此事件ニ付台下ハ余ニ報告スル事ナク、神奈川奉行ニ

命シテコンシユルニ告シラシメ給ヘリ、是故ニ右ノ報

告ヲ直ニ余カ手ニ成ラサルヲ以テ、是迄ノ手配並ニ後

来ノ手配ニ付、台下ヨリ余ニ明瞭ニシテ且確然タル報

告ヲ与ヒ給フコトヲ請フ、然ル時ハ確定シタル境界之

内ニ於テ、何レノ処ニテモ暴戻ニ逢フ事ナク、東海道

ヲ無難ニ往来シ得ヘキ事ヲ、英国之人民ニ告示シ得ヘ

キナリ、故ニ台下余ニ左ノ事件ヲ知シメ給ハン事ヲ請

フ、

第一

一右二十三ノ番所ハ、建ント欲シテ目論見タル全数ナ

ルヤ、尚成就セサル者アルヤ、

第二

一番所毎ニ詰メタル五人ノ番人ハ、始終其番所ニアリ

テ、其前ヲ往来スル外国人ヲ見留メ得ルヤ、又ハ右

ノ番人ハ始終交代スル者ナルヤ、

第三

一 外国人ヲ警衛スルニ、右ノ番人ニハ如何ナル命令ヲ
与ヒ置給ヘルヤ、此一条ハ台下余二十分明瞭ニ報告
シ給ハン事ヲ願フ所ナリ、

第四

一 大名通行ノ為メ、新道ハ已ニ開キ給ヒシヤ、又開キ
給ハスバ、何ノ時ニ開キ給フヤ、

第五

一 此手配ニテ、英国ノ人民確定シタル境界内ハ、難ナ
ク東海道ヲ往来スル事ヲ得テ、大名其外ノ通行ノ為
ニ暴戻ヲ受ケ、難洪ヲ蒙ル事ナキヤ、
右ハ切迫ナル報告ナリ、

英国女王ノシャルセタフェー
ルエトウール

イ・シント・ジョン
ニール 手記

日本在留書記官

〔薩州記事（国立公文書館所蔵）にて校訂〕

文久2年(1862)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事歌掌史料」(紙数五六枚)の記載あり〕

目録

文久二壬戌年八月廿一日嶋津三郎家来於東海道生麥村英人ヲ殺傷致候ニ付自 公辺償金被指出候始末

第一

一小笠原圖書頭殿江被 仰渡候御書付写

第二

一御老中衆英国岡士江被相贈候御書簡写

第三

一尾張様水戸様御二方ヨリ関白殿下江奉捧候御書簡写

第四

一外国奉行淺野伊賀守殿英国公使応接大略写

第五

一小笠原圖書頭殿ヨリ英国岡士江被相贈候御書簡写

第六

一神奈川奉行衆英国岡士等談判大略写

第七

一小笠原圖書頭殿ヨリ英国公使江被相贈候御書簡写

第八

一水戸中納言様関白殿下江奉捧候御書簡写

第九

一京都ヨリ被 仰出候御書附写

第十

一京都ヨリ水戸殿江御沙汰書写

第十一

一償金ノ義ニ付御尋ノ趣申上候書付写

第十二

一英国勘定役指出候償金受取書写

第十三

一 横濱風説

第十四

一 風説書

三港拒絶之始末

第一

一 亥四月廿一日御老中衆御演達写

第二

一 御触書写

第三

一 亥四月廿二日松平豊前守殿ヨリ神奈川奉行衆江御渡

ノ御書付写

第四

一 京都御旅行先ヨリ御老中水野和泉守殿板倉周防守殿

ヨリ神奈川奉行淺野伊賀守殿江被相贈候御書簡大略

写

第五

一 各国拒絶ノ詔写

附

御老中衆御達書写

第六

一 五月八日神奈川駅ニテ同所奉行淺野伊賀守殿山口信

濃守殿御兩人一橋様御小休所江被罷出申上候次第大

略写

一 橋様三港拒絶一条ニ付京都ヨリ態々御帰府ノ由

第七

一 小笠原圖書頭殿ヨリ各国公使江被相贈候御書簡写

第八

一 佛国公使小笠原圖書頭殿江相呈候返簡写

第九

一 亜国公使全断

第十

一 葡国岡士小笠原圖書頭殿江相呈候返簡写

第十一

一 英国公使同断

第十二

一 蘭国公使同断

第十三

一 孛国公使同断

第十四

一 英国公使小笠原圖書頭殿江相呈候書簡写

第十五

一 小笠原圖書頭殿ヨリ英国公使江被相贈候御返簡写

第十六

一 佛国坂岡士ヨリ神奈川奉行衆江相呈候書簡写

第十七

一 亥五月十一日於京都野々宮卿ヨリ松平主税頭殿江御

口上御達書写

第十八

一 風説

第十九

一 松平肥後守殿等京都江被差出候御願書大略写

第二十

一 御老中衆ヨリ各国公使等江被相贈候御書簡写

第二十一

一 外国奉行衆ヨリ葡国公使江被相贈候御書簡写

第二十二

一 横濱新聞

二 文久二壬戌年八月二十一日鳴津三郎家

来於東海道生麥村英人ヲ殺傷致候ニ付

自公辺償金被差出候始末

第一

小笠原圖書頭殿江被仰渡候御書付写

小笠原圖書頭

此度英国軍艦横濱港江渡来ニ付、応接ノ儀ハ其方江御
委任被 遊候間、早々江戸表江相越、十分取計候様可
被致候事、
(三七)

四月

第二

御老中衆ヨリ英国岡士江被相贈候御書簡写

貌利太尼亜(代理公使)シヤルセ・タフェール

兼(總領事)コンシユル・セネラール

エキセルレンシー(閣下)

イ・シント・シマン・ニール江

以書簡申入候、兼テ被申立候十一万ホントステルリン
クノ高渡シ方手順ノ儀ハ、此程菊地伊豫守(備中)・柴田貞太
郎(備前)ヲ以テ談判為及候通ニテ異存無之候、尤薩州江關係
ノ廉ハ外引合向有之、明後廿七日拙者ノ内、其表江出
張ノ上面晤致シ度候ニ付、其節取束ネ一同談判可及卜
存候間、左様被心得候様致度、此段申入候、拜具謹言、

文久三亥年四月廿四日

松平豊前守北押(信義老中、島崎藩主)

井上河内守全(正直老中、浜松藩主)

小笠原圖書頭全(長行老中格)

右小笠原圖書頭殿御東下後、償金被差出候事ニ御吟

味相濟候ニ付、其次第被仰入候事、

第三

尾張様水戸様御二方ヨリ関白殿下江奉捧候御書簡写奉謹呈候、向暑之候ニ御座候得共、益御機嫌能奉恐悦候、然ハ英艦一条ニ付、諸有司共段々申合候処、一休生麥ノ事ハ全ク別事ニ有之、攘夷応接相混候テハ曲直名義ノ筋相立不申候ニ付、英国江ハ償金指出シ、然ル上拒絶ノ談判取掛リ候筈評決相成申候、償金ノ所兼テ見込トハ相違仕候得共、事情不得止、兼テ慶徳江被仰出ノ御趣意モ有之、大樹ヨリモ外夷所置振ノ委任被致候事ニテ、臨機取計仕候段、宜御推察被成下候様奉願上候、依テ奉捧寸楮候、誠恐百拜、

四月二十八日

水戸中納言(徳川慶徳)

尾張中納言(徳川茂徳)

鷹司関白様(輔懸)

第四

外国奉行淺野伊賀守殿英国公使応接書大略写(マコ)

五月三日、早馬ニテ閣老小笠原圖書頭殿ヨリ淺野伊賀守殿江、明四日英国ノアトミラール江償金指シ出シ可(規 暫)

申管ノ処、差支ヘ有之、来ル七日ニ圖書頭出張、公使

江面会委細談判、其上償金可渡候間、夫レマテノ処可

被待云々ノ書簡ヲ以テ公使マテ申入候間、右書簡早速

公使方江可被相渡、其節猶其許ヨリモ口上ヲ以テ、大

略申入候様トノ御書簡到来ニ付、直々応接有之候、大

略左ニ記ス、

(御奉行)

一閣老方ヨリ書簡ヲ以テ申入候故、全体ノ子細柄ハ相

心得不申候得共、閣老ヨリ拙者方江申越候ハ、明四

日償金指出ヘク筈ノ処指支エコレアリ、来ル七日圖書

書頭爰元江出張、委細面晤ヲ尽シ、其上ニテ直様可

相渡候、其マテノ間被待度トノ段、拙者ヨリ猶ホ申

入候様ト申越候、尤委細ハ書簡中ニ説述有之趣ニ候、

(英公)

一明四日償金指出ヘクトノ趣ニ付、アトミラール私共

マテ其心得ニコレアリ、然ルニ来ル七日ニイタシ度ト被仰候テハ、甚タ不都合ニ付、待チ兼ネ候間、明日中是非受取度奉存候、

(奉)

一左候ハ、即刻出府、閣老方へ申上可及返事、夫迄ノ間被待度候、

(英)

一明日十時迄ノ間返事承度、五ミニト相待候テハ存寄有之候、

(奉)

一成丈十時迄ニ可及返事候、

右畢テ退席、

第五

小笠原圖書頭殿ヨリ英国岡士江被相贈候御書簡写

貌利太尼亞シャルセ・タフエール

兼コンシユル・セネラール

エキセルレンシー

イ・シント・シヨン・ニール江

以書簡申入候、明三日兼テ約諾ノ金子可相渡処、指支ノ儀出来、何分本日相渡候儀出来致シカタク、何レ出

張ノ上談判可及候間、来ル七日マテ被相待候様致シ度、此段申入候、拜具謹言

文久三亥年五月二日

小笠原圖書頭花押

第六

神奈川奉行衆英国岡士等談判大略写

一神奈川奉行淺野伊賀守殿五月三日夕刻出府、翌四日朝又々横濱港江被相戻、英之ミニストル館江参リ及談判候ハ、昨日其許江及談話候節、来ル七日閣老圖書頭出張迄待チ與レ度ト申入候処、其許申ニハ、今十時マテニ挨拶受取度ト申スコトニ付、昨夕出府、圖書頭ニ承リ合セ、今日帰港致シ候、サテ圖書頭申スニハ、今昼十時ニハ何分ニモ出張イタシ兼候間、可相成ハ夜十時マテ被待度候、左候得ハ出張ノ上、委細可尽面晤トノ趣ニ候ト申入候得ハ、彼モ漸ク承引致シ候ニ付、夫レノ外、外国人共饗応ノ料理、或ハ食器台ニ至ル迄俄ニ支度イタシ、其外御役人等何レモ戸部御役所江相詰、閣老ノ来ルヲ待居候得共、夜四ツ時頃ニ相成候テモ更ニ御出張無之、外国人江対シ不都合故、通弁ヲ以又々申入候ハ、閣老今夜十時ニ面会ノ積リニ申入置候処、未

夕出張無之、就テハ今夜出張ノ儀何分覚束ナク、左様被心得度ト申入候処、コンシユル申スニハ、左候ハ、十二時マテ相待ヘク、若シ御出張コレナキ時ハ、此上無拠、船將ノ職掌ヲ尽候外無御座旨申聞候、然ルニ十二時ニ相成候テモ御出張コレナキニ付、弥軍艦ヨリ発砲仕候事ニ可有之ト、神奈川奉行始何レモ覚悟相極、夫レノ支配向ノ者江モ相達シ候処、彼レ是仕候内既ニ鶏鳴、翌朝ニ相成、彼ヨリハ更ニ一ノ発砲モ無之候ニ付、大ニ安心致シ候由ニ御座候、

一 全五日朝、各国コンシユルヲ呼ヒ寄セ、運上所江御奉行ヨリ申入候ハ、扱此度償金ノ儀ニ付、昨四日ニ指遣シ積リノ処指支エ有之、来ル七日ニイタシ度ト英ノ公使へ申入候処、彼待兼ネ候趣ニテ、四日ノ十時マテニ挨拶無之トキハ、存寄リ有之トノ趣ニ付、拙者出府ノ上承合セ候処、同日夜十時マテ閣老出張面晤可致トノヨシニ付、其段申入候得ハ、漸ク承知ニ相成候、然ルニ夜十時ニ相成候テモ閣老參リ不申候ニ付、又其段公使江申向候処、公使申スハ、夜十二時マテ相待ツヘク、若シ十二時マテニモ御挨拶之レナキトキハ、此上勸弁難相成候間、船將ノ職掌ヲ尽スヘクト申聞候、然ルニ

十二時ニ至候テモ閣老不相越ニ付テハ、是マテノ交際モ手切レト申者ニ有之、依テ英国ヨリ何時兵端ヲ開クモ難計、彼ヨリ開候得ハ我ヨリモ開候、左様致シ候節ハ、英人ト各人ノ見分不相成故、遂ニハ誤テ各人ヲモ打チ果シ候様可相成致ト被存、依テ類入候ハ、英ト闕候為メ、各人ニ迷惑掛ルモ氣ノ毒ナレトモ、先怪我不致様夫レノ支度有之度ト申入候ニ付、各人共ノ内苦情申者有之、右ハ三ヶ条大事件、英ヨリ申立候ヨリ既ニ幾日ニ相成候哉、然ルニ只今ニ相片付不申候テハ困入申候、戦ト申義発輝ト相分リ候得ハ、私共モ夫レノ支度モ可致候得共、是マテ只々因循致シ、今度ニ至リ漸ク相決候体ニ相見得候、私共ニモ如何ニモ迷惑ナト、申者往々有之由、

一 英ノコンシユル申スニハ、カクノコトク混雜イタシ候上ハ、仮令償金指出サレ候テモ受取申間敷、其訳ハ一旦差出候積リニ相成、今ニ至リ彼是延引イタシ、何欵氣味悪シキ金子ニ有之故ニ候、夫レニ仮令金子受取候ニイタセ、本国ヨリ三郎ノ首級ヲ取候様ト申越シ候儀モ有之候得ハ、是非首級ヲ取候積リニ有之候、然ルニ日本ニ於テモ首級ヲモ渡サス、償金ヲモ渡サス候テハ、

是非一戦ニモ可相成候、就テハ日本ノ兵備整ヒ次第、何時ニテモ相始メ申スヘクト申居候、

此時御奉行答ニハ、於我國モ何時ニテモ其国ノ都合次第ニテ、兵端相開ヘクト申入候事、

一右談話畢テ各国コンシユル運上所ヲ引キ取り、英ノアトミラール方ヘ參候ヨシ、其節英ノアトミラール申スニハ、万里ノ波濤ヲ経テステニ百日余滞在、一箇条モ弁セス候テハ木偶人ヨリモ劣リ、本国政府ヘ対シ面目ヲ失ヒ、マタ各国江対シ候テモ面目コレナク、第一英國ノ恥辱ニ相成候間、是非此度一戦致サス候テハ、名義相立チ不申候ト申居候、尤モ横濱ニ於テ戦争開カス、多分大坂江相廻候様可相成ヨシ申居候事、

第七

小笠原圖書頭殿ヨリ英國公使江被相贈候書簡写

貌利太尼亞シヤルセ・タフエール

兼コンシユル・セネラール

エキセルレンシー

イ・シント・シヨン・ニール江

以書簡申入候、兼テ約諾之金子一面晤之上相渡度、今七日マテ被相待候様申入置候処、猶ホ去ル四日申入候

通、病ニ罹リ未タ平癒致サス、三五日以内出張對話心元ナク、氣ノ毒ノ至ニ候得共、今暫ク猶予致シ呉候様所望ニ候、拜具謹言、

五月七日

小笠原圖書頭

第八

水戸中納言様関白殿下江奉捧候御書簡写

生麥一件ニ付、償金遣候筈ニ尾張中納言始メ役々一同評議ノ処、於京師ハ指出不申方宜敷トノ 思食ニ付、償金ハ一円指出不申候様決定ニ相成候間、此段宜敷被仰上被下候様奉希上候、以上、

五月七日

水戸中納言

関白様

第九

京師ヨリ被 仰出候御書附写

五月九日於 禁中

水野和泉守江（忠精老中、山形藩主）

英夷申立候償金ノ儀、尾張中納言・水戸中納言以取計相遣候旨達

叡聞ニ、右償金ノ儀ハ御許容難被 遊旨、先達 御沙

汰ノ次第モ有之候処、事情止ムヲ得ス、臨機ノ処置ト

ハ申シナカラ不容易事柄、

勅意ニ相背候取扱如何ニ被 思食候、幕府処置振言上

可有之候、兼テ被 仰出候外夷拒絶ノ儀、弥以無相違

叡慮貫徹候様、屹度応接有之様 御沙汰之事、

第十

京師ヨリ水戸殿江御沙汰書写

水戸中納言江

英夷申立候償金之儀、事状不得止臨機之処置ヲ以テ相

遣候旨達

叡聞候、右償金ノ儀ハ御許容難被 遊旨、先達テ 御

沙汰ノ次第モ有之、不容易事柄

勅意ニ相背キ候様、取扱方如何ニ被 思食候、応接ノ

次第事實情態備ニ被 聞食度候、委曲明白ニ言上可有

之旨、関白殿被命候事、

五月九日

右五月十日京発、同十五日夕江戸着、十八日左ノ人

出立上京、

奥御右筆

長谷川(允通)作十郎

第十一

償金之儀ニ付御尋之趣申上候書付写

一英夷申立償金、不得止臨機ノ御処置ヲ以テ御渡方相成

候儀ニ付、水戸様江御沙汰ノ写先日指出申候ニ付、御

国元江御指下シ被為入 御覽候処、右ノ御受何様被

仰上候哉、且ツ右ノ趣ハ水戸様ヨリ御内々被仰登、前

段御沙汰被為蒙 仰候訳ニモ可有之哉、猶又探索可申

上旨、御国元ヨリ別テ被仰渡候段被仰渡、承知仕候、

左ニ申上候、

四月二十八日、止ムヲ得ス臨機ノ御取計ヲ以テ償金

被指出候旨、水戸様・尾張様御兩名ニテ、表向京師

へ御申越罷成候処、五月初旬ニ相成、右償金被指出

候儀ニ付、公刃色々議論相起リ、不被指出候事ニ

一旦相決候、依テ同月七日水戸様ヨリ、日数三日ノ

御便ヲ以テ、右ノ次第御申越ニ罷成候処、又々相交

シ、同月九日遂ニ被指出候訳ニ罷成申候、然処前申

候通、四月二十八日償金被差出候旨、御兩名ヲ以テ

御申越相成候ニ付、五月九日京師ニ於テ水戸様江御

沙汰有之、右御書付同月十五日水戸御屋敷江到着、

同月十八日〔頭書〕長谷川親善參照水戸様奥御祐筆長谷川作十郎御早ニテ被

相登、御申訳ノ為メ、御目代職御辞退之言上罷成候

由〔但少御辞退ノ義ハ切ニ被仰上候事ニ相見申候〕、且ツ又五月七日償金指出サレ

ス訳ニ御申越ニ付テハ、同月十日

主上 御満悦ニ被 思食候旨、京都ニ於テ直々水戸

様御親類松平主税〔親位〕頭様江、別段被仰出候事ト相見得

申候、然ルニ前書之通、償金被指出否ノ儀ニ付ハ、

頻リニ議論相変リ、遂ニ被指出候事ニ相決シ申候、

右ノ次第水戸様前後御不都合ニ付、無御抛御場合只

管御申訳被遊候外無之、依之当月十三日御申分旁御

大老大場〔景極〕一心齋、御早ニテ京都表江被為相登候事ニ

相聞得申候、

六月

第十二

英国勘定役指出候償金受取書写

西曆千八百六十三年第六月二十六日我文久三年五

月九日横濱不列顛於使臣館

千八百六十二年第六月二十六日、及第九月十四日不列

顛人民害セラレシモノ江補助トシテ、不列顛政府ヨリ

江戸ノ政府ニ求メタル金高十一万ホントステルリンク

之処ニ、洋銀四十万元ノ高ヲ三度ニ〔即今二十四日、二十五日ヲヨヒ二十六日、〕日
本政府名代外国奉行ヨリ落手セリ、

不列顛勘定役姓名印

但一ホントステルリンクハ四弗ニ当ル、

右ハ亥五月九日、英国江償金被相遣候事ニ御吟味御

決着罷成、小笠原圖書頭殿横濱へ御出張、日数三日

ノ内三ケ度ニ被相渡候事、

第十三

横濱風説

一五月三日九ツ半時ニ、英国江十四万トル御渡ニ相成候

筈之処、如何ノ子細ニ御座候哉、来ル七日迄日延申入候

処、彼等甚不平ヲ申聞候由、

一同四日、小笠原圖書頭殿御出ノ筈ノ処、御下濱無之候

ニ付、右之段申入候、且日延申入候得ハ右同様ノ由、

一全五日、又以テ右ノ段申入候処、左候ハ、アトミラル

江申談候上、可申上ト申聞候ヨシ、且ツ今日当奉行江

戸ヨリ帰濱ス、然ルニ出府ノ節閣老方江被相廻候処、

何故哉皆々御不平、更ニ御逢モ無之、漸ク小笠原殿江

御面会仕候処、何処マテモ償金相渡不申様、談合致シ

置可申、我等面談ノ上了簡有之事ニ候ト被申候ヨシ、

最初御談合ノ筋ト相違致シ、当奉行モ甚タ迷惑仕候ニ付、猶ホ又外御老中江面談仕候テ、小笠原殿ノ存慮御尋ネ仕候得共、我等モ不相分事ト被仰候由、依テ甚困却止ムヲ得ス、其形ニ帰港被成候、

但其節閣老并外官吏ニモ病氣相達候者有之候由、

一同日、英公使江直々申入候ハ、小笠原不快ニ付面会不致候間、今少々延引致シ呉、同人罷越候上、約条通り金子相渡可申ト被申候得ハ、アトミラール江可申談趣申聞候由、右ハ以前小笠原英公使ト面会ノ上、右ノ談判被成候ヲ、一日タリ共延引致シ候事申入候得ハ、失面目候事ナレトモ何トモ述ルニ言葉ナク、斯ノ仕合実ニ当奉行ハ憐ムヘキコトニ御座候、尤モ江戸表ヨリ同様ノ御達トモ、当地江相廻候得共、度々ノ儀トイヒ、且ツ弥破盟トモ相決シ可申事故、此度ハ諸役人江ノミ内々為申聞候マテニテ、市中等江ハ相触レ不申候、諸人ニハ以前ノ如ク御手当調役二十五両、上役十五両、下番五両ツ、家族立退ノ為メ御渡ニ相成申候、通弁方ハ一人勤メナル故、別段出精ト申ニ八十両御渡ニ相成候、模様ニヨリテハ又々立退可申事ト存居候、

(Depart Station)

一六日朝、友人英ノ書記サトート申者ニ尋問致シ候得ハ、

五日ヨリ一七日ノ間御返事相待可申旨、コンマンター(司令官)ヨリ当奉行江被申聞候趣ニ御座候、就テハ如何ノ模様ニ相成候モ難計候ニ付、外国人・婦人・小兒拵ハ今日ヨリ銘々勝手次第船江引移リ可申ヨシニ御座候、又去ル五日ノ違約ノ申分ハ、我政府ヨリ如何申越候哉ト相尋ネ候得ハ、最初金子相渡可申旨、閣老方京都ニテ台命ヲ蒙リテ取引被致候処、今度ノ

勅旨ニ、英国江金子相渡不申様、且ツ外国人ハ惣テ引払候様被仰聞候ニ付、金子渡シ候テハ、大君ノ任職ヲ奪ワレ、且ツ首ヲ被切候モ難計場合不得止候故、猶ホ小笠原圖書頭ヨリ可申入旨被申聞候、私思候ニ、日本風ニテ候ハ菊地(薩吉)・柴田(前出)ノ兩人ハ何レ切腹ナサル、テアロフト申ニ付、其人云ル、ニ、若シ此事虚ニ相成候ハ、彼面目アルマシク候間、武士道ヲ以テ、貴君之館ニテ切腹ナスヘクト存候ト申候得ハ、夫レハ真平御免ノ事ニ候ト申候ヨシ、又或ハ通弁ニ承リ候得ハ、只砲丸ノ来ルヲ待而已ニ御座候処、昨日コンマンターヨリ、当地在留ノ英国商人共、今日ヨリ八日ノ間ニ当地引払、船へ相移リ可申旨相達候、且ツ又英ノ公使ヨリ各国長官へ廻文ニ、今日ヨリ八日ノ間ニ我商人共舟工引払ハ

セ候ニ付、此間ニ日本人ニ対シ、僞忽無之様頼入候ト申事ニ御座候、右ノ通切迫ニ付、今早朝当奉行淺野伊賀守殿・山口信濃守殿(直敷 神奈川奉行)兩人急馬ニテ、極内々御談話ニ出府被成候、右サトフ并或人ノ話ニ少々不合之処モ御座候得共、何レニモ相違ナキ事ニ候間、如何ニモ相変可申候、左候得ハ先以来ル十三日迄ハ何欵相始リ可申ト被察候、唯今英軍艦セントウ蒸氣ヲ焚付居申候、之ハ長崎・支那上海へ指向、軍馬戦艦呼寄セ候趣ニ御座候、当港英軍艦セントーノ外九艘、佛二艘合テ十二艘ニ御座候、

一 外国人総テ日本浪人ト云ルハ、政府ヨリノ廻シ者ニテ、此者等ノ手ヲ借り外国人ヲ刳制セント欲スト疑念致シ居候処、昨五日当奉行淺野殿英国償金ノ儀ニ付、佛國公使江談話ノ節、淺野殿被申候ニハ、我等斯ク談話仕候中ニ浪人共潜ニ参リ、若シ密話ニテモ致シ居候欵ト疑念シ、我首ヲ斬リニ参ランモ難計候間、君ノ兵卒ヲ以テ門外ヲ警固セシメ、猥ニ日本人ヲ入レサル様、尤モ日本人ノ小遣ニテモ館内ヲ御出シ被下度ト頼入レケレハ、佛ノ公使尤ノ事ト許諾セリ、是ヨリ我浪人ノ因縁、及ヒ幕府ノ形情ヲ以テ委細ニ告ケレハ、彼等日頃

ノ疑惑一時ニ氷解シ、以テ政府ノ外国人ニ親切ナル事ヲ信セル体ニ罷成申候、就テハ今般英ニ対シ違約ノ旨意、拙者ニ於テモ何共合点行カス、英人ヨリ何時砲発致シヘキヤモ難計候間、此段兼テ御承知被致置度ト申候得ハ、御心配ノ段ハ尤ト存候、当地ニ於テ、英ヨリ運上所等へ放発ノ儀ハ決シテ有之間敷候、若シ於有之テハ、英国ノ外各国人民難渋ニ相及候儀ニ候得ハ、当地ニ於テハ決シテ乱妨無之由、被申聞候哉ニ御座候、

一去五日、当奉行ヨリ英公使へ御達ニハ、今般金子相渡シ候儀ハ、小笠原圖書頭罷越候迄延引致シ呉候様申入候処、彼答テ曰、我一慮ニ難計候間、アタミラールヘ申談候上可申述ト云々ノ由、

一 七日、英国公使ヨリ今般金子引取方延引ノ段被仰越候ニ付、其段アタミラールヘ申遣候得ハ、彼ヨリ返報可仕候、然トイフトモ、若シ此事違約ニモ相成候ハ、皇邦ノ一大事ニモ可被為及候間、早速正理ノ御決答モ御座候ハ、今一度ハ私ヨリ御取次可仕ヨシ、当奉行迄申出候ヨシ、斯ク公使モ忙(忙)レ果候様子ニ相見得申候、兼ネテ承リ居候通、和親中彼此ノ談判ハ公使ノ預ル所ニ候得共、此度ノ一条ハ当港公使ノ職掌ニ無之、アタ

ミラールヨリ直達可申ヲ、漸ク之ヲ相頼ミ候、此上談判整ハスシテ、公使ヨリ其由ヲアタミラールヘ相譲リ候上ハ、最早和親相絶トモ可申、此後ハアタミラールノ一存ニテ、何方ニモ地理形勢ヲ見合セ、兵端ヲ可開趣ニ御座候、左候ハ、今般小笠原殿到着マテノ日延ハ、既ニ聞入有之間敷ト存候処、彼等モ軍事ニ預ラサル者ヲ立退セ、又ハ上海ヘモ一船遣シ候様子、何レモ万事彼ノ整フマテハ相延可申ト存候得共、此後何様ノ応接有之哉、実ニ不安心ノ事ニ候、又佛ノ公使等ノ説ニ寄レハ、当地ノ儀ハ各国人民在留ノ為メ、却テ非常ノ事有之間敷歟ト申候得ハ、老若婦女ナトハ逃ルニ道ナク相成申間敷哉ト、心配罷在候、

右ノ件々、英人立腹モ誠ニ無余儀事ニ存候、如何トナレハ、軍艦渡来仕候ヨリ数日ノ延引ニ相成候上、愈去月二十八日、談判ノ条々ヲ英国ヘ報告ノ為メ、軍艦一艘出帆仕候、然ルニ去ル三日、先以十四万トル御渡シノ条約違約ニ相成根元、二十八日菊地・柴田ノ談判ハ、前月二十一日井上河内守殿ヨリ御達ニ相成候ニハ、名義ヲ正シ、扶助金ヲ被相送候ト、文意ニ依テモ無相違事ト奉存候、然ルニ此度ノ一件ニ、小笠原侯ノ一意ニ出

ル故、閣老方モ不平ヲ懷キ、病ト称シ候方モ有之ヨシ、柴田・菊地ノ両侯モ当地不都合ノヨシ、之ニ依テ見レハ、別紙 勅旨等ニテ、最初之御趣意相変候モノナルカ故ニ候得共、何事モ朝変更改ニテ、三歳ノ小児ヲ欺キ候様ニテハ不相濟義ト存候、

一七ツ半時当奉行帰港、於運上所夜九ツ過迄談論有之候由、

一八日昼九ツ時頃、一橋公神奈川御着、夫ヨリ当港江御出ノ処、御延引ニ付、当奉行御呼出ニ相成、二時程御嘶有之、川崎御泊ノ所急ニ江戸迄御出ニ相成申候由、

但シ当港フランスミニストル館ニテ、英国公使トハ

ツ時頃迄応接コレアリ候、

一九日、小笠原侯昨夕刻蒸気船鯉魚門船ニテ御出相成、上陸ハ不被成候故、当奉行ヨリ右船ヘ御出、夫ヨリフランスミニストル江御出往復有之、夜八ツ時御引取ニ相成申候、右ニ付今朝四十四万トル英国公使館ヘ御送ニ相成候事、当時ドル一枚三十六匁三分ト定メ、貳拾六万六千貳百兩ニ相成申候、

一小笠原侯右船ニテ今朝当港出帆、大坂江御出ニ相成申候、右ニ付、違約ノ儀ハ漸々ナンノカンノトテ相濟候

得ハ、此後薩州一条、又鎖港ハ如何相成申事ヤラ相分
リ不申候、

五月

第十四

風説書

一 江戸表ヨリ二十万弗相廻リ、当港ヨリモ二十万弗、都合
四十万弗ノ償金指出候由、

一段々談判ノ上、何日償金渡スヘクト決答致候処、英ノ
ミニストル申スニハ、島津ノ首級モ受取度ト申出候故、
左候テハ償金不相渡候間、暫ク被待度ト、外国奉行ヨ
リ及對話候ヨシニ御座候、

一 又英ノコンシュル申ニハ、仮令償金受取候テモ、島津
存生ノ上ハ矢張又英人ヲ可殺害、依テ同人ノ首級ヲ是
非受取候様ト、本国女王ヨリ申来候、若シ御渡無之候
得ハ、薩州江軍艦指向、首級ヲ取ヘシト申居候由、

三 三港拒絶之始末

第一

亥四月廿一日御老中衆御演達寫
御達候儀ニハ無之候得共、不廉立様御達ノヨシニテ、

別紙御書付ノ通、此度横濱鎖港ノ応接御取掛相成候ニ
付テハ、第一曲直名義ヲ治正シ無之候テハ不相成候ニ
付、生麥ニオイテ被害候者ノ為メ、法養償金被指遣候
儀ニ有之、右償金被指出候モ、畢竟鎖港ノ談判ニ相成
候所ヨリノ儀ニ有之候、右様相成候テモ、家来末々マ
テ自然心得違ヒノ所置無之様、厚ク可被申付候、去リ
ナカラ、軍艦モ滞留ノ事故、万一彼ヨリ何様ノ儀出来
シ候モ難計ニ付、此所ハ兼テ覚悟可有之様ニト、反復
御演達有之由、

別紙御書付寫

今度英国軍艦渡来ノ主意、曲直ヲ正シ名義ヲ明ニシ、
随テ鎖港ノ談判ニ可及候間、右談判中ハ家来下々マテ
無謀過激ノ所業無之様、能々申付ヘク、時宜ニ寄り戦
争ト相成候節ハ、一心同力御国威相立候様、前以テ銘
々覚悟可有之候、

右之通、万石以上以下ノ面々江可被相達候、

四月二十一日

第二

御触書寫

生麥殺傷一件ニ付、横濱港江渡来ノ英国船応接ノ儀、

曲直ヲ正シ不申候テハ、名義難相立候ニ付、扶助金被遣、横濱鎖港ノ儀談判御取掛ニ付テハ、時宜ニ寄戦争モ難計候間、兼テ相達候通覚悟用意可致候、
右之通万石以上ノ面々江可被相達候、

四月廿二日

第三

亥四月二十二日松平豊前守殿ヨリ神奈川奉行江御渡ノ御書付写

今度鎖港ノ及談判候ニ付テハ、一凶ニ御手切ト相心得、万一談判中心得違ノ者有之、不都合ノ儀有之候節ハ、皇国ノ御為ニ不相成候間、談判中無謀ノ所業ニ及候者ハ早速召捕、聊乱妨等ノ儀無之様、御固ノ面々江相達候間、其趣相心得、若シ右様ノ者有之候節ハ、召捕打果候テモ不苦候間、支配向ハ勿論、其外共兼テ相心得候様可被取計候事、

第四

京師御旅行先ヨリ御老中水野和泉守殿板倉周防守殿ヨリ神奈川奉行淺野伊賀守殿江被相贈候御書簡大略

写

一公方様御儀、御機嫌能被為在候間、可安心トノ趣、

一大坂表ハ攝海枢要ノ地ニ付、御見置ノタメ公方様御儀、当四月二十一日京師御發駕被遊候事、

一三港拒絶被仰出候ニ付テハ、御老中方ノ内ヨリ各国公使共へ御断ニ及候積リ、尤是迄ノ和親ヲ破ニハ無之、貿易姑ク御断ニ相成候趣、

一嶋津三郎家来殺害致シ候英人ノ償ハ可指出、其代リニハ日本人ニモ数人殺害ヲ受候者有之、右ノ償ヲ可受取、若シ右償ヲ不指出時ハ、三郎ノ償モ不指出趣、外国奉行ヨリ公使江及掛合候様可致由、

四月二十一日

第五

各国拒絶ノ詔写

附

御老中衆ヨリ御達書写

魯・佛・英・和・米・葡・李ノ国々、先年ヨリ和親交易願出、条約モ取結候得共、右ハ其節之役人共、

朝廷何濟ヲ不相待取計候儀ヲ其俣仕来候所、昨年從朝廷外国和親交易拒絶ノ詔有之、是迄取計方不宜、役人共夫々嚴罰加候間、其方共モ長崎・箱館・横濱三港商館凡三十日迄ニ引払、一人モ不残様帰国可致候、

若於違背ハ可及一戰候条、得其意可申候事、

右之通ニハ候得共、第一 御留守中ト申、殊ニ和蘭モ

同様ノ御所置ニ相成候儀ハ、御主意柄難相分候ニ付、

右ノ御主意、此度尾張大納言殿急々上京御伺相成候間、
(徳川慶徳)

夫迄ノ所ハ是迄ノ通穩便ニ相心得可申候事、

四月二十七日

第六

五月八日神奈川駅ニテ同所御奉行淺野伊賀守殿山口

信濃守殿御両人一橋様御小休所江被罷出被申上候次

第大略写

一橋様三港拒絶一条ニ付、京都ヨリ態々御帰府罷

成候由、

一方今ノ形勢、是非共開國論不被相立候テハ、国家ノ御

為メニハ決シテ罷成申間敷趣云々申上候処、一橋様被

仰候ハ、然ラハ今夜川崎泊ノ積リニ候得共、乘リ切り

ニテ早々帰府、閣老方ヲ呼ヒ出シ評議可致候間、兩奉

行ニオイテモ出府有之度被仰聞候ニ付、何レモ出府ノ

積リニ申上置キ退散、直ニ運上所江被帰候、然処如何

様ノ子細御座候哉、兩奉行共病氣又ハ御用多等ヲ申立、

終ニ出府無之ヨシ、定テ一橋公江对シ、不都合ノ事ニ

テモ有之哉ニ相聞得候事、

第七

小笠原圖書頭殿ヨリ各国公使江被相贈候御書簡写

各国ミニストル江

以書簡申入候、然ハ邦内人心外交ヲ不欲ニ付、外国人

ヲ卻ケ港ヲ鎖スヘキ旨、京師ヨリ 台命ニテ、右応接

ノ儀自分江御委任相成候間、委細面談ニヲヨフヘク候

得共、先ツ此段申達置候、拜具謹言、

文久三亥五月九日

小笠原圖書頭花押

右ハ五月九日、償金被指出候事ニ御決着ノ上、直ニ

鎖港ノ御書付御渡シニ相成候事、

第八

佛国公使小笠原圖書頭殿江相呈候返簡写

西曆千八百六十三年第六月廿四日於横濱

外国事務宰相小笠原圖書頭台下ニ呈ス

余台下ノ報書ヲ落手セリ、其書中佛国本条約面ニテ明

ナル如ク、千八百五十八年 皇国日本大君ト、我国君

ト結タル条约ニ基キ、佛人貿易ノ為ニ開キタル日本ノ

港々ヲ鎖スヘキ事ヲ、台下余ト談判スヘキ旨ヲ大君ヨ

リ命セラレタル由ヲ載タリ、

台下ノ書中、外国事務掛リナル他ノ御老中ノ手記アラ
ストイヘトモ、余台下ニ回答ス、日本ト結タル条約ハ、
仮令日本ノ何レノ役人、之レニ違フノ告知アリトモ、
之ニ係ラス其条約ハ恒ニ全ク保守スヘク、又去歲欧州
ニ送ラレタル日本使節ト取極メタル定メノ如ク、執行
フヘキ事ナリ、是我帝國佛蘭西ノ英名ナル国君ノ政府
ニオイテモ然リト思フ、

然レトモ余ハ必ス台下ヨリ余ニ送ラレタル暴ナル告書
ヲ佛国ニ送レリ、文明ノ国々ノ史ニモ例アラサル、新
ニ条約ヲ破レルヲ修理シ、且斯ノ如キ事ヲ企ルモノヲ、
厳シク罰スルノ方法ヲ設ケ、速ニ取行ハシム為ナリ、
余謹テ台下ニ報告ス、帝國政府ヨリ右回答ノ来ル迄ハ、
諸条約前ノ如ク取り行フヘシ、且日本ノ諸官員誰ヲ問
ハス、台下左件ヲ報知アランコトヲ欲ス、日本ニ在ル
皇國佛蘭西ノ臣民ハ、今横濱ニアル支那日本近海水師
提督シヨウセースノ師タル佛國ノ兵卒ヲ以テ警衛シ、
安全ナラシムヘシ、千八百五十八年ニ取結ヒタル条約
ノ旨ヲ破ラントスル者ハ、水師提督何人ヲ別タス、陸
又海ニ於テ、之ニ応スルニ要用タル法方ヲ取ル事、彼

カ方寸ニアルヘシ、拝具謹言、

在日本佛國皇帝殿下ノ全權公使

(Duchesse de Bellecour)
トサンテヘルクール手記

書記官

ワアンテルウー真訳

第九

亞國公使小笠原圖書頭殿江相呈候返簡写

千八百六十三年第六月廿四日日本横濱合衆國使臣

館ニテ

外国事務宰相小笠原圖書頭台下ニ呈ス

余今日貴簡ヲ落手シタリ、其書中台下開タル港々ヲ閉
チ、日本在留ノ外国人ヲ卻クルノ全權ヲ、皇帝及ヒ大
君ヨリ受ケ給ヒタル旨ヲ載タリ、

余謹テ貴簡ニ回答ス、日本政府ト合衆國ト礼式ヲ執リ
行ヒ、本条約ヲ取結ヒ、其國臣民右ノ港々ニ居住シ、
貿易スルヲ許セリ、

故ニ此条約ハ、之ヲ捨テ廢スルヲ得サルヘシ、斯ノ如
キ方法ヲ設クルハ、余カ國ヲ辱カシムルモノニシテ、
恰モ軍期ヲ告知スルニ似タリ、

余貴簡ノ写ヲ合衆國フレンシテント江送ルヘシ、左スレ

ハフレシテント之ヲ落手シ、大ニ警愕^(驚)歎息シ輕視スベシ、

皇帝及ヒ大君ノ決定ヲ執リ行ハントスレハ、日本ハ条約ヲ取り結ヒタル諸國ト、戰爭ニ及フ事疑ナカルヘシ、斯ノ如キ事遂クヘキト思フハ、実ニ笑フヘキ事ニシテ、只々盛シナル皇國ニ荒蕪ヲ招クノミナラン、

此大切ナル職務ヲ強ヒテ慮リナク為スハ、無益ノ事ニシテ、廉直ノ所為ニ非ス、

鎖港ノ所為ハ大ナル惑ニシテ、是貴國ノ国力ヲ量ラス、西洋各国ノ敵スヘカラサル權威ヲ知ラサルナリ、是実ニ歎息スヘシ、

余只左件ヲ台下ニ告ク、日本在留合衆國ノ臣民今当港ニ在リ、又将ニ当港ニ来ラントスル合衆國海軍ヲ以テ警衛スヘシ、

若シ人命危ク、品物損亡スル時ハ、両様堅固ニ警固スヘシ、

余台下ノ書簡ノ意ヲ得ス、又斯ク設ケタル方法ニ異存セリ、日本政府此事ヨリ起ル諸事ヲ引受ケ、又合衆國臣民之レニヨリテ、悩ム諸損失ヲ引受ヘシ、敬白、

在日本合衆國ミニストル^(弁理公使)・レシテント

^(譯)ロベルト・エツチ・フライン手記

第十

葡國岡士小笠原圖書頭殿江相呈候返簡写

千八百六十三年第六月二十四日在日本神奈川葡

萄牙コンシユル所ニ於テ

小笠原圖書頭台下ニ呈ス

^(帝威)

皇ノ台命ニヨリテ条約諸國ノ臣民ヲ卻ケ、開タル港々

ヲ鎖スヘキ大君ノ命令ヲ蒙ラレ、又其全權ヲ任セラレ

シトノ貴簡ヲ落手セシヲ、余謹テ台下ニ報告ス、台下

ノ請ニ隨ヒ、貴簡ノ写シヲ葡萄牙國王殿下ノ政府ニ送

ルヘシ、

然レトモ序ニ余自ラ謹シテ、篤ト左件ヲ報告ス、葡葡

牙國及ヒ其臣民ノ利益迄関ルナレハ、条約諸國ノ臣民

ヲ卻ケ、開キタル港々ヲ鎖ストノ逼リニ向テ、最強ク

逆フモノナリ、

右ノ港々ハ、兩國ノ全權貴官礼ヲ厚クシテ、調印手記

シタル本条約ヲ以テ開レタリ、而シテ台下ニ於テ此ノ

如キ命ヲ施サル、事ハ、条約諸國ヘノ戦書トモ、又実

ニ皇國日本ヲシテ、政度不開ノ國トモ唱ヘラルヘシ、

千八百六十年第八月、江戸ニ於テ葡萄牙國王殿下・日

本大君殿下ノ間ニ、和親貿易ノ本条約取替ノ事ニ付テハ、下名ノ某其任ニ預リ、千八百六十二年第四月八日ニ、信誼ヲ以テ取替セテ為シタリ、故ニ余謹テ数言ヲ陳スルナリ、本条約ヲ強テ破ルトノ事ハ、必ス貴国ニ最大不幸ノ關係ヲ起スヲ免レ難ケレハ、右ニ関ル人々ヲ、余力ヲ尽シテ懇ニ戒陳ス、謹言、

葡萄牙国王殿下之コンシユル

エトハルト・カラルリ

第十一

英国岡士小笠原圖書頭殿江相呈候返簡写

千八百六十三年第六月二十四日横濱ニ於テ

外国事務執政小笠原圖書頭台下ニ呈ス

(代理公使)

日本在留不列顛女王殿下之シヤルセ・ターフェール成ル余カ同僚ト、齊シク台下大君殿下ノ命ニテ、余ニ名当テシ送り給ヘル告書ヲ落手シ、実ニ驚愕セリ、此細故ヲ載セタル拙キ報告ハ、姑ラク置テ論セス、此国ノ大君ト御門開キタル港々ヲ鎖シ、条約各国ノ臣民ヲ右港々ヨリ卻クル為メ、台下ヨリ斯ク報告シ給ヒタリ、皇帝・大君ノ処置ニ扱レハ、日本ニ困難ノ来ル事当然タリ、然ルヲ之ヲ全ク知ラサルハ何ソヤ、是余ニ不

列顛女王殿下ノ名代タル、余第一左件ニ注目ス、大不列顛此国トノ条約ヲ正シク守リ、猶扱メ、加之是迄ヨリ此条約ヲ自由ニシ、永久動サル様申立ル事疑ヒナク、ソハ嚴ニシテ日本ヨリ抗抵シ難キノ手筈ナリ、之ヲ柔ケ調ヘン事ハ日本ノ大危難ニ至ル迄、皇帝或ハ大君又ハ皇帝・大君共ニ秘スル処ノ理アリト、最信スヘキ手段ヲ逐一急ニ説明セラレナハ、此国ノ長官猶其権ヲ存スヘシ、是以テ余此国ノ長官江懇ニ左件ヲ忠告スルハ、余カ職務ヨリ台下ノ告書ニ扱リ、不列顛女王殿下ノ政府熟考ノ上事ヲ決セハ、今秘シ給ヘル諸種別ノ処置ヲ執リ行フトモ、其事仕応セサルヘシ、

然リト雖トモ、余又次条ヲ台下ニ告知セサルヲ得ス、今台下ヨリ申聞給ヘタル拙キ告書ハ、文明・不文民国ノ歴史ニモ例ナキ旨ヲ、大君殿下ニ奏シ給フヘシ、大君殿下必ス之ヲ御門ニ奏聞シ給ヒシ事、疑ナカルヘシ、此事ハ実ニ条約諸国ニ対シ、日本ヨリ軍期ヲ告知スルナリ、今速ニ鎖港論ヲ止メサレハ、日本国中ヲ速ニ嚴シキ罪ヲ以テ罰セスンハ非ス、

右ハ嚴酷ノ告書ナリ、

不列顛女王殿下之シヤルセ

タフエール

イ・シント・シヨン・ニール手記

書記官

(Richard Barend)
エル・ユーステン訳

第十二

蘭国岡士小笠原圖書頭殿江相呈候返簡写

千八百六十三年第六月二十四日荷蘭コンシユル所

ニテ

日本大君殿下ノ外国事務執政小笠原圖書頭台下ニ呈

ス

余謹ンテ、文久三年五月九日附ノ貴簡ヲ落手セシヲ報
ス、其書中台下開キタル港々ヲ鎖シ、条約ヲ取結タル
国々ノ外国人ヲ卻クルノ命ヲ、方今京都ニ居住シ給ヘ
ル大君殿下ヨリ受ケ給ヒタル旨ヲ載ス、右命ハ京都ヨ
リ下リタル由ナリ、是以テ余此事ヲ在日本荷蘭コンシ
ユルセネラール貴下報告スヘシ、

此条約違犯ハ未曾聞ノ事ニシテ、民律ニ於テモ枢要ノ
事ナレハ、荷蘭ト日本ト取結タル条約上ノ事ヲ決スル
ハ、余カ政府ノ任ナレハ、日本政府モ第一条約面ヲ固
守シ、執リ行フヲ務ト為サスンハ非ス、然レトモ荷蘭

臣民ニ許セル条約面ヲ破ルハ、余ニ於テ決テ承引ナラ
サルナリ、又左件ヲ説明ス、当港ヨリ荷蘭人ヲ卻クル、
余カ權威ニ及フ丈ケ手当ヲ以テ之ヲ防クヘシ、然レト
モ其異変ヨリ起ル諸損亡ノ償ハ、日本政府ノ引受ケト
ス、敬白、

荷蘭仮コンシユル

イメットマン手記

第十三

李国岡士小笠原圖書頭殿江相呈候返簡写

千八百六十三年第六月二十四日金川横濱ニテ

外国事務宰相小笠原圖書頭台下ニ呈ス、

余謹ンテ貴簡ヲ落手セシヲ報ス、其書中ニ台下開キタ
ル港ヲ鎖チ、条約ヲ取結ヒタル国々ノ臣民ヲ右港ヨリ
卻クル全権ヲ、大君殿下ヨリ受ケ給ヒタルヲ載ス、右
書中ニ、台下右ノ事件ニ付テ、余ト談判セント欲スト
ニ云ヘリ、

余時刻ヲ費スコトナク、台下ニ左件ヲ説明スルハ、余
カ職務タリ、余甚タ緊要ノ形勢ニ於テ、如此一般ノ民
律ト条約ノ取極ニ齟齬スル説明ニ付テハ、日本政府如
何ント、其談判ニ加ハルコトヲ得ヘキヤ、

余台下ノ乞ニ応シ、国王殿下ノ政府ニ此事ヲ報告スヘシ、左スレハ追テ余国王殿下ノ政府宜シキト思ヒタル手筈ヲ、台下ニ知ラスヘシ、

然レトモ余左件ヲ台下ニ告ク、千八百六十一年第一月二十四日、大君殿下ト字漏生国王殿下ノ名代、国王殿下之レゲント^官台下ト取結ヒタル条約面ニ基キ、余当港ニ在留ス、右条約ハ昨年字漏生江至リタル大君殿下ノ使節ト、右条約ニテハ余カ王ト愈堅固ニセルモノナリ、故ニ大君殿下ノ政府又御門ト雖トモ、偏^{マ、(頭九)}ナル説明ヲ余ニ申聞ケ給ヘルトモ、此条約ニ因テ、余及ヒ李漏生臣民ニ得タル免許ト、利益ヲ廢スルヲ決スルコト能ハス、故ニ余強テ王国政府、又其臣民ニ許シタル免許又利益ヲ捨テ、或ハ全ク廢スル目的ナル諸守法ニ従フヲ得ス、此条約違犯ハ、是迄諸民ノ記録ニモ見ヘサレハ、之ヨリ生スル余カ政府ノ申分ト、諸損亡ノ催促ハ、日本政府ノ引受ケタルヘシ、敬白、

在日本字漏生コンシユル

(Von Brandt)
フラン・フラント手記

第十四

英国岡士小笠原圖書頭殿江相呈候書簡写

千八百六十三年第六月二十五日横濱ニテ

外国事務執政小笠原圖書頭台下ニ呈ス

台下、当月廿四日付ノ貴簡ヲ余ニ送レリ、余条約ノ定メニ従ヒ、荷蘭ノ訳文ヲ証拠トシテ、右貴簡ヘ回答シタリ、

右書簡ハ甚タ緊要ノ事ナレハ、台下ノ手記シ給ヒタル日本文ヲ、文字ノマ、日本語ヲ理解スル此使臣館ノ歐羅巴通弁官ニ訳セシメタレハ、左件ノ違ヒアリ、貴簡ニ添フ荷蘭訳ト比較シタレハ、大ナル違アリ、

其荷蘭訳文ノ中ニハ、開キタル港ヲ鎖シ、又外国人トノ交ヲ絶ツヘキ命ナリトイヘリ、

日本文ノ中ニハ、一モ御門ノ命トイフ事ナシ、故ニ余謹ンテ台下ニ乞フ、此事ヲ余ニ説明シ給フヘシ、右ノ外違ノ廉々アレトモ、之ヲ載記セス、

不列顛女王殿下之シヤルセ

タフエール

イ・シント・シヨン・ニール手記

書記官

エル・ユーステン訳

第十五

小笠原圖書頭殿ヨリ英國公使江被相贈候御返簡写

貌利太尼亞シヤルセタフエール

兼コンシユルセネラール

エキセルレンシー

イ・シント・シヨン・ニール江

六月二十五日ト記セル足下ノ書簡落手セリ我五月二十五日、其書

中申越シタル趣解意セリ、昨日自分ヨリ達イマシタル書簡

和文ニ京師ヨリノ台命ト記載シタルハ、即 詔ヲ奉シ

テ 大君令シ給ヘル事ナリ、京師ハ 皇帝ノ在ス所ナ

レハ、京師ヨリト唱フル時ハ 詔タルコト、我邦内ニ

テハ判然タリ、故ニ改テ 皇帝ノ字ヲ下サ、ルナリ、

此旨了解アラシク欲ス、右回答如斯候、拜具謹言、

文久三亥年五月十日

小笠原圖書頭花押

第十六

佛国仮岡士ヨリ神奈川奉行衆江相呈候書簡写

千八百六十三年第七月一日、神奈川ニテ外国人トノ交

際ヲ止ル場ニ至レハ、日本政府ヨリ請ヒ受クヘキ償金

アリ、其大凡積リ算用書ヲ、余謹ンテ此書ト共ニ足下

ニ呈ス、敬白、

佛国仮コンシユル

ワンテルホー手記

ウエイウエイ訳

呈金川奉行

淺野伊賀守貴下

外国ノ交際ヲ止ムル時ハ、日本政府ニ付テ望ムヘ

キ償銀大凡積書

帝国海軍・陸軍ノ兵

第一セミラミス船ノアトミラールヨリ書上タル高

メキシコ弗 九千三百五拾五枚

第二諸雜費 全 千八百四拾五枚

第三石炭置場 全 壹 万 枚

第四ハタイロン組ノ士官并兵士八用 全 兵士三五 万 枚

公使館岡士所

第一騎馬隊諸向ノ償 全 六 千 枚

第二新規建立ニ取建タル岡士所并外國掛リ役人ヨリ雜費ヲ出シ海軍物置ノ償 全 八 千 枚

第三書記役共 全 六 千 枚

公使館附ノ人々

第一佛公使家財 全 二 万 二 千 枚

第二書記役兼板 全 九 千 枚

第三 フラウンテラファミリー 家族共	全	一万三千五百枚
第四 フレツキマン氏	全	八千枚
第五 ウエウエ氏	全	八千百枚
第六 テイルロツト氏	全	二千枚
第七 タレエキルレ	全	千五百枚
第一 僧	全	二万二千枚
第二 ボン氏	全	七千二百枚
第三 ホーレット	全	一万千枚
第四 フーレット	全	十五万枚
第五 コンタンズレ コトトルマン組	全	十万九千二百枚
第六 シユマルケヤ	全	二万千枚
第七 シユボンテス	全	四万枚
第八 デヨーセ	全	三万五百枚
第九 フェキコート	全	一万七千枚
第十 カルニール	全	六万七千枚
第十一 ヘツクトレリーントル	全	一万三千枚
第十二 マテウー	全	二万枚
第十三 キルフ	全	一万五千枚
第十四 テレカー	全	三万六千八十枚
第十五 ラントン	全	一万七千四百枚

第十六 レミスミント組
同人家族 全 四十五万五千枚

第十七 ラツテ 全 一万六千五百枚

第十八 カウウエル 全 四千枚

第十九 エムベル 全 五千枚

右横濱・神奈川ニ於テ、通計洋銀百十万千八百七拾

一枚

長崎ニ於テ十七万二千二百枚

通計百二十七万三千〇七十一枚

予カ算用、長崎・横濱ノ為メ弗ヲ以テ、在日本佛全

權公使モ宜シトス、

第十七

亥五月十一日野々宮卿ヨリ松平主税頭殿江御口上御

達書写

生麥一件、愈 神州ノ曲事ニ陥リ候テハ、独薩州家ノ

恥辱ノミニハ無之、乍恐 天朝ノ御瑕瑾、 竜顔江泥

土相塗候モ同様故、是非顛末相立候段、薩州家ハ勿論、

列藩ヨリ頻ニ建白モ有之、猶 天朝モ今般ノ始末柄、

委曲明白ニ御承知被 遊度被 思召候旨、被 仰出候

事、

五月

但列藩建白書ハ官武通紀ニ記ス、爰ニ略ス、

第十八

風説

一橋様、京師ヨリ外夷拒絶ノ命ヲ被為 蒙、態々御東下被遊候処、神奈川馭御小休所ニテ、同所奉行淺野伊賀守殿等ヨリ、迎モ拒絶相成兼候段議論ニ被及、夫ヨリ早馬ニテ御出府被為成、右ノ義ニ付閑老等江御評議相成候処、何レモ淺野殿同様ノ説ニテ、一橋様御説更ニ相徹不申、彼是不得已御辭職ノ願被指出候事ニ相成候事、

右御願書官武通紀ニ記ス、爰ニ略ス、

第十九

松平肥後守殿等京師江被指出候御願書大略写

去九日、於横濱表小笠原圖書頭以独断償金指出候一条、対 天朝申訳無之、何共深恐入存候、此上ハ老中帰府 応接致候テモ迎モ難及力、大樹自身発向仕度由、松平〔容候、金雜藩主〕 肥後守殿等ヨリ被相願候由、

五月

右全文官武通紀ニ記ス、参考スヘシ、

第二十

御老中衆ヨリ各国公使等江被相贈候御書簡写

佛・亜・英・蘭

公使江

李漏生

岡士江

以書簡申入候、先頃小笠原圖書頭在職ノ砌、鎖港ノ儀申入置シ書簡、頃日我政廷前議ヲ改ムルニ付テハ、被指戻候様致シ度、此段申入候、拜具謹言、

文久三亥年十月朔日

御老中方

四名花押

第二十一

外国奉行衆ヨリ葡国岡士江被相贈候御書簡写

葡萄牙

コンシユル江

以書簡申入候、先頃小笠原圖書頭在職中、鎖港ノ儀申入置シ書簡、此頃我政廷前議ヲ改ムルニ付テハ、被差戻候様致シ度旨、事務執政ヨリ被命候間、此段申入候、謹言、

文久三亥十月朔日

外国奉行

四名

第二十二

横濱新聞

当月第九日我九月廿八日ニ外国奉行三人、合衆国ノ使節館ニ来

リ、セネラールフロインニ応対シ、合衆国ノ軍艦セー

ムストンノオランダ商館長甲比丹フライスノ目前ニ於テ、嘗テ小笠原

ヨリ贈リタル鎖国攘夷ノ書簡ハ、間モナク再ヒ取り返
サルヘキ趣ヲ告ケタリ、

其後御老中ヨリ各国之ミニストルニ廻文ヲ贈リテ、小
笠原ノ書簡ヲ取り返サント欲スル由ヲ述タリ、蓋シ各
国政府ハ、日本政府ヨリ贈リタル此書簡ヲ目シテ、戦
争ヲ始ムヘキ告知ヲ為セルニ外ナラスト考ヘタルカ故
ニ、今此書簡ヲ取り返シタル事ハ、其宜シキヲ得タリ
トイフヘシ、

(薩州紀事(国立公文書館所蔵)にて校訂)

〔表紙〕

忠義公史料

文久二年 自一月
至四月

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

四 〔水府浪人自殺ニ付長州藩届書〕

四一
今十五日昼九ツ時比、書生体之者一人〔毛利敬親、長州藩主〕大膳大夫外櫻田

屋敷内稽古場へ罷越、家来桂小五郎〔本戸孝九郎名〕ト申者へ相對之儀

申入候処、折柄小五郎他行中ニ付、其由申聞候へ共、

待合相對可然トノ事ニ付、夜六半時小五郎帰宅及相對

候、然処是迄識面ノ者ニテモ無之候ニ付、姓名旨趣相

尋候処、水戸浪人内田萬之助ト相唱、今日御曲輪内ニ

於テ、及狼藉候党類ニ候処、機会ヲ失ヒ遺憾不少、於

途中致自殺候モ心外之儀ニ付、兼テ姓名ヲモ承及居候

間、死後作舞ヲモ相頼度罷越候趣申述候ニ付、相有メ

置、其段役向之者へ申達罷帰見候処、其場へ書付一通

残置、及自殺居候由申出候、此段御届申上候、以上、

松平大膳大夫家来

正月十五日

大和源八郎

水府浪人

財布 半切二卷

〔河野通起〕 三島三郎

〔懷中物内ニ斬好趣〕 〔意書ト認有之書付〕

〔川本惟二〕 豊原邦之助

〔懷中物一〕 麻裏草履一足

〔平山繁善〕 細谷忠齋

〔西仔短筒一挺〕 但玉目二匁五分程風呂敷ニ包有之

〔黒沢保徳〕 吉野政助

〔斬好趣意書ト認有之〕 書付、手拭一筋

〔小田朝儀〕 淺田儀助

〔西仔短筒一挺〕 足ハ例之取落ノ物

〔高畑朝正〕 相田千之允

〔本〕 〔細面集二册〕 木綿調卷一、内ニ斬好趣意書ト認有之

右之通、内櫻田御門持場死骸見分口書ニ御座候、

四二

文久二年壬戌正月十五日、於西丸下御老中安藤對馬守

登 城掛同勢へ切掛、對馬守へ手疵為負、一同討死イ

タシ候者、

豊原邦之助

〔二十三才九〕

三島三平

三十才位

細谷忠齋

三十二才位

吉野政助

二十三才位

杉見文之助

三十五才位

淺田儀助

三十才位

右死骸場所へ短筒二挺有之、銘々懷中ニ願書一通ツ、所持罷在、其文左ノ如シ、

〔申年三月：第一卷番号五〇七の斬奸趣意書と同文により削除〕

四ノ三

安藤様御供方手負左之通

深手 原田 莊兵衛

浅手 友田 六蔵

深手 小栗 平次郎本ノマ、

深手 松本 練次郎

浅手 上坂 大五郎

浅手 村上 秀二

浅手 齋藤 勇之助

浅手 高津 幸之丞

浅手 押 萬蔵

今朝交代後五時御太鼓ニテ、御老若方御登 城之御様子ニ付、見計トシテ私共冠木御門内迄罷出候処、立番同心共下座申込候ニ付、大御番所ニテモ下座仕罷在候処、立番同心共ヨリ御門外ニテ混雜之様子有之趣申込候ニ付、与力兩三人、同心四五人冠木御門内へ罷出様子見計候内、大和守殿御上リニテ、御門ノ嚴重心附候様被 仰渡候内、御跡ヨリ對馬守殿御上リ相成、御門内ニテ大和守殿御同道ニテ御番所前迄御出有之、又候御跡ヨリ堀出雲守殿御番所前迄御出有之、對馬守殿ニハ御手疵之御様子ニテ、御番所へ御上リ被成候処、大和守殿・出雲守殿直ニ御登 城ニ相成申候、對馬守殿御手疵御番所ニテ御家来共打寄御手当イタシ候様子ニテ、無程御門外迄御歩行ニテ御退散ニ相成申候、右ニ付冠木御門立寄階(マツ)ヨリ往来嚴重ニ相改通行為致居候処、只今御目付小出修理殿(秀忠)ヨリ御小人目付櫻井新作ヲ以御門平常之通立番同心差出、出入之儀嚴重相改候様被仰付候ニ付、右之通相勤申候、此段御尋ニ付御届申

上候、以上、

坂下御門当番

正月十五日

小堀大膳組

四ノ四

封廻状

一橋附

近習番

一ト通尋之上
揚屋へ遣ス

山木繁三郎

戌四十八才

戸田越前守家来
(忠恕、宇都宮藩主)

大橋 順藏
(正順訥應)

四十七

一ト通尋之上
改揚屋へ遣ス

順藏養子

大橋 燾次
(正亮)

二十六

戸田越前守家来

松本鎮太郎
(正盛)

二十七

右、於黒川備中守御役宅、御目付淺野伊賀守立合、備
(盛泰、町奉行)

中守申渡之、

正月十五日

五〔島津久包ヨリ国元へノ書翰〕

安藤對馬守様、去ル十五日御登

城之折、浪人者及乱妨、御同人様被負御手疵候段ハ先

便申越通ニ候、其後今以御登

城モ無之、深手ニテ迎モ御全快六ヶ敷トノ風聞有之由

候へ共、突留候儀ハ不相当、尤致狼藉候者共ハ水戸浪

人之由御届相成候旨、御坊主ヨリ為知越候、且又討死

イタシ候者、懷中イタシ居候斬奸趣意書ト認有之候書

付之由ニテ、南部彌八郎方ヨリ別冊差出候ニ付、別紙

五通相添御心得旁此段申越候条可被達

貴聞候、以上、

戌正月廿九日

嶋津登
(久包)

川上筑後殿
(久封)

喜入攝津殿
(久池)

川上但馬殿
(久野)

川上式部殿
(久美)

六〔中原尚勇ヨリ届書正月十五日〕

今朝五ツ時比、御老中久世大和守様・内藤紀伊守様、
(信親、村上藩主)

安藤對馬守様御一同御登城之折、坂下御門下馬所手前安藤様裏御門前ニテ、町人体之者三四人、下馬見体之者兩人、御行列へ通り懸リ候処、町人体之者袖之内ヨリ小銃筒先キ顯レ出居候ヲ、安藤様押之者見受、鉄砲ト声懸候処、右鉄砲持候者、行成ニ安藤様御駕籠へ向テ打放シ候処、忽卒之間故軟筒先キ相下リ候テ、御駕籠脇力番之者而股ヲ打貫キ、御駕籠ニハ別条無之由、然ル処右砲声ヲ合図ニ外同列之者共、羽織下ヨリ拔身ヲ持出シ御駕籠ヲ目懸切込候処、最初鉄砲ニテ兩股打貫レ候者、乍倒狼藉者へ切付ケ危急ヲ救ヒ候内、陸尺之者共右騒動ニ驚キ御駕籠ヲ抛捨逃去候由、右ニ付御駕籠ノ左ノ方戸打離シ候ニ付、安藤様ニモ其処ヨリ御出可被成ト被致候処ヲ、後ロヨリ一人、右脇ヨリ一人、拔身ヲ以テ御駕籠ヲ刺通シ候由、乍去後ロヨリ參り候者ハ、御駕籠之板へ突当十分ニ働キ兼、御腰辺へ少々突当り候節、御供廻り之者打果シ候由、右脇ヨリ刺通シ候者ハ、切先キ御肩先ヨリ面部ニ懸ケテ、浅手ニケ所御蒙リ被成候由、楮右御当人様ニハ、早速御駕籠ヨリ御飛出シ被成、御腰物モ不被為取負素足ニテ、御供廻リ一兩人ニテ坂下御門ノ方へ御立退之処ヲ、狼藉者

之内一人為奉追懸申候へ共、蔭御供之者共二三十人追々走続キ、其外御屋敷内ヨリモ四五十人駈出、狼藉者六人討留、外屯兩人ハ逃去リ行衛相知不申由ニ候、且又最初鉄砲打懸候者ハ無刀ト相見得、鉄砲打懸其俣逃去り候へ共、蔭御供之者追掛ケ打果シ候由、左候テ安藤様ニハ坂下御門御番所ニテ、手疵御手当為相成由候へ共、出血難止、今日御登城御遠慮被成、直ニ内藤様御行列御借用ニテ御帰殿相成候由、取沙汰ニ御座候、一右狼藉者之儀ハ、水府浪人又ハ故堀織部利徳正家来共ニテ為有之由、種々取沙汰有之候へ共、多分ハ水府浪人ト申事ニ御座候、一安藤様御手疵ハ、前文通御腰ニ屯ケ所、肩ト御面ニニケ所、都合三ヶ所ニテ、其内御腰之疵屯寸余モ有之候由候へ共、御死命ニ係り候程ノ儀ニテハ無御座由、一安藤様御供廻リニモ二人ハ即死、其外手負四五人為有之候由ニ御座候、

右之通承得候形行早々御届申上候、猶承得候儀モ有之候ハ、追々御届可申上候、以上、

戊正月十五日

中原尚勇猶介

七〔中原尚勇ヨリ届書戊三月〕

先日御届申上置候坂下御門前騒動之形行、猶亦細々承合候処、安藤様御手疵弥左迄ノ事ニテモ無御座、追々御快キ向ニ御座候、

一 最初久世様・内藤様御二方御登城御通行有之、安藤様御行列、丁度右御二方様御行列間へ御繰入相成ラント致シ候砌ニテ為有之由、左候テ内藤様御行列ハ其俣散々之体ニテ、急速ニ其場ヲ御駆抜有之、余程見苦敷体ニ為有之由、其折戸田采女正様・(辰形、大塚藩主)松平肥前守様・(鍋島大佐親常主)秋田安房守様御供人数其辺へ相控居、能々為見居ニテモ有之候由ニ御座候、

一 狼藉者之内、一人ハ早朝ヨリ安藤様本門前堀涯へ、氣違候狂人之体ニテ蹲踞居、其外ハ町人体ニテ、パッチ、白足袋ニテ宗十郎頭巾打被リ、通り之体ニテ切込ミ、三人ハ早速御駕籠へ切付ケ、一人ハ御立退ヲ見掛ケ奉追候処、御供之御家来兩人立帰り相支候内、蔭御供之者後ロヨリ諸足ヲ払ヒ打果シ候由ニ御座候、右奉追懸候者兩刀ヲ遣ヒ、秀逸之働仕候テ為有之由、

一 後ロヨリ飛入候者ハ着込ニテモ致着用居候哉、背ニ数太刀相受候テモ切通り不申、漸ク突留候由、

一 安藤様御家来共討留候狼藉者共へ、銘々名札結付引取

候由、

一 右狼藉者共死体、昨年高輪東禅寺ニテ生捕相成候水府浪人へ御見セ被成候処、私共同盟之者ニ別条無之由ニテ、姓名迄モ為申上由、左候テ私共同盟之者共ハ是涯リニテ、外ニハ無御座由申上候由、

一 右狼藉人共懷中へ銘々名札相入居、且斬奸趣意ト申ス書付並ニ詩歌致懷中候者モ有之候由、

一 同日昼時分ニ相成、長州侯御上屋敷居住御家来桂小五郎ト申御家来へ、書生体之者一人、以前齋藤彌九郎方(忠喜)

ニテ致同塾居候由ニテ尋参り候ニ付、留守之由申聞候処、是非面会不致候テハ不相濟儀有之由ニテ、同人帰宅迄相待居、其内小五郎罷婦面会ノ上致切腹候ニ付、当分ハ、公辺御沙汰ニ相成、小五郎甚迷惑ニ相成候由、左候テ右致切腹候者懷中相改候処、安藤様御門辺ヨリ坂下御門迄ノ繪図面取仕立、駕籠ノ形ヲ相記シ、其脇ニ朱点八ツ相記シ、其朱点ヨリ鉄砲之玉線ニテモ候哉、朱筋一ツ御駕籠ノ方へ相記シ為有之由、左候へハ右之人數八人ニテモ有之哉之風評有之候、尤右書生体之者ハ水戸浪人内田萬之助ト申者ニテ、当月六日水戸表致発足、御当地馬喰町辺へ相忍候段申聞候由、

一去ル十五六日比被召捕候 一橋様御附近習役山木繁三郎、戸田越前守様御家来大橋順藏父子並山本鎮八郎儀、被召捕候訳合色々取沙汰有之候へ共、シカトイタシ候義相知不申候、右順藏義ハ、此節

和宮様御下向之儀ニ付、京師へ手ヲ廻シ相支候義有之、且又同人妻矢張右御下向之儀ニ付長歌相詠シ、時世ヲ致誹謗候由ニ取沙汰有之由、又一説ニハ色々時世ヲ致誹謗、不所謂武器相貯へ候由相聞得、被召捕候由風評モ有之由、又之説ニハ、当水戸中納言様国家ヲ御治メ被成候御氣量無之候間、一橋之御隠居ヲ水戸ノ太守ニ奉崇候目黒ミ仕候テ、長州之家老へ相謀候処、多日返答無之候ニ付、一橋御屋敷ヲ焼払ヒ、其紛レニ一橋之御隠居ヲ水戸表へ御誘引可申上旨、右山木ヲ以上書仕候処、一橋御隠居様右書封之俣ニテ御老中方へ御差出シ相成候間、早剋御老中ヨリノ命令ニテ被召捕候由、専ラ取沙汰有之候由、

一右順藏儀ハ長沼流之兵学者故、清水俊藏ト申者ノ三男

ニテ、総州宇都宮之豪家町人佐野屋幸兵衛ト申者之門

子ト罷成、悴ハ養子ニテ御儒者川田八之助二男ニテ候由、左候テ右順藏被召捕候節ハ、右妻宿許ヨリ町人体

之者両三人、用事有之体ニテ順藏方へ差越、遮テ致談合度義有之候間、外方へ罷越吳候様申入、神田鍋町信楽屋ト軟申内へ致誘引召捕候由、山木繁三郎儀ハ番町辺へ罷居候者之処、朝出勤掛中途ニテ召捕候由、猶亦右大橋一件ハ此内ヨリ何致風評ニテモ有之候哉、旧冬廿七八日比大橋方へ致入塾居候諸生二三人ハ、急ニ御屋敷へヨリ御召返シ相成候者モ為有之候由、右之通承得候成行申上候、以上、

戊三月

中原猶介

八 文久二年二月二十五日吾国意ヲ奉シ入京

シタル次第略記(中路延年自筆校正)

皇統百二十一代孝明天皇弘化ノ初年ヨリ、米利堅国使ヲ遣テ通信貿易ヲ請フ事連年頻ナリ、將軍家定止ヲ得ス奏聞スルニ、天皇許シ玉ハス、天下挙テ攘夷ヲ唱へ唯防禦ヲ専務トス、是ニ於テ公儀ノ大老井伊掃部頭賢知明徹ニシテ、彼レノ請ヒ終ニ拒ム事能ハザルヲ知り、其請ヲ許シ、然ル後ニ奏聞ス、魯西亞・英吉利・佛蘭西・阿蘭ノ各国、使ヲ遣シ貿易ヲ求ム、遂ニ五国条約成ル、是ニ於テ天下挙テ井伊氏ヲ憎ム、萬延元年三月

三日井伊氏櫻田途中不慮ノ横害ニ遭遇ス、其党賊中吾藩ノ士某アリテ、姓名顯著ナリ、其責遁ルヘカラス、藩主參勤ヲ止メ割拠セシニ永策ニ非ルヲ知ル、時ニ吾本山妙心寺ヨリ吾ヲ徵招スルノ書状来ル、例ニ抛リ之ヲ国聴^(行カ)ニ入ル、文久元年十二月二十五日嶋津和泉公使番米良助右衛門吾寺ニ来リ告テ曰ク、国父君和泉公ヨリノ專使ナリ、聞ク、和尚ニハ今般京都本山妙心寺ヨリ招請ノ書翰来ルト、好機會^(本)ナリ、御承知ノ通り国歩艱難危急旦夕ニアリ、寢食安カラス他ニ策ナシトス、此ニ至リ安座スヘカラス、王命ヲ奉シテ事ヲ謀ラントス、然トモ国意ヲ上聞ニ達スルニ由ナシ、當時京攝ノ間武夫浪士ノ徘徊ヲ禁固スト、和尚本山ニ法用アリテ上京ストナラバ、途中異変アルマジ、上着ノ上方便ヲ以テ宜シキニ計ヒ呉レラレヨトナリ、承諾ニ於テハ我ト同道シ出府セヨトナリ、當時君側ト有司輩ト別調ナルカ如キヲ以テ、吾レ疑惑シテ輒カニ答ヘス、助右衛門憤然トシテ曰ク、和尚ノ上京ハ法用ヲ表部トス、君命国体ハ和尚ノ心中ニアリテ外ニ顯レス、唯国恩ヲ思ヒ努力セヨト云フ、然ラハ參ルベシ、両日ノ猶予ヲ給ヘ旅装セント云ヘハ、助右衛門喜ンテ、然ラハ明日帰府シ

復命セムト云フ、予亦問フ、幸ニシテ上着事成リ和泉公ヲ御召シアラハ、速ニ上京アリヤト云ヘハ、勿論起テ待チ玉フノミト云フ、翌朝助右衛門帰ル、文久二年正月三日大慈寺ヲ發シ魔府能學寺ニ至ル、米良氏待居タリ、曰ク、和泉公御対面モアラセラル筈ノ処、是ハ御遠慮アル所ナリ、和尚慈悲御推量玉ヘトナリ、此時国意ノ機密ヲ授ケラレ、且曰ク、去月本田彌右衛門^(親雄)ニ命シ伏見飯屋守トス、御上着ノ上ハ本田ト打合せ、何事モ計ラヒ申スヘシトナリ、依テ例毎ノ通法用御暇申出デタレハ、速ニ許可アリテ月番家老川上式部氏ニ謁シ、寺社奉行末川^(久平)求馬氏ニ逢ヒ暇乞ス、同六日、役僧末寺山久院住持惠昭・伴僧ニ嚴寺徒祖信・旅役人出水郷士石澤勇右衛門・家来米澤市之助・力者出水百姓下村長左衛門主従六員、雪中ヲ分ケテ野間原通ニ向ケ發程、時ニ吾レ寒邪ニ冒サレ頭痛裂クカ如シ、全月十五日肥後熊本駅亭ニ至ル、亭ノ長曰ク、薩州ハ四方ノ関門ヲ鎖シ旅人ノ往来ヲ禁ス、国人亦他ヲ往来スヘカラス、予曰ク、私用ノ者時アリテ之ヲ禁ス、公用ノ人何ソ之ヲ禁セント云ヘハ、和尚ハ何用ゾト云フ、吾ハ本山ヨリノ公用又法用ナリト云ヘハ、其証アリヤト云フ、

茲ニ本山招状ヲ出セハ、其書ヲ取り頭役へ伺ハントテ、
 他ニ持去リテ終日返サス、夜ニ入り止ヲ得ス隣亭ニ止
 宿ス、間アリテ亭主ヲ呼出シ、法用通行ナラハ、人馬
 自分雇ニテ通行セヨトナリ、雇人馬甚タ困却ナリ、翌
 日午時過キテ出發ス、筑後ニ至レハ御法賃ニテ人馬ヲ
 継キタリ、筑前亦然リ、豊前小倉駅ニ至レハ、人別人相
 検査シテ事嚴重ナリ、船留ト云フ、夜ニ入り茲ニ幸ヒ
 関船出帆スルアリ、窃ニ之ニ乘リ、關薩摩屋ニ入り、
 早ト云フ船借切り、之ニ乘リテ同月二十五日大坂川口
 ニ入ル、公儀ノ新番所アリ、吏員立会テ人別人相ヲ調
 ブ、国元送状・本山招状ヲ出ス、船ヲ拘留ス、其状ヲ
 外ニ持去リテ終日返サス、夜ニ入り之ヲ返シテ通レト
 云フ、八間ニ往キ川船ニ乗移ラントスルニ、吏員来テ
 之ヲ留ム、翌二十六日吏員亭主ヲ招ヒ通セト云フ、川
 筋数ヶ所人別ヲ改ム、是皆他国人モ同様ナリ、晚ニ伏
 見兼春一之丞亭ニ宿ス、亭主人別ヲ改メ、伏見奉行所
 へ届出ツ、国元送状並ニ本山招状出セト云フ、

〔貼紙〕

「此年頃幕吏ノ武臣ヲ厭ヒ、諸侯士ヲ拒ム事嚴重至極ニシテ、禁中ノ九門警衛
 ノ固メハ云フモ更ナリ、山城國ニ出入スル往還間道ニ至ルマテ、大名・小名ニ
 達テ往来ノ人名及ヒ人相ヲ糺シ、本文ノ如ク下番人ヨリ上局及ヒ其筋へ上申
 シ、許可ナラザレハ通行ヲ免サス、大坂川口八軒・淀川筋西岸・伏見駅・同街

道鳥羽軍道等ノ固メ、其手数混雜筆墨ノ及フ処ニ非ス、此間門ノ破テ妙心
 寺山内ノ空院ニ止宿スト雖、三里外ニ行テ本田氏ニ会スルノ外機密ヲ談スルノ
 人無ンテ、高嚴院ニ心配スル柏州大徳ノ意ヲ慰スルハ、唯鳥津稻荷大明神ノ
 ミ、此神助ヲ知ルハ只権右衛門独ナリ、柏州和尚ニ面会ノ後、日夜朝暮事務ヲ
 談スルノ時、事ニ触テ聞覚シ事ヲ、今度此書ヲ閱スルニ付テ懐旧ス、慶応元年
 乙丑冬岩下氏、吉井氏ノ両家ノ帰國ニ随テ、権右衛門祖先ノ住地敷根ニマカル
 ニ付、都城ニ行テ鳥津稻荷ノ本社ニ参拜ス、此大神ノ冥助ヲ蒙ル事今尚著シ、
 此和尚ノ正志ニ関スル人々ハ、必ス此明神ノ加護ヲ願フベシ、幸福アル事保証
 スル者也、

明治廿三年四月廿八日 中路権右衛門延年 六十八翁

翌二十七日ニ至リ終日返サス、昼間伏見我藩ノ飯屋ニ
 至リ、本田彌右衛門ニ対面ス、本田曰ク、予モ三日前
 漸ク上着シタリ、京都ニ入ラハ先ツ此涯錦屋舖ニ止リ、
 時ヲ見テ妙心寺ニ入ルヘシト云フ、京洛辺ノ形勢ヲ聞
 クニ、果シテ武人ノ往来ナシト云フ、兼春ニ帰宿シ奉
 行所ノ命ヲ待ツ、二十八日早朝亭主呼出シ通セトナリ、
 竹田街道諸処番兵アレトモ、何ノ事モイワス難ナク入
 京、東洞院通錦小路ニ我屋舖ニ入ル、留主居田中仲右
 衛門^保へ取会ヒ、一番長屋ニ置ク、翌日役僧ヲ以テ上着
 ノ届ヲ徒弟智勝院へ達ス、翌日智勝院来リテ上京ノ恙
 ナキヲ祝セラル、明日登山ノ次第宿院ノ都合等調フタ
 リ、二月二日妙心へ登山、途ニ里半アリ、総門ニ至レ
 ハ、案内者アリテ塔司高嚴院明ヶ渡シアリ、四派本庵
 へ登山届申シタレハ、当番輪住各位同来、登山賀儀了

テ退出ス、智勝院主印宗来リ曰ク、本庵命アリ、本山住職點頭ニ於テハ、速ニ伝奏家甘露寺殿へ進達スベシトナリ、是ニ於テ予不肖ナリト雖モ、衆議ニ依頼セムト答フ、妙心寺ハ天皇御菩提寺ナレハ、総シテ御所荷担ノ人物ノミナリ、殊ニ公家人多シ、其内海福院物先大和尚ハ柳原家ノ御子ニシテ、天嶺和尚ハ陽明家御菩提所ナレハ、兼テ御館人モアリ、御入魂ニモアリト聞キ、予カ心底ヲ智勝院主印宗・維華院主曉宗ノ両師へ明シタレハ、(志)「ハ此頃妙心山中ノハキ、ナリ」両師喜ブ事甚シ、則三人密談シテ海福院物先大和尚へ密達シタリ、事実残ラス聞キ良久アリテ曰ク、前件ノ話説若シ他人ノ耳根ニ触ル、事アレハ、一山ノ難義立トコロニ至ラム、(志)「ハ近衛殿英名」近頃陽明家老女ノ難題今(志)「村岡ノ事件ナリ」ニ穩カナラス、然ルニ彼ノ御所へ秘奏セントハ、仰テ箭ヲ発ツニ似タリ、老僧再拳スル勿レ、又他ニ説破スル勿レ、帰院シテ謹テ默念セラルヘシ、印・曉ノ両師モ茫然トシテ退去セリ、予亦辞退セントセシニ、(志)「物先」老僧起テ止メテ曰ク、二十年ノ後ニ邂逅ス、室ヲ改タメ緩々旧話ヲ打セント、予ヲ延テ茶室ニ入り、炉火ヲ燃シテ釜ヲ居へ、茶菓ヲ用意シテ周旋措カス、茶具央バニシテ一士入り来ル、和尚曰ク、是レ常ニ入室スルモノニ

シテ、殊ニ予カ内縁ノ者ナリ、貴禪ノ心事明カシ玉フニ異儀アル事ナシ、故ニワザト呼ヒ来タセシモノナリ、御心底残シナク説諭アルヘシ、此人幸ニ薩国ニ奉仕スル巫女勝浦女ノ一子ニシテ中路權右衛門ト云フ、常ニ公家方ニ館入シ、正直ニシテ名譽アルモノナリ、老僧許シテ此人ニ大事ヲ密託ス、權右衛門承シテ、權右衛門曰ク、此事遷延スヘカラス、幕府ノ締リ日ニ増シ嚴重ナリ、最早我等如キモ九門内ニ徘徊スル事能ハス、之ヲ金閣寺清源師ニ謀ラムト云フ、(志)「ハ靈上ニ手釣アリテ云々ノ義弁理ナレハナリ」老僧モ同意ナリ、權右衛門吾レニ告テ曰ク、前件ノ条理拙者屹ト御請申シタリ、当山内ハ目附多入込ミアル故、和尚法話ノ外一切此事口外スヘカラス、藤丸駕籠ノ話シ御聞アルヤノ宅ニ同道シテ談話ニ及ラ、(志)「ハ陽明殿ノ老女村岡ノ関東へ捕ヘラシ事ト云フ、而シテ酒肴出テ午飯出ツ、夕景帰ヲ告ク、權妻ヲ始ス、一條殿、鷹司殿、三条殿御家来並ニ諸人江戸下リノ次第ナリ」右衛門曰ク、兩日間ニ吉左右スヘシト、老僧曰ク、以後法用ノ外御入り玉フナト、帰院無事ナリ、二月二十五日法勅ノ御宣旨アリ、七月二日勅使参内ノ命降ル、此間改衣式アリ、参内礼習ノ式アリ、半日ノ間ナシ、三月十日一日ノ閑ヲ得テ洛中今出川通二本松相國寺塔司林光院ヲ訪フ、境内ニ踏ミ入り視レハ、庭前草蓊々、九六ノ方丈瓦縫荒破シテ無人ノ所ニ似タリ、玄喚ニ寄

リ請呼スルニ応答ナシ、奥間ニ誦經ノ声アリ、強呼數回、始テ応答シ出来ルハ住持梵敬ナリ、予曰ク、吾ハ日州志布志大慈寺小住柏州ト申スモノナリ、今般本山妙心寺ヘ法用アリテ上京セシナリ、貴院ニ縁由アルヲ以テ參堂スト云ヘハ、縁由トハ何ノ謂ゾト云フ、仍テ吾國中興ノ檀越惟新入道松齡公ハ、(高橋義也)吾寺ノ檀君ナレトモ吾寺ニ肖像ナシ、当院ニ就テ肖像ヲ拜セムト欲スト云ヒタレハ、(頭註)「梵敬ト云フハ、島津家二本松ノ屬廟建築云ヒタレハ、梵敬浩然トシテ黙々タリ、間アリテ曰ク、一條ニ付テモ、非常ノ尽力アリテ人望ノカリシカ、短命ニシテ志ヲダゲス、惜ム和尚間キ玉ハスヤ、吾院ノ肖像並ニ供養米ト共二十年ベシ前御国元ヘ御引取りニナリ、今ニ歎願スレトモ嘗テ応セラレス、吾院為メニ廢滅ニ及ヒタリト云フ、予愕然トシテ歎息ス、然ラハ位牌ハナキヤト云ヘハ、有リト云フ、然ラハ拝礼セント云ヘハ、シバシ待チ玉ヘト云フ、仏檀ヲ掃除シテ予ヲ案内ス、予厚ク香具ヲ備ヘ経誦了リ、梵敬延テ礼問ニ請ス、茶菓出テ予亦幣礼ヲ厚クス、閑静ナレハ時ヲ移シ當時ノ形勢ヲ聞クニ、内裏辺公家方内証等委曲ニ知り尽ス人ナリ、此人三十三歳ニシテ世体ニ通達シ、道学兼備且篤実ノ人ナリ、初対面故言ヲ残シ辞退ス、門送シ叮嚀ナリ、翌十一日未明、梵敬來リ還礼アリ、緩話ノ序三會ヲ金閣寺ニ約ス、日

取りハ梵敬報セムト云フ、茲ニ中路權右衛門入り來ル、中路ノ予ニ同心シタルヲ梵敬ニ告ク、梵敬亦彼レト入魂ス、晚ニ及テ辞去ス、三四日ヲ間シテ權右衛門來リ告テ曰ク、明日ハ早朝ヨリ金閣寺ニ至ラント、依テ法務ハ智勝和尚ニ委託シ、權右衛門ト同道金閣寺ニ往ク、途中ニ里余、梵敬先至リ總門ニ待ツ、予ヲ延テ方丈ノ上間ニ置ク、茶菓出テ間ラクシテ天王閣ニ登臨セント云フ、梵敬案内シテ予ト二人閣上ニ登ル、眺望絶景ナリ、是ニ於テ国意ヲ告クルニ屈竟ナリト思ヒ、サテ貴禪ニ親シム所以ノモノハ、吾ノ国意ノ大事件アリ、採納シ玉フヤ、梵敬曰ク、遠慮ナク述ヘ玉ヘ、我力ノ及フ限りハ違背スマジ、サラハトテ吾レ妙心寺ヘ法用アレドモ専ラ貴禪ニ依頼シテ、国意天朝ニ達セントナリ、吾国君臣相議シテ云フ、方今天下ノ形勢騒然トシテ何トナク穩カナラス、是レ乱ノ兆ナリ、今戒心セスンハ各国蜂起シテ霸業ヲ争ヒ、平治スルノ期アルヘカラス、茲ニ策アリ、今吾藩君臣挙テ朝臣トナリ、身命ヲ擲テ王業ヲ補佐セハ、四方勤王ノ有志士來テ吾ニ応セン、王業ハ順正ナレハ、誰アリテ之ニ抗スルモノアラン、天聞ニ達シテ勅命アリセハ、速ニ上洛シテ詔ヲ奉セン、

然トモ京攝間武夫ノ往来ヲ禁固シ、奏上スルニ道ナシトテ、大ニ躊躇スルノ際、本山妙心寺衆議寮ヨリ速ニ登山シ、點頭スヘシトノ書状吾ニ達ス、是レ好時機ナリ、迅ニ上洛シテ法用ノ暇、困意ヲ天聰ニ達スルノ便宜ヲ謀レト国命ヲ受ケ来リ、日夜心肝ヲ碎ク、国所ヲ出シヨリ貴院ヲ目的トシテ来ル、貴禪希クハ慈悲採納シ玉ヘト述ヘタレハ、梵敬欣然トシテ曰ク、大哉事也、天皇固ヨリ渴望シ玉フ処ナリ、茲ニ弓削右馬之允ナル

〔貼紙〕

一石馬ノ允ハ禁中ノ官人ニシテ、庭田頭弁殿ノ雜掌ヲ兼務スル人ナレハ、同人ヨリ頭弁殿へ柏州大徳ノ心中ヲ言上シ、庭田殿ヨリ千種殿、大原殿、六姿殿ナド村上源氏ノ一族密会協議ノ上、先帝へ奏上テツテ困意貫徹ス、此手順等凡應ノ及ハサル美事ニ会フ事、全ク島津稱荷ノ冥助ナリ、抑此告(初)ニ見ユル米良氏ノ口上好機會ノ招状ヲ催スヲ、初、久光公御推參ノ日稱荷祭ノ当日ニシテ、京邸伏見ノ稱荷山花ヲ揚ケ人心ヲ騒カス、ヒマニ粉レ陽明殿へ御參、次テ禁中へ御參云々ノ御事、此時因東ニテ異人暴行、国威ヲ万里ニ示サレシ事、皆求メテナシ事ニ非ス、天然自然ナリ、此然ハ守護ノ神慮ナリ、信心ナキ人ハサトリ難キ故ニ贅ス。

モノアリ、吾猶父ナリ、之ニ委託セハ速ニ天聰ニ達スヘシ、薩国挙テ王臣タランニハ、王政ノ復故何ノ難キコトカアラン、予不敏ナレトモ謹テ御受申スヘシ、三日ヲ出スシテ必ス勅答ヲ獲セシメント、梵敬又曰ク、諸司代ノ老女ニ我伯母アリ、昨日馳セ来リ涙告シテ曰ク、汝ハ薩摩和尚ト入魂スト、彼レ妙心寺へ法用アリ

ト云ヘトモ、異心アル嫌疑アリ、彼レニ入魂セハ其身ニ難題アラン、速ニ自訴セスンハ後悔詮ナキナリト、之ニ答ヘテ、吾院ハ薩摩ノ菩提寺ナリ、薩人ノ出入拒ム能ハス、彼ノ和尚ニ異心ナシ、吾院ニ来リ仏前ニ礼拝スルヤ好キ機會ナレハ、吾院ノ旧祿古ヘニ復セン事ヲ、彼ノ和尚ニ依頼セント思フ処ナリ、明日金閣寺ニテ饗応スル賦リ、必ス心配シ玉フナ、彼レ若シ異心アレハ吾何ソ諸司代へ密告セサランヤト申聞ケタリト云ヘリ、閣ヲ下リ方丈ニ至レハ、多田源左衛門対面セント云フ、梵敬又密告シテ曰ク、多田ハ井伊氏ノ目附、幕府ノ命ヲ兼ネ談笑ノ間人ノ心事ヲ探知スル敏ナルモノナリト、予亦戒心シテ方便ヲ以テ之ニ応シ、却テ吾國ノ幸福トナリ、又十六日未明権右衛門予カ室ニ来リ、告テ曰ク、今夜林光院ニ於テ御内勅アラン、夜中窺カニ来ルヘシト云フ、是ニ於テ権右衛門ヲシテ本田ニ告ケ、又返リ報セシム、本田モ予ト林光院ニ会セン事ヲ誓フ、是ヲ以テ予ハ托鉢僧ニ擬シ、権右衛門宅ニ往キ同道シテ北山路ニ入り、迂廻シテ三時計ニ相國寺ノ北門ニ至ル、門外公儀ノ役員多勢張番ス、梵敬門ヲ開キ誘フ、林光院ニ至リ見ルニ、月夜ナレトモ室内闇ク、奥

間ニ行燈徹々トシテ螢火ノ如シ、梵敬延テ其次座ニ座セシム、御兩人ノ座セラレタル御方アレトモ御面容審カナラス、直ニ宣フ、和尚ニハ其困意ヲ上聞ニ入レムト欲シ、心配一方ナラスト太儀ナリ、然トモ幸ニシテ上聞ニ達シタリ、至極ノ御満悦ナリ、然ル上ハ嶋津和泉へ片時モ早ク出京セヨト宣フ、又宣フワク、其国家老如キ人ナキヤト、家老代理本田彌右衛門茲ニ控ヘタリ、此レニ御達シアレト奉答ス、彌右衛門出ツ、一通ノ御挨拶アリテ宣フ、和泉へ告ケ速ニ上京セシメヨト、直ニ御立チ、背後ノ墓地ヲ通ラセラレ、竹藪中へ無提灯ニテ御入りウセ玉フ、何方ナリヤト問ヘト梵敬答ヘス、本田モ無言ニシテ藪中ニ入り去ル、吾亦權右衛門ト梵敬ニ無言ニテ去ル、今夕素志始メテ貫徹シ愉快禁裏（朱）道後本田氏ヲ庭田殿ニ召連レラレ、一面御面会ノ上、大原重徳御自宅ニ御同道、御挨拶アリシナリ、能ハス、一死モ惜カラス、帰路本道ニ就ク、屢巡夜ノ士ニ逢フト雖モ幸ニ免レ帰院スルヲ得タリ、爾來心腹ノ士ト往來談合スルノミ、是レヨリ先キ町奉行ヨリ、妙心寺中ノ僧侶法用ノ外四門内ニ往來ヲ禁ス、又（朱）雜職方ヨリ我宿院へ立入り、諸色売店ノ者ヲ呼出シ、何品ヲ幾品売りシカ等ノ事ヲ綿密ニ訊問シ、拘留シテ容易ニ帰ラシメス、故ニ我使僕ニ諸色ヲ売ルモノナシ、

六人ノ家内飢渴ニ逼ル、是ニ於テ役僧山久院ハ嵯峨天龍へ掛錫、全透ハ南禪へ遣リ、僕長左衛門ハ帰国ノ暇ヲ乞フ、勇右衛門・市之助ノミアリテ智勝院ヨリ至極

隱密ニ食事ヲ運ブ、幕府ノ目附四方ヲ咄纏スト云フ、（朱）其後四月ノ初旬和泉公御宿京ノ比ハ目附方ノ探察發露ナリ、土州人ヲ薩摩人寺内ノ畑ニ百姓來リ、密ニ告ケテ曰ク、土州ノ人結城トスルモ島津備前大明神ノ加護ナリキ、隆道七百余人ノ兵士ヲ引卒シ來リ、等持院ニ屯スト、

百姓原之ヲ認メテ薩摩勢ナリトス、此勢入京以來飢渴ノ苦ヲ免ル、此頃錦屋舖ノ留主居四本歿ス、本田ノ伯父ナリ、一日四本ノ牌前ニ誦經ス、和泉公ノ上京近キニアルヲ聞キ、伏見ニ至リ本田ニ會ス、四月十五日日本田ハ留主居ノ職ヲ以テ相國ニ至リ宿所ヲ其末院ニ借ラ

〔貼紙〕

〔和泉公御上京近キニアリト聞テ、伏見ニ至リ本田ニ會ス、公上京在ラル、ノ際田中氏病歿ス、錦ノ屋敷ニ至リ田中氏ノ牌前ニ誦經ス、爾後四月十五日、〕
ントス、予モ同道林光院ニ至ル、用畢リ小宴ヲ林光院ニ張ル、會スルモノ梵敬・本田・中路・予及ヒ予カ僕・院ノ僕庄兵衛トナリ、間クアリテ取締方ノ役員庄兵衛ヲ呼ヒ、來會者ノ姓名及ヒ為ス所等ヲ聞キ直ニ還ラシム、時ニ本田姿ヲ隱ス、刻ヲ過キテ帰ラス、梵敬曰ク、最早帰ラン時刻デナシト、一座顔色ナシ、梵敬曰ク、吾往テ之ヲ探檢セント出去ル、中路之ニ継キ、吾僕亦

去ル、時ニ予ト院ノ僕庄兵衛ト兩人アルノミ、夜三更ノ頃門戸敲クコト激シ、庄兵衛出テ、之ニ接ス、終拘引セラレ歸リ来ラス、吾暗室ニ座シ独リ茫然タリ、以為ラク皆共ニ閻魔ノ序ニ往キシト、鷄鳴野鷄亦庭ニ啼ク、漸クニシテ暎光窓ヲ射ル、此時復敲戸激シ、是レ蓋シ捕吏ノ来ルナラント黙シテ応ヘス、陸續来リテ連呼頻ナリ、能ク傾聴スレハ薩人ノ音聲ナリ、吾レトシテ出テ之ヲ邀フルニ、町田某其他知己ノ者數輩吾ヲ迎フルナリ、曰ク、和泉公只今參内ノ命下ルト、吾始メテ蘇息ス、

八ノ二

當時林光院住職梵敬・弓削右馬ノ二氏ナカリセハ、国意ヲ天聴ニ達スルニ容易ナラサルヘシ、林光院ハ公家小路ニアリ、〔左〕右馬ハ庭田頭弁殿御内人ニシテ右馬ノ允リ頭弁殿ヘ申入大原・千種・六条殿等村上源氏ノ諸卿密會議決案上、大原殿ハ後ニ勲使ノコト仰出サル達セルモノナリ、

近頃勲功アルノ諸士ニ御賞典アルヲ見ルニ、林光・弓削等ノ姓名ナシ、宜ナリ、彼ノ二氏ヲ知ルモノハ柏州ナリ、柏州亦今ニ黙居セリ、希クハ二氏ノ子孫ニ賞典ヲ降シ玉ハンコトヲ、

先帝陛下ニハ慶應二年十二月廿三日崩御、

林光院梵敬ハ同三年二月病死、弓削右馬之允其後音信

ナシ、今ニ存生ヤ否ヤヲ知ラス、予ハ文久二年十二月帰国ス、或ル時梵敬曰ク、公家ト云フモノ凡ソ百八十家、政府ニ得意ノ族十分ノ一ナリ、余ハ皆失意ナリ、予曰ク、得意トハ何ノ謂ソト云ヘハ、大臣五家・參議・宰相・伝奏家ノ類ナリ、其余小祿ニシテ困窮甚シキモノナリ、得意ノ輩政府ノ威ヲ恐レ勤王等ノ言ヲイム、主上ニハ独リ苦慮シ玉フノミ、梵敬・弓削ハ皇ノ叡旨能ク知ルモノナリ、

林光・弓削二氏ノ勲勞柏州ノ外ニ知ル人ナシ、二十年ヲ経テ黙止セハ他ノ功勞ヲ蔑スルナリ、他ノ功勞ヲ話セントスレハ、自慢スルニ当リ憚リナキニ非レトモ、シハラク記シテ後昆ニ示ス、今也深思スルニ、勅命ヲ本田ニ告ケ、和泉公ニ告ク、然レハ夫迄ノ大事了畢セリ、上聞ニ達スルノ内証ハ問フ人モナク亦知ル人モナシ、柏州黙止スルハ、林光・弓削ニ対シ無礼無義ナリ、然ルヲ是迄延引ス、柏州カ罪過ナリ、仰キ希クハ林光・弓削二氏ノ勲功ヲ称拳シテ、之ヲ官聴ニ達シ玉ハンコトヲ、

林光院梵敬、若州小濱藩士ノ子ナリ、藩主ハ酒井若狭守、當時ノ諸司代ナリ、梵敬伯母ハ若狭守ノ老女ナリ、

一日来テ梵敬ニ告テ曰ク、薩摩和尚ニ入魂スト聞ク、
近頃大事到来セム、用心セヨト云了テ涙下ルト、吾生
國ノ君ニハ不忠ナレドモ、王事王業ノ尊大ナルニ如カ
スト、決心スルハ梵敬ニアラサレハ能ハシ、
弓削右馬之允ハ、壯年ノ時ヨリ梵敬ノ師匠ノ養育ヲ受
ケ、終ニ洛中ニ住シテ師ノ遺言ヲ受ケ、梵敬ヲ養育セ
シ人ナリ、師ハ梵敬ノ父ニシテ前住大拙ト云フ、

九 京都林光院梵敬弓削右馬之允之儀ニ付歎

願

志布志大慈寺

石澤 柏州

九ノ一
右奉歎願候次第ハ、去ル文久二年御内命ヲ奉シ上京仕、
御国意ヲ 聖聞ニ達シ候儀ニ付テハ、日夜焦心苦慮、
時ニ林光院梵敬・弓削右馬之允之両子ヲ得テ之ヲ密告
ス、両子金諾、遂ニ之ヲ 上聞ニ達シ、直ニ 勅答ヲ
拝戴シ、 久光公則チ御上京御參内被為在、朝廷ノ妖
紛被為払候運ヒニ至リ候儀ハ、両子カ精忠ノ赤心、以
テ万死ヲ犯シ、之ヲ 奏聞セシ功与リテ力アリトス、
尔来昔日王事ニ勤勞アリシ人々ハ夫々旌表セラル、所

アルヲ承リ、黙止スルニ忍ビス、是ニ於テ去ル明治廿
一年別紙写之通、両子ノ功ヲ奏聞アラシコトヲ本田親
雄氏へ依頼越セシモ、本年春ニ至ルマテ殆ント三ヶ年
ヲ経ルモ何等ノ返信モ無之、齡八十七旬ニ至リ、僅ニ
余喘ヲ保チ氣力昔日ノ比ニアラサルモ、止マント欲シ
テ能ハス、当春出麁仕、旧識ノ紹介ニ依リ、玉里御邸
(鹿児島市)
御家扶城井殿へ面会シテ心事ヲ訴フルコトヲ得タリ、
然ルニ 先公ハ既ニ御薨去、當時近側ノ者ハ或ハ死亡、
或ハ不在ニテ、目下是ヲ詳悉スルモノ無之、殊ニ家令
モ上京中ナレハ、如何トモ詮議ノ道モ無之、若シ之ヲ
証明スルモノアラハ、更ニ詮議ノ道モ可有之旨拝承仕
候ニ付、東京ニ於テハ本田氏・吉井氏・岩下氏ノ如キ
ハ、當時直接御承知ノ方々ニ付、各氏へ照会可致候、
併目今突然無縁ノ者差出シ候テモ存分意底難貫場合モ
可有之歎ト存シ、御添書申受ケ、甥石澤宗徳ヲ上京為
致、各氏へ問合候処充分之保証モ有之候、然ル処、不
図モ今般

玉里御殿ヨリ御慰問トシテ、金貳百圓・錦午置物一個
御下賜被成下難有奉拝戴候得共、右両子ノ儀ニ付テハ
何等ノ御沙汰ヲモ不奉拝承、余命且夕ニ迫リ、日夜兩

子カ胸中ニ往来シテ落涙禁スル能ハス、伏テ希クハ二子カ奏功ノ赤心ヲ御洞察被成下、何卒両子カ幽魂慰シ候様、之ヲ被為達 聖聞被下候儀、乍恐御両家ニ於テ御尽力被成下候ハ、私ニ於テモ安心瞑目可仕儀ト奉存候間、此段奉歎願候也、

石澤柏州代

猶子田中國輔○(采印)田藤

明治廿三年八月一日 義子山下常藏○(采印)山常

磯御邸

御家令東郷重持殿

九ノ二

明治廿一年九月十五日、鹿兒島県下南諸縣郡志布志町大慈寺再興再住石澤柏州謹上啓、本田親雄先覺芸閣下、杏惟閣下賢体剛健動靜肅可被列朝班之状相像無他奉存候、降テ野叟幸無恙消二光寵在候得共、当八十四秋罷成根氣微弱存命多日ニアラス、茲ニ京都相國寺ニ素立タル行脚僧来リテ、予カ庵ニ投宿ス、年頃三十計、予問テ云フ、林光院梵敬・弓削右馬等之コトヲ尋ヌレトモ知ルコトナシ、宜ナリ、我等京都ニ奔走セシハ二十四五年、彼レ生レテ五六才ナルベシ、茲ニ於テ予感慨

心起リテ前事ヲ思出シ、君ト予ト国家ノ大事ヲ持出シ、林光院・弓削ノ手ヲ借り、聰明天子ノ御耳ニ達シテコソ今日アリ、此四人死地ニ身ヲ置カサレハ能ハス、今日ニ至リ君ト予トハ幸ニシテ存命、彼ノ二子ハ黄泉ニ客トナル、惜哉可悲ノ限ナリ、彼ノ二子ナカリセハ天聴ニ達シガタシ、遅延セハ事行ハレハ啞啄同時ノ機会ト謂フヘキナリ、予愚頑ニシテ、京地尽力ノコトヲ問フ人アレハ、黙シテ話(口語)ラサルヲ潔白ノ様思ヒ、自慢心デアリシ、是甚タ誤認ト云フベキナリ、林光・弓削ハ莫大ノ忠義ナリ、二子ノ功勳ヲ挙揚セネハ、二子ノ大功ヲ無ニス、全ク老叟カ罪過ナリ、君今幸ヒ朝班ニ列シ玉フ、天上ニ奏スル何ノ難事アラム、林光院ヲ立チ行ク様、弓削子孫アラハ小賞典ヲ与ヘ玉ヒ、若シナクハ墳墓アルベシ、之ニ祭典ヲ与ヘ玉フニ何ノ造作アラム、君夫君彼ノ二子ノ勤勞ヲ知ラサルニアラザレトモ、勅命ヲ奉承シテ和泉君ニ達シ、和泉君上落シ 王命ヲ奉セラレシヨリ君カ勤場繁忙ヲ極メタリ、其涯前朝ノ作略如何ヲ問フニ暇ナシ、十二月先帝崩御、以テ洛中薩長ノ戰爭アリ、次テ長州征伐・伏見戰爭・會津征伐、引継新 帝ノ江府入御・創業改政連年多事ナリ、林光

院梵敬円寂シ、弓削尔来消息ナシ、

梵敬禅人ハ慶應三年二月円寂ナリト聞ク、

追悼

敬禅未到不惑年声誉先聞回也賢、

一〇 京都探訪第二

長州御手入之儀當時之振合承合候儀左ニ申上候

一 旧冬新典侍様ヨリ長州方御吹挙之儀、強テ大典侍様江

相成御頼候処、段々御異見之上些御叱之口氣ニテ、新

典侍様モ余程被成御心配、勸修寺様江御迷惑之段御不

足被仰遣、勸修寺様モ初御堂上方江御頼被成候事故、今

更右様都合不宜義杯御咄モ難被成、長州方江ハ猶更色

合モ被仰兼、其上誰々御取持被成候杯トノ風聞モ有之、

右御手組之堂上方彼是御心配之折柄、伝奏坊城様ヨリ

御内々御問合被成候由ニテ、進退御難渋被成居候由、

就テハ立入加賀守モ別テ心痛仕居候由御座候、

右勸修寺様雜掌立入加賀守江聞合申候、

一 右長州壹条ニ付、伝奏ヨリ廣幡様江御咄合相成候由、

長州御手入堂上方御取持之次第相聞候由ニテ、日野様

御違変之様子御座候由、

右吉岡泰助江聞合申候、

右ハ赤坂太兵衛ヲ以探索為仕申候処、右之通承得申候

間、此段申上候、以上、

戊二月

服部政次郎

(永井清左衛門聞合書(島津忠承氏所懸)にて校訂)

一一 京都探訪第三

先達テ以来、堂上方不時御參 内等之儀、大典侍様御

筋合其外非藏人等江承合申候処、左之通御座候、

一 正月二日、南都 春日社御神殿江相懸リ居候八ツ花形

之神鏡、無故シテ落破レ損候ニ付、社家惣代ヨリ

御所江御届申上候由御座候、

一 右ニ付、堂上方御記録御調へ御内々被 仰出、諸家御

調相成候処、往古ヨリ五ヶ度御破鏡之例有之、都テ兵

革又ハ長者之變ニテ凶兆計ニ御座候由、

一 右一条ニ付、社家惣代二人御呼立ニテ致滞京居候由、

一 此度ハ乾元元年御破鏡言上之例ニテ、

奏聞相成候由、應永・保元年間ニモ御破鏡為有之由、

一 右御一条ハ別テ御秘密ニテ、不洩聞様トノ御事ニ御座

候由、

一 此節京都御固メ膳所・淀江被仰付候哉之儀ハ、右御破

鏡長者之凶兆、其上江戸ニテ安藤様一件モ有之、旁ニ
テ関白様殊之外恐怖被成、其辺ヨリ守衛出張為相重儀
ニテ可有之哉之由御座候関白様ハ氏長、
正邦、
但淀稻葉様・膳所本多様等ハ京都七口之御固先年被

仰付置候、

一和宮様弥御下向ニ付テハ、其以前品々御約定之事有之、
御老中方御証文御差上相成居候由、就テハ

和宮様江戸御着之上、御上洛之御引合相成候処、御

違約之筋有之、御入城モ御隙入相成候、其外御約束ニ

相振候件ニ御局宰相典侍様ヨリ御引合被成候得ハ、江

戸大奥御年寄等多人数ニテ無理押（賜子）之返答、其上被

致嘲哢御残念ノ次第杯宮中江被仰上候由ニテ、去冬ヨ

リ御逆鱗御甚敷、此等ノ儀ニテ御近臣ノ御方被為召、

御密談被為在候御様子ニ御座候由、

一安藤様一条ハ、正月十八日所司代ヨリ伝奏江御達相成、

天聰相成候由、

右之通承得申候間、此段御内々申上候、以上、

戊二月

服部政次郎

(同上書にて校訂)

一二 大坂永井清左衛門探訪第一

(彦根)
一彦之事何モ異変不相聞候事、関東使二月廿八日比京着
之由ニモ風聞有之候へ共、領分ニテハ十五日之騷動ニ
テ延引ニ相成候様專風説之由、
(朱) (坂下ノ一姓)

一正月元朝、南都春日神鏡故ナクシテ三ツニ破裂イタシ
有之候由

奏聞ニ相成、御記録御シラへ有之候得共、往古ヨリ破

裂イタシ候事ハ不相見候由、併落候事ハ治承ノ比有之

ヨシ、

一内侍所神靈之御間雨モリ候由、右ハ去年和宮御門出之

日ト申事ニ御座候、極々秘シ有之候事之由、十五日之

関東騷ヨリフト洩候半乎、此比相聞得申候、

一御所御車ヨセへ落書イタシ候由、関白之首髓ニ落手仕

ト有之候由、右ニ付九條殿ニハ又々御門出入等格別嚴

重ノヨシ、正月廿八日無抛御參 内相成候ヨシ、其節

守衛之武士多分有之由、

一何ヤラ東ノ事ゴテイタシ有之乎ノ由、御政家辞退

有之方ニモ有之由ニモ風説イタシ候、

一正月二十一日、膳所警衛場所大久保雄之助（自付）稻葉長

門守巡見イタシ候由、尤是迄白川辺ニ仮陣所有之候処、

百萬遍之辺へ急速陣所相建候乎之ヨシ、其外洛西ニモ

相建候乎之ヨシ、

(本「和道」)

一 関東御婚礼最早相济候由御座候、万事何ニモ不相分候
時節ニ相成申候、歎息ノミニ御座候、

右数通、正月末飛脚便到来、

一 京都之御都合向何分ニモ評説班々ニテ何共難計、先ツ

公武御合体トハ難被申、其訳ハ 京地ノ 思召ト関東

ノ 思召、第一振合相替居候事而已ノ由御座候、

一 京地之 思召ハ

和宮様御事ハ、別テ

当今様之 思召ニ被為叶候、

御愛方様ニテ、京地ニテハ 御縁ニ候得ハ、何方江成

共召遣候御事ニハ御座候得共、遥ニ関東江被下候 思

召ハ、全不被為在御事ノ由、関東ヨリモ最初ニハ強テ

御懇願モ不被為在候処、(九条尚忠) 関白様ト御所司代様御相談ニ

上、夫々御取計相成候哉、(酒井忠義) 勝光院殿(家定公御二方上臨被相勤候)

姉小路殿事ニテ、家定公薨去ノ後幾髮被致候故橋本前大納言様御妹、当宰相様之為ニハ又伯母之御統之由御座候 之一昨年上京、

橋本宰相様江御咄ニハ、
実應

和宮様ヲ御縁与之儀、訳テ致承知候趣有之、態々致上

京候、就テハ御局様方ハ勿論、殿下江モ追々及御相談

候間、其御方ヨリモ達テ御願有之度、遮テ御内話有之

候由御座候処、(勝光院殿事、江戸出立之時分ハ、鎌倉江之品參詣トシテ御出

由、然魁石部宿ヨリ表向ノ御用ニテ、御所司代様御方ヨリ迎ノ人モ有之、先私等モ

相附京着、大丸屋本モ江旅宿相成、凡半季程帶京有之候由、其内毎々殿下亦ハ若州

越江被差、 是ハ迎モ我々ヨリ願出候事モ出来不申、且ハ

御承知被遊候訳ニモ無之段御申切被成候処、態々上京

是程迄及談候ニ、右返答之趣甚以存外之至、御調談相

成候得ハ、其御方モ御双方江对シ美目ニテ如何程之大

慶可有之儀ハ、案中自分ニモ其功相立候ハ、大悦満足

可致、左候ハ、皆其御方之御為筋ト存申間候儀、無御

取用段別テ之立腹ニテ、此御縁談不被為整候ハ、自

分ハ自害ニテモ可致、左候ハ、其御方ハ不首尾ニテ何

様之難題到来可致モ難計、乍恐

御讓位モ可被為在様成立可申、速日打統御咄有之、橋

本様ニモ御当惑ニテ、不容易事ニテ卒尔ニ申出ス事モ

不出来、能々勘考可被成候テ被仰聞候得共、弥手強被

申募無拠御承知ニテ、左候ハ、俱ニ御肝煎申上候様可

致ト之趣ニテ、夫々江御内々御咄相成候処、素ヨリ関

白様・若州侯御存之訳ニテ、橋本様之掛念ナカラ御申

出之儀余程御都合宜御座候由ニテ、八十宮様之御例

モ有之、江戸表ヨリ御縁与再三ノ御願之趣、
御所江被仰上候由御座候、

一右通ニテ段々御媒介申上候向々、御双方江能様ニ御取

成、終ニハ乍御不承知、無拋

御聽届被為在候筋承得申候、

一右ニ付御媒申上候向ヨリハ、関東江ハ

御所ヨリ是非

宮様ヲ召下ト之 思召之旨、

御所江ハ達テ、関東江被下度旨御懇願之趣被仰上候向

ニ御座候由、右通御取成之向ハ、関白様ト若州候之由

相聞得申候、

一御縁与相究候後、

御所ヨリ地下官人江御達書、

和宮縁与之儀、此度再三関東ヨリ懇願ニ付、正徳年中

八十宮并東福門院之例モ有之、其上深 思召モ被為在

候付被下候、此旨為心得申聞置候事、

八十宮様ハ、東福門院様之御腹御降誕之 宮様御座候、東

福院門様ハ、(徳川秀忠) 台徳院様御女、 後水尾帝之中宮様ニ御座

候、

右通御達有之候上ハ、公卿方ニモ如何異論被仰候御方

モ無之候得共、深 思召之儀ハ御合体之廉ニ可有御座

候得共、関東表江成向等相違ニ付、左程風評等相止不

申候由、

一前文通御取究相成候得ハ、当二月

御先帝様御十七回忌御法会ニ付、右被為濟候上

御下向之筋御相談有之候得共、夫迄御猶予相成候ハ、

此御縁ハ難被為整ト之御事ニテ、是非昨年

御下向之筋被 仰上候得共、昨酉年ハ星御廻リ不宜、

(御座候御年ハ丙子ニテ、年月丙午ノ早刻御誕生被遊候
故酉年ハ関東江御下向ニハ惡年之由申上候向御座候由) 御聽届被遊候

由御座候処、先此涯

御下向被為在、当二月迄ニ一往御上京、其上改テ

御下向 御婚姻被為在候筋被仰上候処、漸 御承知被

遊候御事之由、

一昨年

宮様為御迎、江戸御本丸表使上席村瀬殿御旗本上京有之、

於

御所、江戸表之思召等程能取繕、 御下向之上ハ

御所之 思召通ニ私共御引受申上、何モ御都合宜様御

取成可仕、尤関東ハ田舎風ノ事ニテ不宜、

御所之御風ヲ不被為替様申談可仕ト之趣、其外是迄江

戸之仕来不宜候付、此節ヨリ御所風ニ一統相改候積抔

ト取繕、程能御局様方江被申上候処、皆々御悦ニテ何

モ宜相頼候趣ニテ、折角饗応等有之候由ニテ、供奉之
女中方モ別テ御安心之事ニ御座候処、

宮様京都御立、木曾路 御通行之処、俄ニ狂氣之様子
ニ罷成、迎モ御供モ出来不申、御先キ江掃府イタシ度
願之趣有之、御道中ノ半途ヨリ御先江出立相成、別テ
不相勝趣ニテ差急キ江戸着被成候由、然処

宮様板橋宿迄 御着相成候処、夫江御出迎之女中一所
ニ村瀬トノモ差越、京都ニテ御約束申上置候通トハ何
篇相替、京都ヨリハ御手当事等別テ相違イタシ候付、
是ハ如何ト段々御評議中、早ク〜ト江戸ヨリ御セキ
立ニテ、清水御館江被為入候由、

但村瀬ト申女中ハ中途ヨリ作病ニテ、

御所之御模様相伺、態ト取繕候テ程能取成置、御
先江踏越都テ之事共申上候テ、右通御手当事確ト
致相違候半ト、イツレモ心外ト申事之由、

一 江戸御着被為在候砌ヨリ、品々区々イタシ候付、宰相
典侍様并能登ト申ハ別テ弁舌宜キ方之由、段々訳筋被
仰候得共、多勢ニ無勢ニテ頓トイタシ方無之ト御咄之
由、

一 和宮様御下向之節、木曾路戸田川御船渡之時、向之岸

ニ至極能染シ紅葉有之、暫 御船ヲ停メ御眺望、一枝
折ラセラレ、御手ニ被為取候テ、御歌ヲ被為添候テ
此川へ流セト御沙汰、

御製

もみち葉の落行身とはしりなから

人なつかしきいろにそありける

一 和宮様清水御館江 御滞在之砌ハ、別テ 御威光方被
為在、十二月十一日

御入城被遊候テモ、矢張同様ニ被為入候由、御見送之
御方ニモ難有存被居候由、

一 当正月四日

御内婚被為済候、当日ヨリ打替リ、江戸女中方江別テ
御丁寧ニテ、殊ニ御和合ニ被為成、翌日ヨリ毎朝

(徳川家定夫人)
天璋院様江、公方様ト御同道ニテ御機嫌伺ニ御出、其

次ニ (家定生母、お美律の方)
本壽院様等江モ御伺ニ御出被成、別テ御陸敷被

為成候由、

一 御所ヨリ被相付候御方ニ江戸之御様子相伺、都テ御帰
京之上御申上可被成筈之処、江戸表ニテハ

御入城以後ハ、イツレモ様

御対顔不相成、御翠簾ヲ卸一間ヲ差置 御対顔御言葉

計ニテ、何様之御取扱ニ候哉、全体御様子ヲ相窺、帰京之上当今様江被 仰上筈之処、御咄モ御出来不相成、橋本様丈御残、其外ハ一統御帰リ相成リ御咄之由、

一 供奉堂上方御帰之上、江戸ニテハ段々御丁寧之御取扱モ有之候由ニハ御座候得共、夫程ニハ御怡モ無御座、却テ関東之患口計御咄之由、

一 橋本様モ

宮様御上京迄御残、其節供奉ニテ御帰リ被成筈之処、

御上京之儀ハ表向御婚姻被為整候上、御上京可被仰出ト御延引相成申候由、左候テ二月六日之

御法事ニハ為 御代香、

宮様へ

御所ヨリ御附之上薦於フチ様并御年寄玉島其外、正月二十七日上京、同晦日参 内ニ付、江戸之御様子御聞被成度申、

御所ニハ前以ヨリ御待受之由、

一 晦日於フチ様并玉島朝五ツ過ヨリ参 内ニテ、翌曉八ツ時過迄段々御咄有之、我モくト御寄合之由、
一 晦日夜、土佐守宿番ニテ

御所御鎖口之内ニ夕方ヨリ相詰、何カ之様子窺ニ相伺

居候処、京・江戸御相談ニ相成候向トハ都テ相違イ

タシ居、以之外成御事ニテ至極御不都合、御見送之御局様其外御広敷之末ニ被召置、関東之女中方何モ引受宮様江御附人モ同様之向ニテ、何一ツ

宮様江申上候事モ出来不申、御言葉ヲ被下候儀モ出来不申由、

一 橋本様ハ

宮様之御様子等日々御伺被成、

御所江御申上之筈候処、御一間ヲ置御簾之内ヨリ御言葉計ニテ、御内咄モ難被遊、双方ニハ

宮様御附御用人相詰居申候、

御機嫌御伺而已ニテ、何様御申披被成候テモ、関東へ被為入候上ハ、容易 其御方様方ハ御対顔不相成ト之事之由、橋本様ニモ御当惑ニテ、猶又勝光院殿江御逢被成候テ右之趣御咄有之候得共、是ハ急度不相成旨被仰、誠ニ御込リ被成候由、

一 弥二月十一日、表向 御婚姻之旨被

仰出候由、奥向計江被仰度、未表方江ハ不被仰渡候由、

一 右 御婚姻被為濟候上ニテ御見送り、宰相典侍様始御

帰京、橋本様并中山攝津守モ帰京之由、

一右之向帰京之上ハ、大体之様子相分り可申哉ト申事之由、

一宰相侍様其外御広敷之末江被召置、橋本様・中山攝津守ハ御用屋敷へ被召置候事ニテ、奥向之御様子モ分り兼不可申哉、橋本様ハ格別成御訳柄ニテ被召附候処、前書之通何モ被仰上候廉無之、頓ト無申訳ト之御咄ニ御座候由、

和宮様御腹 橋本宰相様御妹

観行院 様

上臈

大炊御門家御娘

於フチ 様

外 四人

御乳人

少 進

御年寄

玉 島

御中臈

六 人

御小姓

御次衆

四 人

右和宮様江御附人ニテ被差越候、江戸表ニテハ御広敷江被罷居候得共、江戸女中都テ御用承居、右之向ハ御用無之、却テ心配之様子ニ御座候由、

御局故庭田一位様御娘

宰相侍様

下臈 加茂銀杏新三位娘

能 登

御下モ

三仲間之内

ム メ

於 チ ヤ

マ ツ 江

和宮様御叔父観行院様御兄

橋本宰相様

禁裏奥医師和宮様御七

中山攝津守

右人数ハ

御婚姻被為濟候上御婦京、

一和宮様 御内婚被為濟候迄ハ、別テ 御威勢強、江戸

女中方ヲ眼下ニ御取扱被遊、流石ニ

宮様ト御附之衆モ難有存被居候処、

御内婚後ハ兎角関東之方御附被成、是亦代替候御事ニ

テ、全江戸女中方ヨリ教上候事ニモ御座候半ト申事之

由御座候、

一関東之御威勢中々以難尽申、 京都ヨリハ何モ御遠慮

被遊候向ニ御座候由、実以

仙洞御所之被成方之由、

一右通

宮様ニモ関東風ニ御成被成候ハ、

公武御合体ト申向モ御座候得共、兎角表裏之所モ有之、

中々御合体之所ニハ至リ間敷ト之事御座候、

一右通、彼是之儀都テ殿下ト若州侯之由、京地ヨリ掛テ

御心配有之、是非御合体有之、穩ニ不相成候テハ不叶

事ト折角御働之由、

一中山攝津守事江戸江着之上、 公義奥医師格ニ被仰付

候由、

一禁裏之奥医師ヲ関東之奥医師格ニ被仰付候儀、甚以不

相当ニテ心外之由、

一右攝津守事、一ケ年ニ三拾人扶持ニ金五拾兩被下候趣

御達有之、別テ悦居申候処、於京地ハ家来一人御薬箱

持一人ニテ出勤イタシ候儀御座候処、江戸表ニテハ乘

物ニテ出勤、家来兩人・中柄・草履取・薬箱持・挾箱・

合羽籠手人七人モ入用、駕籠人足四人召抱置不申候テ

ハ、急ニ被召候節ハ不都合ニ付、誠ニ存外成物入多、中

々右之宛行ニテ足合不申候由、最初ハ難有ト悦之処、

後ニハ案内之次第ニテ却テ迷惑之由御座候、

一橋本様御事

和宮様御下向ニ付、諸御道具掛被仰付、諸御取入物ハ都

テ御見分之上御用ニ相成事候処、江戸表ニテハ不依何

品倍增之代銀為書出、弘方有之事情間、爰元ニテモ其

通取扱候様、御道具掛之是社御蔭ト、勝光院殿頻ニ進

メニテ御座候得共、其儀ハ難取計御断被成候由、是非

其通被成候様ニ被仰聞、諸品倍增之売上書為致差出候

様被仰聞候由ニテ、追々差出、勤使買物使方江差廻シ

相成候得ハ、速ニ何程ニテモ弘方相成申候由、橋本様

ニモ最初掛念之訳モ有之、終ニハ勝光院殿之差図ニテ

欲ニ御迷被成、此比ニ至リ売上人ヨリ及露頭、売上人

モ迷惑イタシ居候由、

一御法事ニ付、二月四日

御所清涼殿江出

御御焼香、御導師梶井宮様ニテ叡山派僧都テ罷出、

和宮様御代香モ被為濟、同六日泉涌寺ニテ右御同断被

為濟候由、

一右通 御代香被為濟候上ハ、

和宮様御上京之儀ハ御六ヶ敷、当秋亦ハ来春ナト、追

送り、終ニハ御延引切ト申事御座候、

一右御代香ニ

宮様御附之御方々ヲ能杜御登セ有之候ト申事之由、

一右通之次第ニテ、何分 京都ヲ輕蔑被成候筋ニ付、往

々御合体之程六ヶ敷御模様之旨、

御所之噂候由御座候、

一右ニ付、此節迄ハ

主上之 叡慮之程未奉伺候ニ付、此等之儀ハ橋本家其

外御帰リ之上窃可申通旨内々承候付、追テ可申上候、

一全体

和宮様御事ハ、

近衛大納言様江被遣候筈之処、故維

學心院様御遺言ニテ、尾州御姫様御貰受之御内約相成

居候間、御断被仰上候ニ付、

有栖川宮様江 御縁与被仰出置候由、然処關東江 御

縁与相成、尾州御姫様ハ井伊掃部頭様江縁与相成候段、

井伊様ヨリ 近衛様江為御知有之、御違約相成候哉、

内々尾州様江御尋相成候処、公辺江対シ諸事御遠慮

ニテ、近衛様御方ハ御断之積、左候ハ、右之御妹妹

有之、其御方ヲ御貰受候筋段々御世話申上候向モ有之

候得共、是ハ極内之噂ニハ 公辺御養女ニテ、

有栖川宮様江被為入候御内約欵之由未耽トハ難分候得

共、右等之様子ニ相聞得候旨、右ハ竹腰兵部少輔殿之

計之由、近衛様御方ニテモ御機嫌不宜、此御方様

ヨリ是非御貰受被遊度 思召之由、極内承知仕候、

一近衛様江兼テ若州侯モ御心易、右之趣等被成御承知、

其儀ハ別テ不人情之御取扱トテ、私ヨリモ折角御取持

申上候間、是非 此御方様ヨリ御貰受之筋被成度被仰

上候由、

右之通承得、亦ハ書状ヲ以申越候付、此段申上候、

猶追々可申上候、以上、

戌二月十日

永井清左衛門

(同上書にて校訂)

一三 永井探訪第二

当正月朔日、例歳之通南都

春日社へ御供物ヲ受台へ盛上候ニ、如何様ニイタシ候
テモ盛上ケ不相整、甚不審ニ存、社人モ大概ニ取締置
備置申候由、翌二日朝 御神供備方ニ社務罷出候処、
御内陣ニテ、別テ音高ク石類ニテモ落候哉ニ相響候ニ
付、社人共打寄早速御扉ヲ開見候処、

御神体御鏡央ヨリ下割レ落有之、一統相驚キ仰天仕候
由、尤内々ニテ召置候得共、其俣ニテモ不相成、終ニ
ハ奏聞ニ相成、一七日ノ御神樂被仰付トノ御事ニ御座
候、未御法事等ニテ其所迄ハ不至候得ハ、藤家宗ニ頼
ニテ御一統御慎之由、右ハ当時藤家ニテハ御嫡家ハ陽
明家近衛様御二男、陶化家九條様ニテ、央ヨリ下ニ
テ割落候付テハ、陶化家ニ何ソ事ノ起ル儀ニテモ可有
之哉ノ噂ニテ、誠ニ不容易大変、往古常陸鹿島明神ヨ
リ御移之節ノ御神体ノ由、於

御所モ深御慎モ被為在候由、未極内々ノ御取扱ニ御座
候由、

〔朱〕
〔此間数字不明〕

一 関白様

〔朱〕
〔此間数字不明〕

但酒井候ハ九條様御統柄ニテ御座候、

一 酒井若狭守様右同断、亦ハ脇へ御越之節モ前後百人計
〔忠義 京都所司代 少佐 藩主〕

モ参リ申候由、其外道路ニ小店ノ買入候姿ニテ、諸所
ニ多人数相集居申候由、御通行済ニハ追々罷帰候由、

一 右御同人様事、陣所ノ外地面御拝領有之候由ニテ、別
段ニ御住居向立派ニ出来上リ申候由、元来若狭守様ニ
ハ御妾腹ニテ、京都ニテ御出生ノ由、

王城ヲ何々迄モ守護可仕、最早帰府ハ不相望、都ノ土
ニ可相成迎御隠居所御出来ノ由、関白様其外伝奏方ニ
テ、別テ評判宜御座候由、

一 大坂御城代松平伯耆守様、町奉行所へ公事聞ニ御越亦
〔本此宗秀〕
ハ弘参等ノ節、御供廻リ別テ相重ミ、其外前後ニモ差
越候由、御駕籠ノ脇剣筒五挺ツ、左右ニテ十挺、尤西

洋流ニテハ無御座候由、皆和筒ニ鑓ヲ仕掛有之、且陸
尺銘々ハ角ノ檉棒ヲ持、皆筋金入ノ由カノ説、先ニモ
手替リノ者同様ニテ参候由、是ハ去ル拾五日江戸騒動

ノ一件相聞得候テヨリノ事由、出逢候人ノ咄ノ由承得
申候〔朱〕
〔安藤遭難ヲ云〕

右乍序奉申上候、以上、

一禁裏御與醫師西尾土佐守方へ二夜止宿仕、緩々世間咄等仕居候処、彼方ヨリ申出シ候ニ付、追々承申候処別紙ノ通御座候、左候テ 近衛様御用人蔭山伊勢介方へモ二夜止宿仕、承得候成行モ同様御座候ニ付、別紙ニ書載置申候通御座候、猶亦伊勢介同役林日向介方へモ差越承申候処、皆々同様之向御座候、乍然伊勢介方ニテハ若州侯ハ悪クハ不申候得共、關東様ノ事一向不宜風聞ニ御座候、土佐守方ニテハ関白様・若州侯モ宜キ方ニハ不申居候儀ニ御座候、土佐守方ニテハ追々内密之事可相分候ニ付、窃ニ可申越トノ事御座候ニ付、追々申上候様可仕候、別紙之通相添此段申上候、以上、

戌二月十日

永井清左衛門

^{〔朱〕}永井ハ大坂藏屋敷ノ小吏ナリ

一四 無名ノ書牘

尚々奉恐入候へ共、市來へ宜敷御伝言被下度、且岸・

谷両士へ宜敷様奉願上候、

二月十六日、久藩淵上丹下^{〔朱〕(久留米)} 田大允^{〔朱〕(久留米)} 角照三郎^{〔朱〕(久留米)} 崎三郎^{〔朱〕(久留米)} 両人

来訪、此節京師田中河州二月十日出 京ニテ、早船カ

リ切同十五日迄ニ久留米へ参着ノ筈、先日態々忝人ヲ以申越候、尤 御内書持参ノ賦、依之長藩同志ノ者下關迄連出シ呉候様ニトノ義、左候テ田中十五日ニ久留米着ノ上、直様薩州へ下向之筈、然処何ノ訳カ未タ下着不致甚不安心ニ被存候、扱又長藩へハ未タ引合置不申故、兩人ノ内忝人明早曉ヨリ出立長州へ罷越度、今忝人ハ小倉迄ニ立帰リ、国方同志ノモノ参リ次第致誘引罷登リ度候、依之其内ニ河州当家へ参着候ハ、拙者共ニ成替リ万事致都合呉候様ニトノ御頼承申候、

一十七日朝、牟田・川崎出立後二時程過候テ、久藩大鳥

居利兵衛^{〔朱〕(信長)} 父子来訪^{〔朱〕(大鳥居ハ宮ノ名ナリ、実ハ本夫、昨夜牟田・宮ノ社人教和果守ノ弟ナリ)}

川崎諸所ノ次第相尋候間、形行申述候、無程出立、尤風並悪ク下關へ繫船ノ由承候、

一十八日、下關ニテ久留米家中兩人被召捕候風聞仕候、

大鳥居父子ナラント氣遣候へ共、如何トモ手段無之、夜ニ入密ニ聞合仕候処、虎屋小路ト申処ニテ右ノ次第、

年齢旁彼父子ニ無相違相見へ申候、

一十九日、久留米盜賊方彼父子ヲ警固イタシ帰国ノ噂相聞へ候、途中黑崎駅近辺駕ノ中ニテ切腹ノ風聞相聞へ

残念奉存候、

一廿日夕、久藩原道太・荒卷羊三郎(原越)兩人來訪、平野次郎(國臣)

ヨリ添書有之、國方混雜ノ次第被申述、潜居被相頼候故、引受潜伏仕ラセ申候、此兩人ヨリ承候ヘハ、俄ニ

亡命二十人程有之由、追々追捕罷出候由ニ御座候、

一廿三日、長藩久坂玄瑞(重忠)ノ書翰ヲ以同志ノモノ松浦龜太(知)郎來、事情聞合ニ罷越直様帰萩、

一廿六日、萩政府ヨリ事情聞合トシテ山本春平ト申者(是輕)罷越一夜滞在、彼ノ牟田・川崎等ノ事相尋候故、存申候都合申聞候、

三月朔日、萩松浦龜太郎再來訪、直様帰萩、

一四日、土屋矢之介ト申者萩政府ヨリ事情聞合ニ罷越候、

一同日夜、萩産物方頭人竹内正兵衛殿、正一郎(本)(自白)ヘ逢取度トノ儀申參候ニ付罷出候処、此節世上物騒ノ様子被相

尋候故、聞見ノ次第申述候、此人大ニ振ハマリ有之、

既ニ長崎表ヘ御用ニテ被罷越候筈ノ処、俄ニ作病ヲ構、帰萩ノ取計山本春平ヘ書翰ヲ為持、同五日早曉ヨリ山

本ヲ萩ヘ被差立候、

一六日、竹内正兵衛君來訪、尚又事情委敷被相尋候故、

荒増都合申述、其余ハ御推察被下度段申置候、此人弥

増フリハマリノ体ニ見受申候、

一八日夕、萩ヨリ山本春平早駕ニテ出關、今夜正一郎萩

役所ヘ被相招候(新地ト申所ニ出張命所有之)久芳内記殿(余出關)・竹内正兵衛殿此兩人ヨリ万事無遠慮事情相知ラセ呉候

様、尚又已後承リ次第為相知呉候様御頼御座候、

一同夜鶏鳴頃、中村文之進殿出關、萩ニテ唐船方ト申役名ナリ、(概數)
(又右衛門)

一九日、竹内・中村兩人來駕、今度ノ事情尚又被相尋、萩ヨリモ兵庫詰ニ御人數被差出候内評承ル、今日夕方ヨリ竹内君帰萩、

一十日、山本春平・時山清之進兩人來訪萩是輕ナリ

一十一日、中村文之進殿山本召連、正一郎同道、船中ニ

テ何角ト談話有之、萩表モ追々振申候噂承之、中村氏有志ノ人ナリ、

一十二日夕、土屋矢之助來訪、只今出關、萩表大ニ振ヒ

申候噂承ル、

穴戸備前大夫急出立、江戸ヘ君侯為迎被罷登候由、

是ヨリ先二月六日八日、北條瀨兵衛ト申政府ノ人御

迎ニ參候ヘ共、其砌迄ハイマダ此辺ノ事情不分候故、

今度俄ニ備前大夫被登申候トノ文承之、且又周布政(兼總)之介禁錮ノ処、用便ノ数政府ヨリ絶テ差免候由、然

廻周布政之介開門ヲ相待、役人並有志ノ銘々相詰及
長談候由承ル、

一十四日、萩御用達被仰付候段、清末表ヨリ御達相成候、

萩表御趣意有之候テノ事今被相察申候、

一同日、久坂玄瑞来訪、談話中ニ土屋矢之助来訪、来ル

十七日、竹内正兵衛大坂留守居被差登候由、是迄ノ留

守居穴戸九郎(實徳)兵衛儀、京都留守居へ被仰付候由承ル、

一十五日、久坂同道土州人吉村虎太郎来訪、

土州ニテ同志百人程有之由、尤政府ハ不振ニ付、不残

亡命ノ所存ノ由噂サ承申候、

一十六日、土屋来訪直様帰ル、夕方久坂土州人三人同道

来訪、今夜久坂滞宿、土州人ハ不残宿へ帰ル、土州人

ノ由、明朝ヨリ志人、其後岡へ罷越、志人ハ帰国ノ賦

リト承ハル、

一同夜及深更土屋来訪、久坂ニ逢取、薩州ヨリ(本)栗原良蔵(百太郎秘録参考)

只今帰關、直様帰萩ニ付、久坂モ早々罷帰候様トノ儀

承之、

一十七日、早朝ヨリ久坂帰萩、早駕ナリ、

一十八日、肥藩波多野馬之介来訪不逢、

一同日、筑前様来ル、廿七日俄ニ御出府ト申事承之、

一十九日、土屋矢之介来訪、周布政之介出關ノ筈ニ候廻、
俄ニ過ル十四日早船ニテ出府、是非々々君候御迎取ノ
手筈ト承ル、

一廿日、萩藩山田又介(公章)殿来訪(丙辰丸ノ)、又松嶋幸蔵(久誌)殿来

訪、俄ニ上坂ノ由、早船(船持ナリ)三十貫金三十五両ニテカリ切、
其船便ニ久藩ノ原・荒卷兩人モ上坂、

一廿一日、今夜山田又介殿山本春平召連来訪、

一同時岡藩小河彌右衛門(一巻)・赤座何某(正徳)・平野次郎三人来訪、

一同時土州人吉村寅太郎モ来、各一席ニテ長談及數刻、

一二十二日早曉、小河彌右衛門同藩ノ士十三四人、僕四

人召連、

一同日夕方早船出帆、右ノ銘々各上坂ナリ、

一同夜、長藩村田次郎(忠之)三郎殿出關御目付役ナリ

一廿三日、正一郎山田ノ旅宿へ被相招、村田次郎三郎君

ト三人一席ニテ酒宴及余談、夜ニ入正一郎帰宅、

上ノ關近辺アツキト申処、長州家老浦朝負殿(元徳)ノ領分

ナリ、此家中ヨリ五百人計馳登ル手当イタシ有之由

承之、

一二十三日夜、土州人志人岡藩ヨリ帰り来リ、彼藩大ニ

振ヒ家老兩人大急出府、君公御迎ニ參候由、併万一君

公御聞入無之時ハ見捨テ帰リ、国ニ幼主ヲ立候所存之由、尚又廿五六日ノ頃五六十人上坂ノ賦リ、彼地ハ婦女子ニ至迄大ニ振ヒ罷在候トノ儀承之、

一 二十四日朝、山田又介殿来訪、只今ヨリ直様上坂、村田モ同行ノ由、大ニ振ハマリノ体ニ相見ヘ候、村田ハ江戸ヘ駆付候由、途中ニテ君公ヘ御逢ノ上、直様上京御進メ申所置ノ由承之、

一 同日昼過、肥後轟武兵衛来訪、廉以逢取、(寛政)
(正一郎弟廉作賢敏)

一 廿五日朝、久坂玄瑞来訪、只今ヨリ公然ト上坂、尤二十人程ノ十人ハ遊学ト唱ヘ、十人ハ亡命ノ由承之、

一 廿六日、秋月藩海賀宮門来訪、(真承)

一 廿七日朝、山本春平来訪、長井雅楽(時應)頃日百五十石加増被下、頻ニ公武御周旋ニ取掛リ候由、此モノハ打亡シ候外無之ト申噲モ有之由、

以上

一五 久光公御上京ニ就テ予達

一五ノ一
一 赤間ケ關

御渡同前、御乗船ノ節相束飛脚ヲ以御当地ヘ御左右申上筈候、

一 兵庫 御着船

一 伏見 御発駕

右ノ節々飛脚ヲ以同断、

右ハ、此節

和泉様御出府付、右ノ節ハ御左右申上筈候条、此旨掛之向ヘ可申渡候、

但

赤間ケ關ヘハ御当地ヨリ飛脚差越置、右ヲ以申上、

兵庫・伏見ヨリハ飛脚差立、御左右申上筈候、

二月 (審入久高)
攝津

一五ノ二
一 赤間ケ關

御渡同前、御乗船之節相束飛脚ヲ以江戸ヘ御左右申

上筈候、

一 兵庫 御着船

一 伏見 御発駕

右之節ハ飛脚ヲ以同断、

(静岡県)
一 今切 御渡大井川御越之節相束同断

一 箱根 御越

一 江戸 御着之前晩

右之節ハ飛脚ヲ以同断、

右ハ、此節

和泉様御出府付、右之節ハ御左右右申上管候条、此旨掛

之向ヘ可申渡候、

但

大井川並箱根

御越之御左右ハ、江戸ヨリ差越居候飛脚ヲ以申上、

其外ハ御中途ヨリ飛脚ヲ以御左右右申上管候、

二月

攝津

一六 侍医朝稻改名

三益事

朝稻宗益

右者

三郎様思召之訊被為 在、去ル十三日右之通名替被仰

付候、

一七 上京予備兵賦

一大砲備

一組

昇預

和田孫右衛門

談合役

江田平太郎

大砲

一挺〔采〕〔五百錢砲〕一什長

三木原等

規役伍長

湊川仁左衛門

玉葉役

内山嘉八郎

玉竿役

三原仙次郎

口葉役

飯牟禮伴助

打役

黒江喜右衛門

右之通被仰付、御出馬ノ節ハ、

御旗本ニテ可被差出候条、兼テ致用意可被罷在旨可申

渡候、

四月

式部川上

右之通、文久二年戊四月十三日、於砲術館一番組頭

川田將監殿御取次ヲ以被仰付候事、

談合役ノ儀ハ何様成役職ニテ候哉ノ旨、御軍賦役折田平八殿へ相尋候処、専主將ノ相談役ニテ、譬へハ分隊等ノ節主將ト相分レ、一方ノ主將ニ相成候役職ニテ、別テ重キ役者ナリ云々、

一八 横濱日本文久二年壬戌四月十三日 (南部彌八郎報)

千八百六十二年五月十一日 (番号三三斧次郎君へ以下同文により削除)

一九 岩倉具視堀次郎ニ贈ル書翰

従

禁中御沙汰之旨有之候趣ニテ、先時中山並三條等ヨリ

(忠能) (実徳) (島津久光)

於堀川家待合候様被命候、右ハ全ク泉州今日言上之旨、カネテ足下ト御示談之辺ニ齟齬致候事件有之哉ニ被存候間、陽明家ニ参上有之候ハ、無程出頭得面談度奉

存候、差支之筋無之哉、先内々尋度如此候也、

四月十六日

岩倉

(伊地知真鑿旧名)
堀次郎とのへ

少将

内啓

追テ、小子事服忌ニ付、此比

御所御神事参

朝不相成、本文之次第第二御座候、不審哉ト申入候也、

二〇〔内密〕

上封
内密

浪士鎮静之儀、島津和泉江被

仰附候ニ付、浮浪取押方之儀難行届、深御不安心被

惱

宸衷候、万一京師及動揺候テハ、諸国可蜂起哉ト深被惱

歎慮候、就テハ修理大夫被 召登度候得共差支モ有之

候者ニ、島津石見率人数上京ニハ有之候得共、猶又今

一人島津圖書将士卒神速入洛有之、被安

歎慮候様可有尽力、早々申達上着之様被遊度

思召候事、

二一〔宣旨〕

壬戌
四月十六日承知

浪士共蜂起不穏企有之候処、島津和泉取押置候旨先以

歎感 思召候、別テ於御膝元不容易儀於發起ハ、実々

被惱

宸衷候事ニ候間、和泉当地滞在鎮靜有之候様

思召候事、

二三〔宣言〕

壬戌
四月廿五日承知

浮浪之徒、蛮夷之儀ヨリ彼是蜂起之趣、去十六日内々

言上被惱

宸襟候処、鎮靜之義御受有之、被安

叡慮候処、又々一昨夜已来猛暴之形勢被

聞食候、元来右之徒為

皇国赤心報国之志ヲ以、投身命候段ハ

御感之御事ニ候得共、攘夷一件ニ付テハ、実々自先年

深被惱

宸衷候処、何分国中一致之儀第一ト被

思召候ニ付、尚厚被廻

叡慮候御事ニ候、然処方今血氣之壯士等不用理解、暴

論ヲ為主奉

勅命ヲ待スシテ、猥ニ乱妨ケ間敷儀ニ及候段ハ、忠憤

却テ違

勅之筋ニ相当、不埒之至候、右等違背之輩ハ早嚴可加

制止儀ニ被

思召候事、

二三〔岩倉具視口述書〕

口述

別紙風聞書ニ通内々伝覽、一見之上、過日来借進書類

ト、此者江返却頼存候、

今日未刻後入来之事申入置候得共、御用召參

内候間、申半刻後勝手ニ出頭有之候様致度存候、右如

此候、以上、

四月廿三日

堀 次郎とのへ

〔岩倉具視〕
富妍

二四〔御内書〕

尚以時氣專自愛可在存候、呉々泉州工宜可申達様頼

入候也、

連日夏景増加候、弥其卿壯健満足候、偕ハ泉州即今浮

浪ノ輩鎮靜ノ義頼ミ置苦勞ニ存候、且亦忽体困論勤王

之志專ニシテ、万事進退可応勅諭之趣、実以正論殊更

頼母敷候、弥其趣意深厚、行末々迄モ遵奉有之候様ニ

卜存候、此品鹿輕ニ候得共、從來持古シ候故、芽出度内々泉州心底可賞、旁一笑ニ遣度、先其卿江差出候俣宜伝違頼入候、決テ極内々儀其刃相含候テ、取計ノ義モ頼置度存候也、

四月廿四日

近衛大納言ノモトヘ

二五〔近衛忠房書翰一〕

壬戌四月

尚以、其元誠忠 御満足ニテ、不存寄愚拙ヘ厚御沙汰之

勅書拜領仕候事ニ候、此義モ一寸申入置候事、

追日薄暑催候、弥以勇猛珍賀不斜候、於過日ハ光駕初〔御力〕

テ面謁、段々誠忠之旨趣從兩卿被及言上、深御満足之

叡慮、就テハ為鎮靜滯留被 仰出候御事、且亦老中上

洛之上、何カノ御都合ニモ御安心之 叡慮、旁以兩卿

且於愚拙心慥ニ存居候事ニ候、一昨烏〔小恙〕ハ帶刀入來、何

モ承知仕候事ニ候、扱亦昨夜田中仲右衛門〔國保〕入來、何カ

浪人共之義承知仕甚心配仕候、折角厚 叡慮ニテ滯留

被仰付置候事故、唯今浪人共不慮ニ騒乱ニ及候テハ、

実ニ不容易次第、其元御誠忠モ急ニハ難立哉ト心配ニ

存候、何卒精々分散之浪人共被取押候勘考在度存候、
吳々唯今ハ大事之場合ト存候事故、乍御如才御座無哉
心底之程申入置候事、

忠房

例之乱書御推覽
島津和泉とのヘ
極内密々々

二六〔同上書翰二〕

尚々余条ハ帶刀ヘ可申卜存候事、

今日モ快晴ニ候、弥御平安珍重々々、其元誠忠ノ条々

天朝不淺 御満足ノ御旨趣、就テハ其元御心底被

賞、從來

御物ノ御短刀極密々被遣度

叡慮、昨日不存寄

勅書ニテ賜候事何共恐入、於愚拙モ深畏ミ候事ニ候、

御礼厚申上置候事ニ候、仍今日帶刀招寄日出度御伝申

入候、幾久敷御重宝可為存候、賜候

勅書写置候俣、御拜見ノ様存候、御跡ハ幾久敷其元ヘ

御殘シ無之様存候、仍写取日出度内々御伝申入候事、

四月廿五日

忠房

島津和泉トノヘ

二七〔近衛忠房口述書〕

口述

唯今從

朝廷内々野宮宰相中将為〔定功〕御使被成、此

御書付被出候間、泉州ヨリ浮浪之輩へ理解ニ被及候様被、仰出候、仍御伝申入候事、尤議奏之心得ニテ被渡候也、

四月廿五夜

追申

誠ニ愚案ニ過日来懸念候ハ、久世和州上〔広周、老中、関宿藩主〕京之上、

叡慮御旨趣被、仰出候ニモ、何分酒井若州〔忠義、京都所司代〕在役ニテ

ハ、甚何力如何之事ト吳々心配仕候、唯今從

禁中退役之義被

仰出候事ハ難相成事旁甚心配仕候、何卒和州上洛迄

ニ辞役ニ相成候へハ、大ニ都合ト存候、吳々若州ニ

ハ不容易姦曲者故、実ニ懸念仕候、其元達ノ賢考ニ

テ、何卒和州上洛迄ニ退役之様勘考在度候、此義決

テ岩倉少将杯へ不洩様、吳々極内々申入置候事、乱

書御推覽くく、

忠房

被

入覽後急速投火々々

島津とのへ極内密々々

仰出之御旨趣、是ハ別段御受書被差出候様存候事、其上可入

上可入

叡覽存候事、

〔島津忠承氏藏本にて校訂〕

二八〔近衛忠房書翰三〕

尚々、一兩日逆上強頭痛困り入候次第、別シテ乱書

く、仁恕頼入存候也、

弥勇健珍重候、抑一昨日ハ拜領物御札之書翰并ニ御請

書等被差出、何モ慥ニ落手仕候、帯刀ヨリモ御口状之

趣何モ承候、則御札之書翰内々

天覽ニ入候処、御満足之御沙汰ニ被為在候、扱為

御礼ト極内密献金之義、一封ニ封込御直披ニ奉願献上

仕候処、扱々懇志之程ハ、幾重ニモ

御満足ニ被為在候へトモ、何分今度之一件、薩摩一国

ニ限り候分ニテハ無之、皇国一体安危之堺、泉州ニ

ハ不厭国費、薩日隅等之困ヲ以テ、忠勤専ラニシテ御

奉公申上候心底、不浅

叡感ニ被為在候ヨリシテ、屹ト御賞賜モ被遊度厚

叡念ナカラ、兎角時節柄ト申 思食ニ不被任甚御不快

ニ被為在候、旁々御物之御短刀拜領被 仰付候義ニ

テ、唯々時勢献物杯ハ実ニ不被為寄 思食候御事、献

物杯ハ殊外 御心外ニ被 思召候御事、乍去厚情之程

無ニ不相成様、程克差心得候テ、可及返却様トノ御内々

勅書拜領仕候事ニテ、其元ニモ折角之御存旨、扱々御

氣之毒ニ候へ共、

叡慮モ御尤様成御事達テ献上難仕義故、御返納申入候

事ト存候、呉々度々ノ御存旨ニ任セ、忠房ヨリモ御献

金之様御進メ申入候段、何共不都合ト存候、何分

泰平ニ事治り候上、恐悦ニ献金ハ屹ト 御満足ニ可被

為在哉ナガラ、唯今ハ却ツテ不敬ニ被 思食候テハ恐

縮之事、先乍御氣之毒御返却申入候事、扱亦酒若之義

至極ト御尤千万ニ存候、何分御賢考可然存候、扱々

御献金ハ折角ト之義、却ツテ 御不満之 御様子仕

方無之候、仍御返却申入方一向睦ケ敷、不日帯刀ニテ

モ入来可及返却存候事、呉々懇志之程ハ決シテト

御不満ニ被 思召候訳ハ無之、其辺ハ不悪取繕ヒ、通

達ニ可及様トノ 御沙汰ニ被為在候事、自余ハ帯刀ニ
テモ入来之節ニト存候事、

四月廿九日

忠房

島津和泉とのへ

極内密々々

〔同上書にて校訂〕

二九 〔八田知紀詩ト風説〕

国父公御上洛輕カラサル

勅命ヲ蒙ラセラレ、加之 御劍御拜戴、実ニ比肩ナキ

御名譽ニテ、一藩挙テ錦ヲ着タルノ形勢ナリ、茲ヲ以

テ心アル輩ハ、詩歌ヲ以テ其意ヲ述ヘ祝シ奉レリ、中

ニ八田知紀力詠、左ノ如シ、

久しく世治り、いつとなく弓矢の道おとろへ来ぬれば、

夷の国々よりつる時をうかゝひて、すてにこの年比船と

も寄せ来りつゝ、おふけなくいひふるまふ事ともものあり

けるを、さるへきつかさ人達、なほじりそくるちからな

く、かへりてかれにおもねり、かついにしへの御説にそ

むき、とかくほしいまゝなるやうにて、青人草の上など

露おもはぬさまなれば、しもか下までも恨ミ嘆かざるは

なかりき、されは二度まで江戸の大城のもとにて、うた
てしき事ともの出来ぬるも、さるへき事なるを、近頃ハ
ミたりに世をミたさぬとするものさへ、蜂の如くにおこ
りて、上にももてあましたまふ勢ひなりしを、独り

我が君の 帝の御為め勤め給ふ事は、ちにおはしませハ、
はる／＼都にのほひたまひ、みまつひ、ことの上につき
ねもころに聞へ上げ給ふ旨ありければ、みけしき斜なら
す、いともかしこきみことタマのりともを、伏見の駅にうち
きとめ、それよりおほミ使にしたかひ、江戸ニものし給
ひ、頻りニはからひ給し事とも、すへて御心のまに／＼
成りニければ、ほとなく立帰り、そのよしつはらに聞へ
上げ給ひしかは、やかてお目おちかくめされて、二つな
き御いさをほめ給ひ、たふとき御剣をさへ賜りしよし承
るハ、世にためしなくめてたきことのかきりにて、とか
く申すもかしこければ、文久壬戌の秋八田知紀
雲はろふ君か息吹本ノマに天の原照る日の光いかにそふらん
大君のみてにひかれて万代の光やそわぬ弓張の月
万世もうこかぬ国のまわりには二つともなき天の賜も
の

国父公御上落ハ、治世来未曾有ノ御盛業ナルハ多言ヲ

要セス、茲ヲ以テ天下ノ耳目ヲ一新シ、是ヨリシテ尊王
ノ道立チ、 皇威復古ノ基ヲ開カレタリ、其際大小ノ諸
侯進退ニ苦ミ、或ハ両端ヲ懐キタルモ少カラス、当時京
攝又ハ江戸辺ニ於テ、種々ノ俗歌・俚謡流行セリ、其中
ニ大名評判ト名ケタルモノアリ、時勢人情ヲ知ルノ一端
ナルカ故、其一ニヲ拾ヒテ左ニ記ン、

大名大評判

りんげん汗の如し

鹿兒嶋

鶴は百まで

萩長州萩侯ヲ云フ

よい中に垣

土佐

有味は宵

佐賀

下駄ニ焼味噌

久留米

盗人の昼寝

熊本

椽の下の舞

福岡

むくろ地三年

對州

遠ひは華

藝州

豆腐にかすかい

岡山

立板に水

鳥取

氏のふて玉

上野

のミといは、

金澤

かけ裏の豆	佐竹	おふた子に抑へられ	阿部どの
きりとふんとし	南部	蛙のつらに水	越後高田
むかしの剣	上杉	人參かんで首くゝる	小濱
石て手を詰た	伊達	枯木も山の賑ひ	<small>長府・徳山・三上・島原・福知山</small>
地獄の軍も金	徳嶋	かんやみに豆	牧野
出る杭はうたるゝ	中川 <small>豊後岡侯</small>	梟の宵たくみ	板倉
虎の威をかる	佐土原	京の田舎	桑名
志んハしんより	越前	神のなり合せ	膳所
嫁遠女笠の内	春嶽	やみの鉄砲	松前
いわしのあたまも	宇和島	くらかりから牛	雲州
類を出て集る	津和野	さとにことゝ	龜山
れんけて腹	高松	ぬれ手に粟	喜連川
陰陽師身の上知らず	彦根	むかふ獅子	津軽
釘の元から	水府	大名の火にくばる	紀州
一寸先ハ暗	小笠原 <small>小倉侯ヲ云</small>	武士は喰ねと	伯耆
仏の顔も三度	姫路	寺かゝり	川越
ゆふれいの足洗ふ	津山	すきはらニもみなものなし	水野
仏頼んで地獄に落	會津	見ると聞とは	柳川
みとり笠て昼	一橋	おなし穴の狐	久世・安藤・鯖江
餅屋ゝ	尾州	善さいのさる	其外大名

如此ノ類多ク出タリ、當時ノ形勢ヲ知ルニ足レリ、又京攝ノ間ニ於テモ種々アリ、其一ニヲ摘載ス、

西と東に立てわけられて逢わにやわからぬふすまの絵
何をくよく川畑柳水戸の流を見るかよる

角力をはてるし関取や帰る跡に残るは水と塩

何にがなんでもそわねはならぬそうて咄かして見たい
矢倉太鼓にふと目を覚しけふはどの手の議論やら

三〇 五代友厚上海行経費予算（貿易ノ統計）

一金七万両

但銀ニシテ五千四拾貫目、

一金壹万八千貳拾壹兩

但茶売込 利潤前件見賦、

銀ニシテ千貳百九拾九貫四百七拾七匁四分、

合銀六千三百三拾九貫四百七拾七匁四分、

洋銀ニシテ拾五万九拾三枚余、

但壹枚ニ付四拾貳匁替、

右之通ノ御趣向、若御取揚被仰付候儀ニ御座候ハ、

第一長崎御付人引請相働不申候テハ、御用弁仕間敷程

モ、御用暇次第第二ハ時々出崎仕、見聞ヲモ仕度奉存候、

左候テ右之通茶御買入御格護相成度候ハ、追々唐国上海辺へ航海仕候儀、御免許ニ相成候様御座候ハ、張紙ノ通過分ノ御利潤相成事御座候、何分ニモ時節不取失様早目ニ御下金相成度、尤七万両ノ御金高一同御下金不相成候テモ、貳三万両ツ、時々御下金相成可然奉存候、併御大金ノ儀ニ御座候間、何分御沙汰次第奉存、此段申上候、以上、

御徒目付

戊四月

五代才助

三二 當時朝廷及ヒ幕府ノ形勢

去ル十六日、近衛家其他中山殿・正親町三條殿等ノ御

取伝ヲ以テ御建言九ヶ条ノ中、閣老久世大和守御召喚

ノ一条、同十七日ヲ以テ所司代へ達セラレシニ、所司

代ハ則日飛檄ヲ関東ニ贈リ、而シテ奉

勅ノ旨報答シタリト雖モ、江戸出発ノ期限分明ナラス、

加之関東ニ於テハ種々紛議ニ涉リ、例ノ詐謀權術ヲ施

スノ聞ヘモアリ、或ハ御建言ノ趣

朝議悠々不断、殊ニ動キ易キ堂上方此際諸説ニ彷徨セ

ラレ、時日遷延スルトキハ、是迄

御心思ヲ勞セラレタル事モ水泡ニ帰シ、
朝威挽回ノ機ヲ失ハン事ヲ

御憂慮、久世(天和守 広應)御召喚ハ罷メラレ、引キ替ヘテ

勅使ヲ関東ヘ立ラレ、国父公モ御差副御下向御尽力

アランコトヲ、近衛家其外諸卿ニ就テ献言アラレシニ、

叔意ハ偏ニ 国父公ヲ御力ニ御頼

思召シ、此際

闕下ヲ去リ、遠ク関東ニ御下向アラセラレテハ、

御膝許御心細ク、

御憂念アラセラルトテ、

御允容ナカリシカトモ、 国父公ハ

皇威回復・天下蒼生ノ安否・国威ノ揚墜ニ関スル一大

事ノ機会失フヘカラス、幕府ハ久世御召喚ノ趣拜命セ

シ上ハ、直チニ走セ登ルヘキニ、斯ク遷延セルハ御疑

惑ノ廉ナキニ非ラスト、重テ献言セラレ、而シテ五月

日(朔日ナ)、近衛家ニ御参殿アラセラレシニ、近衛家ハ

勿論中山殿・正親町三條殿・岩倉殿ノ四卿御来会、

国父公ハ時勢ノ形況・御施行ノ緩急・利害得失ニ至ル

マテ詳ニ御演述アリケルニ、諸卿悉ク感服セラレタリ

ト、而シテ後(異本ニ忠房卿中央ニ御着座、御客居ニハ中山殿中山、正親町三条殿・岩倉殿御座ニ就キ玉フト記セリ)

大久保・堀ノ三名ヲ末座ニ召出サレ、各意見伏蔵ナク
言上スヘキ旨命セラレタルニ依リ、三名ハ余事ハ措テ
目下ノ急要事ノミ言上シタリトソ、 国父公ニハ予テ
外夷ノ措置振り御議論アリト雖モ、即今ノ処ハ内国人
心ノ一致

皇威挽回・民生安堵・賢材御登庸・武備充実、出テ制
スルノ勢ヲ保ツノ時ニ非ラサレハ、蚊・蠅ヲ掃フカ如ク
容易ニ為シ得ヘキニ非ラス、是レ則緩急ノ別アル所以
ニシテ、若シ緩急ノ順次ヲ誤ルトキハ、遂ニ濟フヘカ
ラサルノ域ニ陥ラントノ旨、本日御論旨ノ要典ナリシ
トソ、斯ク御論談ノ中ニ、四卿ハ動モスレハ攘鎖ノ処
分御質問アリケレトモ、対シタル御答弁モナク、只一
筋ニ目下ノ要点ヲノミ本日ノ御主論トセラレタリトソ
〔本〕
〔(紹述編年志参看)〕

三三 長州内情探訪ノ報告

〔本〕
〔前文略ス〕

此時ニ方テ、長州ハ藩論不定党派分裂、〔雅楽時庵(兼寛)〕
永井・周布等ノ
輩ハ要路ニ在テ幕吏ト心ヲ合セ、開港
勅許ノ事ニ周旋シ、公卿方ノ間ニ献言シ、加之 国父公

御出府ノ場ニ至リテハ、殊更幕府ト親密、世子長門殿下〔毛利元徳〕

國ヲ促シ、京都へ立寄り、我カ藩ノ挙動ニ注目スヘキノ

密旨ヲ奉シタリト、然ルニ又一党派、勅

王鎖攘或ハ討幕主義ナル則チ穴戸九郎兵衛・久坂玄瑞其〔眞徳〕

外幾多ノ輩ハ、国老福原越後ト論ヲ同フシ、長門守殿ヲ〔通武〕

滯京セシメ、国父公ト同シク

勅命ヲ奉セントシテ遂ニ永井等ヲ擯斥シ、福原等長門守

殿ヲ奉シ、中山・正親町・岩倉・大原等ノ諸卿ニ就テ切

迫頻願、遂ニ

勅命ヲ奉シタリ、其頻請ノ挙動稍脅迫ニ出テ、豈ニ薩藩

ノ下風ニ立ンヤ、或ハ祖先元就ヲ初メ尊

王ノ事蹟ヲ挙ケテ公卿方ヲ動シタリ、茲ヲ以テ

朝議大ニ困難ニ涉リ、若シ請フニ任セラル、ニ於テハ、兩

雄並ヒ立ツノ勢ニ立到ラン事ヲ恐レ、又長州ノ請フ処ヲ

允サレサルトキハ、一大藩ノ氣嚮ヲ失ハン事ヲ慮リ玉ヒ、

叡意甚タ煩ハセラレタリト、然ルニ岩倉殿ノ意見ヲ以テ、

密カニ此ノ趣ヲ 国父公ニ告ケラレシニ、 国父公此由

聞食シ驚カセ玉ヒ、臣素ヨリ一毫ノ私意アル事ナシ、亡

兄齊彬遺命ヲ守リ、国体ノ日ニ衰頽ニ赴クヲ憂ヒ、悠々

傍觀ニ忍ヒス、一家一身ノ存亡ヲ顧ミス上京シ、上ハ

朝廷ノ御為メ、下蒼生ノ困苦ヲ救ハント、恐多クモ犬馬

ノ勞ヲ尽サントス、然ルニ如此報國ノ意アル者アルハ、

喜ヒニ堪ヘサル処ナリトノ趣ヲ述サセラレシニ、岩倉殿

大ニ感嘆セラレ、而シテ奏

聞ニ及ハレシニ、至誠ノ真衷

叡感斜ナラス、因テ長州ヘモ同シク

勅命ヲ下サレタリトソ〔大山綱長・磯永弘卿カ書
牘中記スル処ニ拠ル〕

三三 デキソンヨリ通辞立石斧次郎へ贈ル書翰

英文和解

薩人害英夷一条ニテ、英ヨリ政府へ奉ル手簡一冊、

横濱皇文久二年壬戌四月十三日
西洋千八百六十二年五月十一日

斧次郎君へ

汝、今日余ニ御殿山及其地ニ建ル異人館ノ事ヲ話セ

リ、余カ嚮ニ云ル事及何ノ故ヲ以其事ヲ云シ訳ヲ、

爰ニ述ントス、

横濱ニ居レル日本人種々ノ事ヲ云フヲ聞タル中ニ、

彼等怒リテ御殿山ノ遊場所ヲ奪フテ異国人ニ与ヘタ

リト云ヘリ、余謂ラク、人民ノ望ヲ傷ハサル様取扱

フ事ハ、日本政府ノ為メニモ横濱ノ異国人ノ為メニ

モ利益アル事ナルベシ、

日本ノ内、加州・信州・常陸等ノ地ノ人民怒リテ乱ヲ為ス事余側ニ聞ケリ、御殿山ハ

家光公之時人民之遊樂ノ地ト定メラレタリ、今何ノ故ヲ以テ人民ノ均シク受タル地ヲ奪フテ、異国人ニ賜ヒタル乎、大名方外国公使ノ一人ノ所存ヲ怒リ居

ルヲ以テ、御老中ノ心配ヲ生セリ、余此ヲ知ル、今ハ人民ノ外国公使ヲ惡ム事大名ト異ナラズ、若シ御老中ヨリ英国政府ニ対シテ、日本ノ使者ノ為ニハイ

(Park)

テバルク倫敦府ニアル華園ノ名ヲ借シ与フベシ、佛国政府ニ対シ

テハトイルレリース(Chateau)

巴里斯ニアル華園ノ名ヲ借シ与フベシト云

ハ、二国果シテ此ヲ許サンヤ否ヤ、彼レ必ス之ヲ許ザバル可シ、

英佛二国ノハイテバルク及ヒトイルレリースハ猶日本ノ御殿山アルカ如シ、故ニ余謂フニ、日本ノ政府今猶外国公使ニ対シ、御殿山ヲ借シ与フ可カラズト云ヒ、先方ヨリ夫レニ付テ言出セル事ハ、取用ヒサルベシ、日本政府ニテ此ノ如ク取行フトモ、異国ニテ如何トモ為ス可キ様ナカルベキヲ知レリ、此ノ如クナレハ日本政府權威強クナルベシ、其故ハ国内ニ

外国人ヲ置ケハ、日本ノ威勢次第ニ弱クナレハナリ、

外国人ハ日本ノ政律ヲ用ヒサレハ也、此ノ如クニ異人ヲ居ラシメタルヲ以テ、支那之カ為メニ弱クナレ

リ、異人ハ自国ノ法ヲ行ヒ、自国ノコンシユルノ下ニ住ルヲ以テ、罪人アレトモ日本政府ニテ自由ニ

〔采名〕今ニシテ云ハ治外法權

之ヲ罪スル事能ハズ、余謂ラク、異国商人ヲ江戸ニ

居ラシメ、公使ヲモ商人ト共ニ中川尻ノ如キ地ニ居ラシムルヲ好シトスベシ、今ハ公使江戸ニ住シ、其

行フ事如何ナル事ヲ知ル者ナシ、余ハ就裡一公使ヲ

(Voy)

思ヘトモ、御老中ノ考ヘハ此ト異ナリ、公使ト商人

ト離レ居ルヲ好ムカ故ニ其事行ヒ難シ、御老中ノ弱

ミハ、条約中ニ異国人自国ノ政律ニ由テ行フベシト云ヘル一条ニアリ、一旦結ヒタル条約ハ、二三年ノ

間ハ変革スル事能ハズ、日本ニテハ日本人英吉利・佛蘭西・亞米利加・魯西亞ニ居ル時、此ノ如ク為サ

ント言張ル外言フベキ事ナシ、英吉利・佛朗西・魯西亞ニテ此事ヲ日本ニ許サハ、他国ニモ亦許スベキ

道理ナルカ故ニ、必ズ許サルベシ、日本ニテ条約ヲ結フニハ帝家左ノ事ヲ知ルベカラズ、家康公ノ昔時

ニ在テハ、英明ニテ其法ニ由テ国家太平ト成レリ、

然レトモ今時勢昔時ニ異ニシテ、政府ニ運上ヲ取り、船ヲ造リ、大砲ヲ鑄ル人ヲ教練シテ他國ト優劣ヲ競ハサル事ヲ得ズ、

英國政府ノ費用ハ毎年二万トルラル、其數ハ日本ノ費用ト相違セリ、然レトモ日本ハ英ヨリ富饒ノ國也、日本ニテモ英ノ如ク棉布ヲ織ル為ニ機具ヲ用ヒハ、其織出ス所東方ノ諸國ニ充滿スベシ、余カ汝ニ書ヲ贈ルハ、余カ日本ヲ喜フ事一端ノミナラサレハ也、余カ云フ所ハ汝解ス事能ハザルベシ、汝ノ多福ニシテ且其官位昇進スルヲ聞クラ望ム、

汝ノ親信ノ友人……デキソン

箕作貞一郎謹記

三四 〔薩藩士道島正邦碑銘〕

即宗院ノ碑銘ハ略ス、此留ハ軸物ノ留ナリ、

薩藩士道島正邦碑銘

智道宗勇居士者薩藩士也、姓源氏道島、諱正邦、通称五郎兵衛、考正亮、妣吉井氏、其為人也沈毅果敢、臨事不レ動見、難不レ避、常以「正義」為「宗」、文久壬戌春奉「從久光公」在「京師錦邸」、先「是諸國浪士憤「夷狄驕梁

國体日赴「傾頽」、群党相引播「居乎」高攝間「襲討幕吏、而假重於我」公「物情騷然上下失色、

朝廷亦恐「啓」官武之震端「而害」大事、且不「欲」生「變於

輦轂下、我」公憂慮焉而、甚苦「措置、近」之則傲、遠

之則怨、縱「之、則變生、四顧遂為「天下之乱階」、於是

乎深謀熟慮使「人反復教諭、而綏」撫於大坂邸中、四月

十六日 公上「京抵」陽明殿、以「実奏」之事達

天聽、「朝廷賞」公忠誠、「賜」浪人鎮靜之

命、「公遣」某々「以」

勸懲諭「之、丁寧教示及」三次、巨魁者皆曰、「謹奉」命

敢不「負、然内兇狼自用矯」公之命「伝」党与、「且曰我

輩受「密意」賜「重器」今举「兵

勸懲之所向也、欺蒙百端以「道煽」搖之、「党与皆以為「実

慷慨憤激從「之、四月二十三日遂暴举事甚急速、有

此報「也、公從容定策、撰」擢正邦及鈴木重高・大山綱

良・江夏榮亨・森岡昌純・奈良原混・山口直大・上床

維綸・鈴木重流九人、授「之」以「討伐巨魁」之「命、時日已

懸「西山」正邦等唯諾各撰「裳單走到」伏見、初更索「得彼

徒「窃闕之、浪士數十人或挈」矛或腰糧軍裝既成、正邦

等從容唱「姓名」呼「出党領」伝「公之命、且示

歡意之重、義否論雖無所不盡、不肯服從、於是正邦知其機、不可回愾然決心、直呼「上意、以初刀討魁首、尋斃一人、尚進前刀闖遂戰歿矣、時年廿八歲也、其余列士戮殺反刃者、仍向余党備陳情、示公之意、余党初知為其所給、幡然悔悟從命、而狼腹者執自志不服、列士以義勇制之、一旦置之於錦邸中、而悔悟、從命者以特恩赦之、其狼腹不服者、歸其生國、或護送我國、至于此、京畿始解嚴矣、若微公、明斷諸士忠勇、則天下之事不知其遂如何也、以是

朝野頗稱揚其勇武、公亦以誠忠稱之、各賜感狀功祿、而以正邦独先衆就死深哀憐之、厚葬于洛陽東福寺内、即宗院重令建墓祭祀焉、正邦恒言士不忘在溝壑、吾何敢忘之、當以報國尽忠為己任矣、嗟夫如正邦可謂不食其言者哉、銘曰

凛々忠胆 節操維清

一時投命 長貽雄名

〔表紙〕

忠義公史料

文久二年自一月
至十月

〔扉に、忠義公史料・市来四郎編・文久二年〕
の記載あり

三六 久光公御参府準備

三六ノ一
御用箆笥三十棹

内

八棹

御行列之内対御鎧前へ

七棹

御召替馬沓籠跡へ為御持相成候、且残り十五棹ハ天
祐丸ヨリ被差越候、
(氣船ノ名)

右之通被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

二月

攝津喜久高

三五 茂久公二代リテ久光公御参府発表

此節

(攝津久光)

和泉様御出府付、守衛人数之面々御賄料之儀ハ、都テ

(九州・中国・東海邊ノ通也)

三道中御供方同様被成下候条申渡、可承向江モ可申渡

候、

但通馬賃ハ不被成候、

二月

攝津喜久高

三七 久光公御参府宿割

三七ノ一
小倉

内

八棹

御行列之内対御鎧前へ

七棹

御召替馬沓籠跡へ為御持相成候、且残り十五棹ハ天
祐丸ヨリ被差越候、
(氣船ノ名)

右之通被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

二月

攝津喜久高

三六ノ二(承前)

別紙之通被仰渡候、左候テ、東海道之儀ハ御行列内へ

三十棹為御持相成筈候、此段申越候、以上、

二月二十五日

谷川次郎兵衛
(久松)

江戸詰

御側御用人衆

三七 久光公御参府宿割

三七ノ一
小倉

二里半

内

海上一里

大里ヨリ

御渡海

下之關

但

御着翌日一日

御逗留

下之關ヨリ

御乗船

兵庫へ

御着船

但

御着船翌日一日

御逗留

兵庫御立

六里 御休無之

西之宮

五里 御休無之

大坂

右

和泉様御出府付、

御宿割等右之通被相替候旨被

仰出候条、可承向へ可申渡候、

正月

^{三七ノ二}

別紙之通被仰渡候間、此段申越候、以上、

戊正月晦日

江戸詰

御側御用人衆

三八 久光公二ノ丸御移転延日布告

和泉様御事、明二十一日二ノ丸へ御引遷之筈候処、御

造管向不相運候ニ付、来ル二十四日ニ被召延候条、此

旨可承向へ可致通達候、

二月二十日

三九 久光公二ノ丸へ御移転

二月二十四日已上刻、

国父公重富邸ヨリ二ノ丸へ御

攝津喜入
久高

〔久徳〕
大蔵
肆

引遷アラセラレタリ、御子様方モ同刻御曳越アリ、即
チ悦之助君初久封・真之助君初久封・芳之進君ノ御三方、
及ヒ成姫君・俊姫君ナリ、本日 太守公御始メ諸公子
又ハ御一門ノ人々登城御嘉慶ノ式行ハレ、其他大身分
及ビ諸士登城、太守公 国父公へ慶賀ノ式御本丸ニ
於テ執行セラレタリ、

編者曰、 照國公薨去 太守公御相続、御若齡御政
事御取馴レナキカ故、 齊興公御介助アラセラレシ
カドモ御老年ナルガ故、 国父公万般聞シ召サレ、
齊興公逝セラレシ後ハ、内外多難ノ世態ニ変遷シ、
殊更御苦心御介助アラセラレタリ、依テ幕府へモ御
介助ノ御届ニ及バレ、日々御登城アラセラレシト雖
トモ、 太守公ノ尊慮ハ二ノ丸へ御棲居、御尊崇・
御孝養ヲ竭クサル、ハ無論、御国政モ親シク聞シ召
サレンコトヲ懇願セラレシト雖トモ、固ク御謙遜御
肯諾アラセラレサルガ故、 太守公ハ大ニ憂悶セラ
レ、尚ホ数回御親シク御懇請、或ハ国老或ハ御膝辺
ノ輩ヲシテ、御心情又ハ時勢切迫ノ事情ヲ述ヘシメ
玉ヒシニ、漸クニシテ御肯諾アラセラレシトソ、国
老川上久封筑後・喜入攝津、御使ヲ以テ二ノ丸御引移ヲ

表向ニ被仰上タル始末ハ前編ニ記ス、依テ至急二ノ
丸御造営、本日御引遷リアリシカハ、 太守公ノ御
安堵ハ素ヨリ一般大ニ安心恭慶セリ、而シテ、以来
太守公日々二ノ丸へ御伺公、御孝道ヲ尽サレ、御政
事向万般御親密ニ御裁断施行セラル、ニ至レリ、
国父公ハ 齊興公御知政ノ時ヨリ政庁へ御出席、国
政ノ参与セラレシガ故庶事御通貫、茲ニ至リテ 太
守公ノ御幸ナルノミナラス、国老中ニ於テ殊更安心
事務ヲ執レリトソ、前記ノ如ク、二ノ丸へ御引遷ア
ラン事ヲ数回頻請セラレシト雖モ、固ク御謙讓アル
カ故、御国政御介助ノ云々幕府へ御届、而シテ重富
家ヲ又次郎殿へ御譲リ太守公御三弟、初メ敬四郎、太守公御相
而シテ後後改メ、 国父公ハ御実形ニ復セラレ国父公ハ齊
三子
ニシテ重富家ヲ相続セラレ、城中ヲ出テ、重富家へ入ラセラレタリ、茲
ヲ以テ御実形ニ復セラルトハ即チ臣列ヲ離レ、公令ニ復セラルト云フ
国父ト尊崇セラル、ハ 太守公ニ於テ御孝道ノ要
典、加之国政ノ上ニ於テ、当時内外多難燒眉ニ迫レ
ルカ故切ニ請願セラレ、文久元年四月十九日ヲ以テ
又次郎殿即チ重富家讓受ノ式執行セラレタリ此時又
改名、而シテ 国父公ハ同二十四日和泉ト御改名ア
ラセラレ、依然重富家ニ御座アリテ日々城中へ御出

向、国政聞シ召サレ御介助アラセラレタリ(此時、國父公ト尊稱スベキ旨、太守公御親書ヲ以テ布令セラレタリ、而シテ日々出城セラル、ニ、從駕ノ吏員重富邸ニ至リ、而シテ從駕スルコトナレリ、茲ヲ以テ重富家々來附從スルコトヲ得ス、又重富家) (旧邦秘録鈔)
ノ邸中ニ事務局ヲモ設立セラレタリ)

四〇 久光公御上京ノ概況

当時天下ノ形勢危殆切迫、幕府ハ暴威ヲ振ヒ逆政ヲ施シ、上

朝廷ヲ輕シ奉リ、下蒼生ヲ困メ、人心離反、治ヲ厭ヒ乱ヲ好ムノ人情ニ立チ至リシ故、 国父公ハ 照國公ノ遺志ヲ紹述セラレ、尊王ノ大義ヲ確定シ幕政ヲ釐革シ、賢才ヲ挙ケ佞吏ヲ黜ケ、富国強兵ノ道ヲ立テ外夷ノ輕侮ヲ挽回シ、皇威ヲ万国ニ輝カサンコトヲ建議セラレムト、御父子日夜心思ヲ勞セラレ、茲ニ至リテ断然御雄決、 国父公不日御出府或ハ臨機御上洛大ニ発揚セララル、ノ英意ナルカ故、先ツ国政ヲ整理シ、文ヲ治メ武ヲ張り、国ヲ富シ民政ヲ安ンジ、七百年來養成ノ御家風一層擴張セラレムトノ 尊慮ナリ、是ヨリシテ、国中上下一般頗ル感発興起シ、挺身尽忠ノ士輩出スルニ至レリ、

四一 久光公御上京警備人員 (江戸邸ニ於テ)

物主

種子島嘉次右衛門

兵粮玉葉方

郷田次右衛門

川崎四郎左衛門

貝ノ役

關田藏右衛門

太鼓役

松木孫太郎

物主

肥後五右衛門

小頭

米良矢八郎

寺師 善 真宗道旧名

貝役

川路正七郎

太鼓役

宇都岩太郎

右ハ出府人数之内、一備之内右通被仰付候、左候テ、
急麥之節ハ、御兵具所ヨリ相図之貝吹キ立候ハ、早速
同所へ相揃候様被仰付候、

二月 登島津
久包

物主

肥後五右衛門

使番

橋口善兵衛

旗預

岩山金之進

兵粮玉薬方

坂元喜右衛門

小頭

宇都三之丞

木藤 市助

右書、前ニ同シ、

二月 登島津
久包

右戦兵左ノ如シ、

川俣休大夫

町田莊次郎

田實六左衛門

三原 彦六

本原周右衛門

松永傳左衛門

北原直左衛門

山下 市藏

高江與右衛門

橋口正兵衛

石神喜右衛門

有馬戸右衛門

橋口 良助

内山恕兵衛

肱岡休左衛門

池田彦右衛門

川俣治兵衛

池田喜兵衛

高野瀬彦助

富満武兵衛

伊瀬地六郎

山崎平八郎
 齊藤幸之進
 平川民五郎
 四位林左衛門
 肥田木覺右衛門
 二川十郎左衛門
 篠原矢七郎
 猿渡權左衛門
 古川松兵衛
 指宿壯平太
 小田半五右衛門
 安藤孫右衛門
 上床筑兵衛
 小野喜藤次
 肥後織右衛門
 黒木新蔵
 岩崎右源太
 鹽田一三多
 和田助二
 中村東介

江口駒之丞
 橋口叶介
 松下孫兵衛
 田島嘉藤次
 橋口源七郎
 坂本中節

右書、前二同シ、

二月 登島津久島津

四二 西郷隆盛帰麿頼末(当時菊地源吾ト唱)

二月 日 発令、去ル安政六年ノ冬、大島へ蟄居ヲ命
 セラレタル菊地源吾又ハ大島三右衛門トモ云フ、田放免、至急
 帰麿スベキ旨親族ノ者へ達セラレ、而シテ迎ヒノ為メ
 官費飛舟ヲ立ラレタリ(迎ノ為メ吉井仁左衛門及実田、此ノ菊
 地ナル者ハ、安政六年九月京師清水寺ノ僧月照(一名忍
窓トモ云)ト僭ニ、鹿兒島湾龍ヶ水村ノ沖ニ投海ノ後、大島
 ニ蟄居ヲ命セラレタリ(投海ノ頼末ハ安政、当時井伊大老カ
六年ノ記ニ詳載ス)
 逆政ヲ施シ、外夷ト親密シ、
 天裁ヲ仰カス恣ニ開港条約ヲ結ビ(仮条約ト云フ)、或ハ宮堂上
 方、或ハ正義ノ諸侯、或ハ憂国ノ人士ヲ幽囚シ、或ハ

斬流ノ刑ニ処シタルノ際、月照ナル者ハ、其禍ヲ避ケンカ為メ九州ヘ下リ、遂ニ鹿兒島ニ来リ西郷ニ頼レリ、西郷ハ其事情或ハ 照國公ノ密命ヲ奉シ、

朝廷其他宮堂上方ノ間ニ周旋尽方シタル顛末ヲ、国老新納駿河ニ就テ具申シ、宜ク恩惠ノ処分アランコトヲ懇願セシニ、新納ハ幕府ノ威權ニ恐怖シ、東目筋ニ向テ去ラシムベキ旨ヲ西郷ニ密諭シタリ、西郷密諭ヲ聞キ奈何ントモスルニ途ナク、終ニ借ニ投海ノ慘状ニ及ヒタリ、

編者曰ク、本藩ニ於テ從來一ノ旧慣法アリ、他藩ノ者国境ニ入り、犯則或ハ障碍アル者ト認ムルトキハ、東境筋即チ高岡郷ニ向テ護送シ去ラシムルヲ長送りト唱ヘ、再ヒ封境ニ入ルヲ得サラシムルノ処分ヲナセリ、是レニ因テ、西郷ハ密諭ノ趣ヲ聞テ已ムヲ得サルニ迫リ、借ニ海ニ投ジタリト、然ルニ西郷ハ舟人ニ助ケラレ蘇活シ、月照ハ惜ムベシ鬼籍ニ遷レリ、然シテ後チ、月照ト共ニ海没セシ旨ヲ以テ幕府ニ届ケ出タルガ故、姓名ヲ變シ大島ニ蟄居潜伏セシメラレタリ、然ルニ今ヤ召還ノ命下ルニ至レルハ、 国父公御上洛、天下ノ為メ竭サル、ノ深図アラセラル

、ノ際、從駕ヲモ命セラル、為メナリト云フ、此ノ如ク發令セラレシヲ、有志ノ輩伝聞シ、歎喜ノ眉ヲ開キタリト云フ、當時天下ノ形勢概略ヲ記サンニ、安政五年(戊午三月六日)ノ夏頃ヨリ、井伊大老(貞勲)ハ將軍ノ若齡ナルヲ挾ミ暴政逆行、上

天朝ヲ尊重セス、下蒼生ヲ苦メ、恣ニ外国ト条約ヲ結び、剩ヘ恐多クモ

御讓位ヲ促シ奉ンコトヲモ謀リ、或ハ正義ノ宮堂上方ヲ幽囚シ、或ハ有志ノ諸侯、或ハ慷慨忠奮ノ諸藩士等ヲ流斬ノ刑ニ処シタル等横暴ヲ極メ、尚ホ党与連類ヲ搜索スルコト甚タ嚴ナリ、故ニ一般恟々トシテ声ヲ吞ミ縮潜恐懼ヲ懷キタルノ際、新納駿河ハ專断西郷ニ諭スニ、高岡筋ニ向テ誘ヒ去ラシムルノ旨ヲ以テセリト云フ、西郷ハ其諭達ノ嚴ナル進退維レ谷リ、遂ニ借ニ投海ニ決意シタル者ナリト(諭達者ハ、命スル旨ヲ以テ、政庁ノ筆吏福永直之丞、御裁許掛梁樹、源之進、土師吉兵衛ナル者、西郷ニ諭達シタリト云フ)、而シテ西郷ハ辛フシテ舟人ノ為ニ助ケラレ蘇活シ、後チ大島ニ蟄居セシメラレタリ、而シテ追捕ノ幕吏ハ、月照及ビ西郷カ屍ヲ検査センモ計リ難シト慮リ、西郷ガ墓ヲモ築カシメタリ(其墓今西郷カ墓地ニ存ス、詳ナ、ルハ月照投海ノ條ニ記ス)、初メ月照

入国セシ趣ヲ 齊興公聞セ玉ヒ、種子島ニ潜居セシムベシト寛大至仁ノ内命ヲ下サレタリ、然ルヲ新納ハ後患アランコトヲ恐レ、專断シテ西郷ニ諭ス旨アリシ故、遂ニ投海溺歿ノ惨状ニ至リシトナム(齊興公御内命ノ趣ハ投海ノ事ニ記ス)、此事他日發露シ、有志ノ輩嘆惜憤慨、新納カ所為ヲ惡ミ、齊興公ノ勇断仁慈ヲ感称セシコトナリキ(事實ノ詳ナルハ隆盛伝・実歴史伝・黒田清綱談話記・内田政風談話記・伊集院兼寛談話記・石室秘稿等ニ参看)

四三 茂久公擊劍家ノ輩ヘ訓諭書

二月 日 太守公御親書ヲ以、擊劍師範家ヘ達セラレタル御訓示書、左ノ如シ、

口達覚

武芸ヲ励ミ筋骨ヲナラシ候事ハ当世之急務上当然ニ候、亦君臣父子ノ倫理ニ暗ク、礼義廉恥之道ニ疎ク、義ノ大小軽重、道ノ正邪曲直モ弁セスシテハ却テ忠孝之大義ヲ過リ、不思モ禽獸之域ニ陥リ候事古今其例不少、別テ遺憾之至ニ候、自ラ諸師範之者共ハ文武偏廢不致様、子弟ヘ致教育管ニハ候得共、猶亦此

旨相守、其身之省察ハ勿論、精々子弟ヲ教導致シ、文武之本体ヲ不失、士道ヲ不汚様可心掛候、且各流儀ヲ立候ニ付テハ、自ラ秘伝秘術銘々有之、輕々敷難漏儀ハ当然之事候得共、甚敷ハ流派ニナツミ、己ヲ進メ他ヲ退ケ、寇讐ノ如ク心得違候事近古以来之弊風ニテ、不可然事候条、国中之士民ハ互ニ兄弟骨肉之情義ヲ存シ、礼讓ヲ以テ相交リ、私ヲ捨講習練磨致シ、国家之实用ニ相立候様有之度存候事、

四四 橋口柴山有馬田中ニ与ル書

一筆申上仕候、(真木和泉ヲ云)扱牧君之義兼テ御存知之通之人物ニテ、當時之世態柄格別之人ニ御座候処、筑藩ニテ少々故障有之一身之進退危殆之由、(兼家參照)其義ハ自ラ御当人ヨリ御聞取可被下候、右ニ付入薩被致候ニ付テハ、(弟乙)鳩鳥入懷之情義ハ勿論、何分ニモ余所ニ難被召置訳合ニ御座候ニ付、別封坂本君ヘモ御頼申上置候通、大業一発迄ノ間何レヘ成共御潜匿之処御周旋被成下度、此義ハ難題之義ニテ、上ヘ付テ相計候得ハ反テ六ヶ敷被思召候ハ、坂本先生ヨリ御相談ニテ、(無也)興西寺和尚隱居之地ヘ御潜匿ハ出来申間敷哉、若又小松様ヨリ御内談相成候テ、

表向都合之出来候塩梅ニ御座候得ハ、至テ仕合之事ニ
御座候、何様共諸彦御賢慮ヲ以宜敷御取計被下度奉願
上候、已上、

二月

橋口 壯介 (録三)
柴山 愛次郎 (道隆)

田中 謙助様 (盛明)
有馬 新七様 (正義)

四五 久光公御上京随行人名

隊長

島津 弾正

村田源右衛門

伍長

本田権右衛門

長野九八郎

柚木崎六郎

原 六右衛門

石塚為兵衛

新穂仁左衛門

是枝 仲藏

兵士

鮫島新兵衛

篠原伊藤次

有馬彌兵衛

有馬正右衛門

宇都 良介

二見源兵衛

海老原龍右衛門

石神満右衛門

田中郷右衛門

徳丸 宇介

田尻仲左衛門

西 平一

春田八右衛門

杉尾宗左衛門

長野四郎太

二之宮仁壯太

房村 雲章

阿多 静謙

山口平右衛門

楠元六之丞
宮路正兵衛
江口善次郎
池田周介
上野武左衛門
古城 壯太
松下清右衛門
是枝次右衛門
田實平右衛門
春成仲左衛門
吉峰惣右衛門
鮫島加次右衛門
岩元作左衛門
小田原武左衛門
本田卯右衛門
指宿仲右衛門
有馬 文蔵
有馬量右衛門
面高利兵衛
佐藤 休蔵

馬渡隆次郎
山下矢之助
有馬雄之進
是枝 吉蔵
井尻甚五左衛門
宇都正太郎
重信良右衛門
安楽才右衛門
黒川萬右衛門
木佐貫十五郎
上原 直助
實吉助次郎
村田十左衛門
松崎十次郎

以上、御先備警衛隊長島津・村田ヲ除クノ外、悉ナ諸郷ノ撰兵ナリ、

四六 長州侯上書写(江戸邸報告)

近年外国ヨリ種々難題ノ申立有之様相窺、且内地不慮ノ憂モ出来仕、内外共御煩慮ノ御時節ニモ奉恐察候、

勿論 廟堂ノ御籌略ハ外面ヨリ可伺計様モ無之、御歴々ノ御評議御遺策可有之トハ不奉考、彼是以事ケ間敷申立テハ越俎ノ御譴責奉恐入候得共、當時勢

皇國ノ御策辱ニ相拘リ候儀ニ可有之哉ト奉考候テノ区々ノ鄙言日夜難忘、不得止無限ノ世論ヘモ心ヲ留、迂僻ノ儀益々相舍居候ニ付、不顧憚御内々中立候、尤世上ノ議論ヲ取り、御政体ニモ相拘候儀申立候テハ猶更恐懼ノ至御座候得共、右鄙誠ノ処被聞召分不惠御取計被成下候様奉願候、右中上度趣ハ、先年以来度々申上候通、待夷ノ御良策ハ 公武御一和、

叔慮御遵奉ト可申ト数年相舍候鄙見ニ御座候処、過ル午年以来 公武ノ御間御議論齟齬ノ儀有之様ニ世上ニヲヒテ奉伺計、種々御配慮ニモ相成候哉ト奉窺候、窃ニ事ノ成否ヲ愚案仕見候処、先年外国ヘ和交御差許条約御取替シ相成候哉ト、元ヨリ無御持御場合有之候（持之）テノ儀ニ候得共、癸丑・甲寅以来奮激ノ人氣一旦屈抽仕偷安ノ人情一日ノ無事ヲ貪リ、終ニ一統退縮ノ世風ニ罷成候、 御国体更張ノ期無之様相成可申哉ト、氣節ヲ負ヒ慨志ヲ抱ク者ハ外夷ノ威力ニ圧レ、安ヲ偷ミ戰ヲ忌ム俗情ヨリ斯様相成候儀ト存詰、猥ニ 公儀ノ

御所置ヲ如何敷批判仕、

叔慮ノ旨ハ鎖國ノ御旧規ヲ 御確守被遊候様相唱、破約戦争ノ説ヲ主張仕、壯年血氣ノ者ヘ憤言激行ヲモ醸成シ、且又彼我ノ形勢ヲ考、彼ノ巧利技術ヲ以申候者共ハ開國ノ説ヲ主張仕、猥ニ彼ヲ誇耀シ我固有ノ正氣ヲ拆キ、商売貪金ノ風ニ染漬シ、議恟々土崩瓦解ノ勢共可申哉、天下ノ勢ヒ合ヘハ強ク離レハ弱シ、此度離解散ノ人心ヲ以一旦有之明、黠夷強虜ニ御当リ被成候由ハ、何共御氣遣ノ儀ト奉存候、然ハ右鎖國ト申候ハ計夷ノ大体ニテ關係重ク候得ハ、其根本ヨリ窺候得ハ是等ハ枝葉ノ説ト可申、 公武ノ御議論草野ノ可何知事ニハ無之候得共、斯ク枝葉ノ是非ヲ以テ、御違却ノ儀出来仕候節ハ有之間敷ト奉存候、其段ハ能可守シテ是ヲ攻メ、能攻ヘクシテ守ルハ兵家ノ常典、鎖ルコト能ハサレバ開クベカラス、不能開ハ鎖スベカラス、 御国体不相立、彼力凌辱輕侮ヲ受候テハ鎖モ真ノ鎖ニアラス、開モ真ノ開ニ無之、然ハ開鎖ノ実ハ 御国体ノ上ニ可有之、 御国体相立候得ハ開鎖和義ハ時ノ宜ニ随ヒ守珠膠柱ノ儀ニ有之間敷、然ニ亦 御国体被相立候基本ト申候得ハ、大論大義ヲ明カニシテ天下ノ議論純一、

人心和協ノ御所置可有之哉、大論議紛々相起候本意ヲ
 熟考仕候テモ、公武ノ御間純然 御合体ニテ、御
 国体相立候外有之間敷、種々ノ御手煩ヲモ差起候テハ、
 其末弊ニテ可有御座候間、其源ヲ塞キ其流レヲ御治
 メ被成候ハ、御鎮定強テ御手間被為取候儀ハ有之
 間敷、往昔草昧ノ世ト違ヒ、当御治世以來厚キ御世話ヲ
 以為教大ニ開ケ、倫理世ニ明カニシテ君臣ノ道ヲ可崇
 事ハ、三尺ノ童子モ口ニ藉候様相成候ニ付、是迄迎モ
 聊無疎略御事ニハ御座候得共、天下ノ大経ヲ被為立候
 事ハ、万々御厚重ニ被為在度御事ニ付、時勢ニアタリ
 候テハ、今一際天朝ヲ御崇奉ノ御取扱振世上相顯レ候
 ハ、天下ノ人心感服仕、右様ノ儀御鎮静容易ニ相整、
 御国体ノ基本モ相立可申哉、右基本被為立候上ハ、是
 迄開湊和理ヲ被差許候ハ、乍思末枝葉ノ御所置ニモ
 可有之哉ニ付、速ニ開国ノ御大規被相立、御国体儼然
 ト相立候様御国論被相定度御事ト奉存候、左候テハ御
 手ヲ可被下様ハ武備御張興ニテ、航海ノ術広ク御開キ、
 人々心胆ヲ練リ器械発明スル道ニ向ヒ、諸藩ノ情実熟
 知ノ上ハ不足養処ヲモ知り、我カ可恃良策モ相立可申、
 御非常ノ時ニ当リ中興ノ御大業ヲ被為立度御事ニ候得

共、人心ノ折合方深ク御案被為在候由、過ル己年御沙
 汰ノ趣モ有之、制度改テ航海ノ術御開等ノ儀ハ、疾ニ
 御評決可被為在、今更当否利害等不能申上儀可有之、
 其後追々御沙汰ノ趣奉候候テモ、乍憚 御趣意筋奉深
 察候、然処今以御国内一統耳目一新仕候様御沙汰振り
 モ無之テハ、何トカ御深謀ニテ有之事ニ可有御座、其
 段モ可奉伺筋ニ無之候得ハ、宇内ノ形勢ハ年序ヲ追テ
 相開ケ候ニ付、今日ノ如ク御国論御変革ノ機会ニ臨候
 テモ自然ノ勢ニ可有之、若旧習ニ泥ミ漸ク時勢押移サ
 レ、無抛御変革ニ相成候テハ御手後レニ相成、都テ人
 心ノ折合方ニモ相掛リ可申哉ト深奉恐入候儀ニ付、右
 御国論速ニ御決定ニ相成候様相願候儀ニ御座候、右ノ
 通 御合体ノ御取扱顯然ト相成リ、天下ノ人心奉感服
 御国体儼然ノ
 御国論被召立候ハ、定テ
 叡感モ可被為在、素ヨリ開鎖ノ体へ御泥ミ被為在候御
 儀ハ有之間敷ニ付、何卒
 叡慮ヨリ被為起、右国号ノ旨
 勅諭ヲ以被仰出、右ヲ 御遵奉ノ旨
 台命ヲ以列藩へ御沙汰ニ相成候ハ、条理判然人心弥

感服仕、退縮ノ氣一旦愈張ニ相改リ、偷安ノ陋習神州
億兆ノ人心一和一凶ノ正相成、前行種々ノ物議モ氷解
仕リ、毫モ内顧ノ御患ナク、御国威凜然五大洲ハ相振
ヒ候御大業成就可仕哉ト、迂僻ノ私見ニ御座候、右ハ
始ヨリ御廟議ノ上ニオイテ、大海ノ涓滴ニモ相成度心
懸ニモ無之候得共、数代無限御寵命ヲ奉戴、御恩沢身
ニ溢レ居候ニ付、兼々報候心得ニ罷在、不凶時勢ニ感
發仕リ不顧潜妄申立候ハ、只々食片脱滴ノ味進献仕、
思召迎ヘノ鄙誠不惡御亮察被成下、不都合ノ儀モ御座
候ハ、御聞捨被成下度重疊奉願候、以上、

二月

毛利慶頼、長州藩士
松平大膳大夫

四七 兵庫大坂等ニ浪士屯集動靜視察及警戒

(京都邸報告)

頃日道路之風説ヲ承候処、西国筋之浪人共多人数兵庫・
大坂辺江集リ、彼是不容易暴論ヲ唱候趣ニ有之、尤支
配国外之儀ニ付、巨細之儀ハ難相訳候得共、全ク虚説
而已モ有之間敷、就テハ官家之方ニ諸藩士等御直談之
儀ハ、兼テ御規則モ有之候事御承知之儀トハ存候得共、
万^(戊午ノ癡獄ヲ云)一御行違之廉モ出来、自然去ル午年八月八日之覆轍

ヲ踏候様之儀有之候テハ、以之外之御次第ニ可至ト、
深御案思申上不得堪苦心内ニ申上候、
既ニ此度格別之御縁組モ被為在、

公武之御中御一和之上之御一和ニ被為在候処、只今聊
ニテモ御異論之筋相生候テハ、実以公武之御為不御宜
之儀ハ勿論、東西諸臣ニ有之候テモ深恐入奉候事ニ
御座候、必々卒尔ニ御処置無之様仕度奉存候、此度浮
浪之輩暴民之説ヲ唱候由ニ候得共、奉対

天朝動干戈候様之儀ハ、普天之下率土之浜、如何様卑
賤之者トイヘドモ、人心之固有決テ有之間敷儀ニ御座
候間、必々御警動被遊間敷奉存候、乍併反逆野心之
徒有之、万々一於

王城ノ地動干戈、惱

宸襟候者於有之ハ、私所司代役相動候限りハ、本文不知一國

之力ヲ尽シ候ハ勿論、諸家御驚^{本文不知、觀之}之者共ヲ指揮イタ
シ誅伐可仕候間、

御安心被遊、必々御輕易之御取計無之様仕度奉存候、
是全

公武之御為尽衷候儀ニ御座候、右之段決テ表立申上候
儀ニテハ無御座候得共、全ク御為筋ヲ存上、御両役方

限り内々申上置候儀ニ御座候事、

二月

四八 朝廷御沙汰書 (薩州ト心ヲ合セ云々)

先達テ

勅使御差向ニ付、被

仰出候

勅諭之御旨御請申上、就テハ右

叡念弥貫徹候様周旋之儀猶又被仰聞、旁早速東下尽力

可仕ニ付、

勅使江モ御窺可申上候得共、其内於爰許左之廉々御窺

仕置御儀ニ付、乍御手数一々御内答被仰聞被下候様奉

願候、

三事之一ハ群議之所帰ニ随ヒト被仰出候ニ付、(執力)執ヲ御

奉行仕候様被相決候哉ハ不相分候処、於江府家来之者

勅使江御窺仕候処、第三条ヲ被成御主張、名実相叶候

迄御見込相立候ハ、越前々中将御召登之御沙汰被成

置、可被引御手下被仰聞候、左候得ハ薩州丹精無疎事

ニ付、其後モ追々御運ヒ付可申候得共、未被引御手候

程ニハ御見込被為付間敷哉ニ付、早速罷下薩州ト同心

一戮力候テ

勅使ヲ御補贊仕度奉存候、

御付札

書面之通薩州ト同心合力ニテ、猶

勅使ヲ補贊尽力有之候様

右之通ニ相考居候処、五月十三日

勅諭御渡之節第一条御奉行相成候得ハ、將軍家上洛ハ

当秋来春トカ無延引、一日モ早ク御急候様周旋之儀御

依頼之御旨、中山殿ヨリ浦鞆(元鞆)負江被仰聞候段、於江府

奉承知候付、

朝議第一条ヲ御奉行被仰付候御内決ニモ可被在哉ト其

節奉恐察候処、其後前段之通

勅使被仰聞候ニ付、第三条ヲ御主張被成候旨承知仕候、

然処、第一条ハ前以建白ニオヨビ候儀モ有之段ニ、御

沙汰モ相成候事ニ付、今一層言ヲ尽シ、幕府ニオヒテ

尊攘之誠心相顕候様仕度鄙志ニモ候得ハ、純一ニ第三

条ヲ被成御主張候ニ付テハ、其段ヲ差扣可申儀ト奉存

候、尤三事之御条書ニ就テハ、乍恐誠ニ鄙考ヲモ申上

度、元来三事ト被

仰出候得共、其実ハ二事ニ帰着可仕、將軍家モ一橋卿

ト御同体ニ被為成、列侯モ越前々中將ト一心ニ相成候上ナラテハ、上洛

廷議之御盛挙被為在候共、其所詮有之間敷、猶又蛮夷之患難ヲ攘ヒ義臣之帰向ニ從ヒ候ハ、即チ戎虜之慢ヲ不受、衆人之望ニ協フト同一致之事ニ付、真正実着ニ御手ヲ被下候得ハ、右二事ハ一事ニ帰着仕候様相考申候、左御座候得ハ、今一層言ヲ尽候儀差控候ニ及ヒ申間敷哉、委細之御様子奉窺候、

御附札

五月上中旬之形勢ニテハ、大樹公上洛輕易ニ御請無心元、自然

勅命通上洛御請ニ相成候テモ、只々御請計ニテ期限不相定候テハ無詮候間、御請相成候上ハ不遲滯上洛相成候様周旋之儀申入、

勅旨江モ其旨被仰含置候、然処

勅使着府無之内、彼ヨリ上洛之旨言上有之候、元来

勅使発足頃ニ到候テ、段々之事情深ク被廻

叙慮候処、先一橋(徳川慶喜)・越前々(松平慶丞)中將被採用候条、当时之間

專要ニ付、右ヲ主トシ被及御沙汰候、尤御請之儀上ハ、

越前今秋可有上京儀等ヲモ

勅使江被仰付事ニ候、

第二条ハ御別度ニ涉リ候ニ付、

叙慮之御旨趣

朝議之御次第巨細ニ不奉伺候テハ、別テ鄙考モ難仕候ニ付、御序ヲ以テ被仰聞被下候様奉希候、

御附札

第三条・第一条追々遵奉之上ハ、第二ケ条御見合

前段之通申上候得ハ、三事共一同奉行之様相当リ、甚以怖多ク御座候得共、重大事件ニ付、何モ

御深衷御密議之程ヲ得モ不奉承知テハ、周旋モ行届不申事ト奉存候ニ付、不顧失敬申上試候次第ニ御座候、

元来其一奉行ト被

仰出候モ、三事共当今之御国勢執(執力)モ不可欠段ハ、御定

案モ可被為在候得共、凡事ヲ行フニハ順序有之、如何程之佳策良別ニテモ、一時ニ全ク挙リ候様被

仰出候テモ、還テ御手続出来、

叙慮難貫儀モ可有之哉トノ御遠察ヲ以、先其一ヲ撰ビ

奉行候様、被

仰出タルニテ可有之哉ト奉存候、右ニ付、カラ料り心ヲ尽シ奉行候目途相立候ハ、前段之通第一・第三ヲ

一事ト相心得周旋仕候テハ、如何可有御座哉、左候テ
第二条ハ追テ委細之御様子被

仰聞候上、周旋可仕ト奉存候、

御付札

尋問之通、第一・第三ヲ一事ト被相心得、周旋有之候
テ可然候、第三条一橋(將軍職後見力)職後見・越前政事総裁職等之
儀、今七月一日御請ニ相成、其後各承服之旨言上有之
候、然ル上ハ事実速ニ行ハレ候儀第一ニ被

思食候、於関東島津段々周旋候得共、尚又大膳大夫殿
昨年以來自大樹家モ被依頼候儀故、於関東程能調和

叡慮徹底候様被抽丹誠候様、

壬戌七月二十日中山殿江書取差出置候処、同二十三日

御札札相成被差下候、

四九 文久二年四月二十三日浪士発動ノ形勢京

都町奉行へ届書

兼テ御届申上候通、浪人体ノ者所々寄集候ニ付、為取
鎮嶋津和泉在京滞留罷在候処、大坂表ニ滞留仕居候浪
人ノ内三十人計致出奔候間、何時如何ノ義モ難計候ニ
付、御心得迄此段御届申上候、以上、

四月二十三日

松平修理大夫内

横田鹿一郎

五〇 文久二年四月二十三日浪士鎮撫事件京都

町奉行へ届書

先刻御届申上候浪人ノ内、頭立候者捕押取鎮候ニ付、
先別条ハ有御座間敷ト奉存候、併浪人ノ義駢トモ難申
上候、御用意ノ方可然哉ニ奉存候、此段申上置候、以
上、

四月二十三日

松平修理大夫内

横田鹿一郎

五一 暴徒鎮撫使ノ輩ヲ賞ス

暴徒鎮撫ヲ命セラレタル奈良・大山・森岡・江夏・山
(直秀) (正邦) (重高) (重徳) (維徳)
口・道島・鈴木父子及ヒ上床九名へ左ノ御感状ヲ下サ
レタリ、

今度、於伏見抛身命無比類働誠忠之程令感悦候、仍
テ切米八石宛行候条、尚可抽精勤者也、

文久二年壬戌四月二十三日

久光御判

奈良原喜八郎殿繁

右各通ヲ以テ下サレタリ(同文ナルカ故略ス)、又永田佐一郎ハ從

駕警衛人數ノ仕長役ナリシカ、暴徒等上伏セントスル

ノ際、我カ隊中其他ノ暴徒ニ向テ反復説諭セント雖モ

承服セス、発動ニ及ヒシカバ、職任ヲ尽ス事能ハサリ

シ謝書ヲ残シ割腹死シタリ、仍テ左ノ御感状ヲ下サレ

タリ、

諸浪人等鎮撫之儀厚致沙汰趣有之候処、投身命申論

精忠之程令感悦候、仍切米拾石宛行候条尚可抽精勤

者也、

文久二年壬戌四月二十三日

久光御判

永田佐一郎殿

如此永田迄十名ノ人々へ、各通ヲ以御感状ヲ賜ヒ、各

榮譽ヲ顕シタリ、

永田カ遺髪ハ五月九日親族へ引キ渡サレ、葬祭料金五

十兩ヲ賜ヒ同夜葬儀ヲ執行セシトソ、同人カ始末ハ聞

ク人毎ニ感称セサルハナカリキ、

五二 寺田屋闘争ノ前頃

五二ノ一

尚々差過為ル義ニ御座候得共、機会ヲ御見合御所御

奉護專一奉存候、

先刻高崎(正風)左太郎急ニ差立、亡命人數取押等之儀申上置

候、然処同志合戦相成可申、イツレ其道ヨリ別ニ致方

無之考ニ御座候処、猶又小河江(弥右衛門)篤ト引合、件々承候処、

最早長州ト合体、今夜一挙賦ニ御座候、右様合体之上

ニ就テハ、此上御取押相成候儀不宜、追付下拙杯モ駈

登可申候得共、此旨早々御掛合申越候、小河人數丈ハ

御所守衛之賦ニテ未出舟無之、泉公ニ就テ命ヲ待候

段承申候、何事モ下拙罷登候迄ハ御取押之義最早却テ

不宜候、以上、

四月二十三日

(伊地知貞繁旧名)

堀仲左衛門様

中山仲左衛門様

大久保正助様

(實善)

(利通)

(海江田)

奈良原喜八郎殿(清)

海江田武次(信義)

五二ノ二

今春御発駕三月十日ノ前頃ヨリ、四月末寺田屋ノ事四月二十

三日夜

六日

(海江田・奈良原書翰 大久保利謙氏所蔵にて校訂)

アルノ間ハ、咸人疑懼ヲ懷キ世ノ形勢ヲ窺ヒ、從テ巷
說紛紜タリシカ、

勅使ニ御差副関東へ御下向御尽力アラセラレ、或ハ幕
府ニ於テ

勅諭遵奉・大政改革・正邪區別ノ処分奉行セントスル
ニ至リ、異説モ漸ク熄ミタリシニ、茲ニ至リテハ殊更
春來ノ説ニ反シ、偏ニ 国父公御尽力ノ一ヲ以テ

朝威遂日耀キ、時世至当ノ改革ノ基ヲ開カレタルハ、
照國公薨去以來積年ノ御苦慮茲ニ顕レタリト感佩スル

ニ変シタリ、又畿内近国ハ素ヨリ全国一般、仰望
御名声赫奕タリ、故ニ御国中ハ貴賤拳テ仰慕シ、今迄
誹謗セシ輩ハ畏縮声ヲ吞ムニ至レリ、

五三 大久保利通日記抄 (寺田屋事件ノ事実)

四月二十三日

今日四時出勤、八ツヨリ退出、八ツ後吉井友吏(吉井友吏)同道、知

恩院見物イタシ快々堂(金々堂)へ立寄茶菓タベ、日入前罷帰、

一 今日変事到来、高崎佐太郎子入來ノ由故直ニ出殿、

訊ハ大坂へ滞留ノ浪人並ニ御国江戸亡命ノ人数、守
衛方ノ人数三四十人申合、所司代へ切入ノ企ニテ、

今朝大坂出帆イタシ、右注進トシテ高子駆着ラレ候、
則 上意打ニイタシ候へトノ事ニテ、左ノ人数伏見
ヲサシテ被差出候、

鈴木勇(重高)右衛門

大山格(綱良)之介

奈良原喜八郎

道島五郎(正邦)兵衛

江夏仲左衛門(榮七)

山口金之進(昌純)

森岡善助(善助)

上床源助(維總)

右打手ニテ候、直様出立日入前、

一九ツ時分ニテモ候哉、山口金之進重創ヲ蒙リナカラ

駆歸リ、只今有馬新七(正壽)・田中謙助(謙助)・柴山愛次郎(密助)・森

山新五左衛門(永治)・橋口壮介(三)・橋口傳藏(兼徳)・弟子丸龍助等

都テ打スマシ候段演説、則形行遂言上候、別テ御

満足ニテ候、

一 山口申ニハ、右人数ハ切伏セ候得共、跡浪人且御国
人数取鎮トシテ喜八郎折角相働候得共、承知候体無
覚東候ニ付、早々諭解ノタメ御差越相成度トノ事故、

其段モ申上候処、小生奈良原喜左衛門・海江田武次・

吉井中助同道ニテ差越候様奉承知候、則差急候処、

中途ニテ喜八郎子ナドへ行逢、モフハ跡サシ支無之、

一同安心相成候トノ事ニテ候、尤スベテ同道ニテ参

リ候、

一其場ノ次第ハ初打手一列伏見へ着、則彼等挙動相伺

候処、京橋近辺茶屋(寺田屋)へ上陸、一同既ニ打立ノ用意ノ

由候間注進有之、打手一列勇ミ進ンテ差越、有馬新

七・田中謙助・橋口傳藏・柴山愛次郎呼出シ、二階

ヨリ下リ、上意ノ趣申聞自殺相進メ候処、中々承知

ノ体無之候ニ付、上意ト呼懸、先太刀道島相始候由、

夫ヨリ一同拔連及争戦終ニ四人ヲ切伏セ、続テ弟子

丸龍助・森山新五左衛門・西田直五郎(正甚)…等走付拔

懸リ候ニ付、尽ク切伏セ候、

一右ノ外残り人数且浪人ノ処、全ク奈良原喜八郎神妙

ノ働ヲ以テ取鎮候、各二階へ罷居候ニ付、刀ヲ投捨

大肌抜ニテ拔身持タルナカラ立フサカリ、決テ御騒

被成候事ニ無之、次第ハケ様ノノ訳候間、静リ被

成候様詳細申含候処、何レモ必死ヲ約シタル者共ニ

候得共、奈良原終ニ屈服セシメ候次第感入ニ堪ヘス

候(柴山景綱履歴参照、事実ヲ悉セリ)

一右ニ組シ候人数左ノ通

大山 彌助(快心)
名、殿

是枝 萬助

柴山龍五郎(清甚)
景綱 旧名

吉田清右衛門

林 正之進

深見 休藏

有馬 休八

岩元 勇助

谷元兵右衛門

岸良三之丞

橋口吉之進

篠原冬一郎(重俊)
因幹 旧名

吉原彌二郎

三島彌兵衛(通稱)
旧名

西郷 慎吾(従道)
旧名

河野四郎右衛門

森 真兵衛(兼寛)

。町田六郎左衛門

一浪人々数左之通
右丸屋ノ人数、江戸ヨリ亡命ノ人数ニテ候、外ハ守衛方ニテ候、

。伊集院直右衛門〔舊名〕

。永山萬兵衛〔万藏〕

木藤 市介

坂元彦右衛門

右丸屋ノ人数、江戸ヨリ亡命ノ人数ニテ候、外ハ守衛方ニテ候、

田中河内介〔縁助〕

青木 頼母

中村 主計

右京都

海賀 宮門〔直孝〕

右秋月

真木和泉守〔保臣〕

同 菊四郎〔葵〕

酒井傳次郎〔重藏〕

竊田 陶司〔道徳〕

原 道太〔肩雄〕

荒卷平太郎

右筑後久留米

右大坂ヨリ暴発ノ人数

古賀 管二〔幸雄〕

中垣健太郎〔信勝〕

吉武助左衛門〔祐利〕

淵上 謙三〔正寛〕

宮地 誼藏〔正寛〕

右土州

富田猛十郎〔通信〕

池上 隼助〔軍之助〕

右佐土原

河内介倅〔嘉猷〕

田中左馬介〔嘉猷〕

同人甥

千葉郁太郎〔徳胤〕

土州

重松緑太郎

僕一名

右追テ参候人数

一山口一左右ニテ何分跡取押ノ儀六カシク候ニ付、誰ゾ差越鎮撫イタシ可然トノ事ニテ、其段形行細々及

言上候処、早速奈良原・海江田同道小生へ差越候様
被仰付、直様駈付候処、中途ニテ右人数へ行逢ニテ、
尤喜八郎ヨリ細々形行承候、則亦出殿細々申上候処、
先ツ御長屋へ召置候様被仰付候、依テ七番御長屋へ
(錦小路邸
ノ長屋)
被召置候、

一 右同意一味ノ御国守衛方人数、江戸亡命人数一様ニ
被召置候得共、別御長屋へ被移候、

一 今夕終夜大混雑、夜明け候、

一 即晚、右ノ人数御切米拾石御感状被下候(前記ノ如ク)
(鎮撫使ノ人々)
(大久保日記(東京大学所蔵)・大久保利通日記(日本史協協会叢書)にて校訂)

五四 当時ノ形勢及ヒ寺田屋事件ノ報

一 和泉様御事、四月十三日卯ノ刻御供揃次第大坂屋敷
御立、御船ニテ伏見へ被遊御川登候事、

一 右ニ付、守衛人数百二十人ノ内鬪取ニテ、三番鳥丸
六左衛門組、四番橋口與一郎組、六番鈴木勇右衛門
組、七番高田十郎左衛門組、合テ四組四十人御供ニ
テ伏見へ被登候事、

一 外人数ハ大坂へ滞在、伏見ヨリ御老公相待可被登旨
被仰渡候事、

一 和泉様御事、十三夜五ツ時分御飯屋へ被遊御着船候

事、

一 伏見御飯屋へ兩日御滞留ニテ、十六日未明ニ御供揃
ニテ京都 近衛様へ被遊 御參殿候テ、当時ノ一件
和泉様御所存ノ趣四ヶ条被遊御咄候処、
近衛様ニモ御即答出来兼候テ、直様被(遊脱) 御登城被奉
入

入
叙聴候処、

皇上別テ御満足被思召、格別成 御繪旨被下候由、

一 御繪旨ノ趣委敷ハ不存候得共、近衛様ヨリ 泉州
(忠愍)

公ノ御所存委敷被為入

叙聞候処、御感悦至極ニテ始テ如此成所存承り候、

是日本ノ先掛ト被仰付候山、

御繪旨モ其趣ニテ御座候、右 御繪旨ハ 近衛様御
(正親町三條 中山兩御ヨリ)
持帰 泉州公へ被遊御渡候事、

一 泉州公ニハ 近衛様御許へ晝迄被為入候テ御帰、直

ニ伏見へ被為入候処、十七日六ツ半時分ニテ候由、

一 泉州公伏見へ被遊 御帰候処、直ニ御跡ヨリ近衛様

へ御使者到来ニテ、泉州公儀暫時ハ京都へ可被遊
御滞居旨被 仰出候ニ付、亦々御引返シ京都錦ノ御
(翌日)

屋敷へ被遊 御止宿候事、

一此節 泉州公御滞京ニ付テハ、諸司代ヨリ公義ヘモ浪人取鎮メ方ノ御披露有之候、

一右ノ如ク諸浪人取抑方トシテ被遊 御滞京候筋ニ無

之テハ、公義ノ御都合不宜候ニ付其通りニ被遊候由、

一皇上モ泉州公ノ御登リヲ被遊 御待居候由、

一京都モ江戸モ此節ハ御肝胆ヲ碎キ、是非黑白不相分

内ハ、京都ハ不引ト被 仰候由、

右ノ通候処ニ、

有馬 新七

田中 謙助

柴山 愛次郎

橋口 壮介

ヲ始メトシテ、守衛人数ヨリ

篠原 冬一郎

深見 休蔵

岸良 三之助

吉原 彌次郎

橋口 吉之丞

有馬 休八

吉田 清右衛門

江戸ヨリ罷下り候人数内ヨリ

大山 彌助

西郷 新吾(徳)

林 正之進

柴山 龍五郎

是枝 萬助

三島 彌兵衛

谷元 兵右衛門

橋口 傳蔵

弟子 丸龍助

木藤 市助

永山 萬齋

町田 六郎左衛門

西田 直五郎

伊集院 直左衛門

河野 四郎右衛門

鹿兒島ヨリ駈付人数

森山 新五左衛門

坂元 彦右衛門

大脇 仲左衛門

谷山郷士

鹿籠家来
指宿 三次
関山礼家来
神田橋吉助

外三四五人、

岩元 勇助

長州萩浪人・佐土原浪人其外諸国ノ浪人三十人計、
中山大納言様御内田中城之助、長州浪人二百人計ト
申談、廿三日ノ夜密ニ京都ニ條城・九條様・諸司代
ヲ焼払打果ス謀計ヲ相企候事、

一 右相企候訳ハ、当世幕府ノ勢ヒ中々盛ナリケレバ、
和泉公ノ御力ニモ及間敷、以前水戸侯マテ手ニ及不
成事ヲ 和泉様迎モ如何ト被存候付テ企シ由、右ノ
通相企焼払候テ他国へ張出シ候得ハ、世ノ中一端ハ
動立候へハ、終ニハ本ニ立掃ルトノ所存ニテ候由、
右ノ如ク動カシ候杯ハ 和泉公ノ所存ハ難解、左候
得ハ、

叡慮モ暫時ハ奉悩候得ハトノ事ノ由、是誠忠トハイ
ヘトモマタ其時節ニ不至^{ルカ}ナリ、

一 永田佐一郎事、廿二日ノ夜被致自殺候事、廿三日曉
自殺候事、皆々氣相付驚入養生致候事（柴山景綱紀事

参看）

一 佐一郎組十人ハ、総テ昨夜ヨリ当朝^{廿三}五ツ過迄ノ
間ニ皆伏見へ趣意相企候一条、弥其夜ニ被相果候合
候由、

一 京都ヨリ奈良原喜左衛門・海江田武次兩人、廿二日
ノ夜大坂へ被遣、守衛人数皆伏見へ可上旨使ニ候処、
右通ノ含一条聞候ニ付大ニ驚キ、 泉州公ノ御趣意
ニ違ヒ候儀ヲ度々被申論候得共、聞入無之候由、
一 大坂下屋敷へ罷居候諸国ノ浪人三十人計ノ由、十四
五人ハ廿三日朝迄ハ罷居候ニ付、奈良原喜左衛門・
海江田武次被逢、委敷被相尋候処、右企ノ段委事相
語、残居候浪人ハ外故、京都ニテ事被相果候節、俄
ニ大坂ノ守衛共京都へ御取寄ニ相成候半、其節ハ幕
府ノ手ヨリ守衛人数ヲ相支へ候ニ付、其節ノ為ニ態
ト相残居候由、

一 大坂守衛人数ヲ俄ニ京都へ御取寄相成候儀ハ、近日
京都へ長州等ノ浪人多人数相集居ニヨリテノ由、
一 右大坂ヨリ謀計ニテ忍ヒ出ラレ候儀、奈良原・海江
田被聞候由、直ニ高崎佐太郎ヲ京都へ被差遣相企ノ
段、相通候事、

一 御家老座書役上村休助モ急キニテ上京被致、右ノ企

注進被致候事、

一 大坂守衛ノ人数急キ伏見へ可罷登旨、廿三日ノ朝四ツ前ニ被 仰渡、早メニ船手当有之候得共、数艘ノ事ニテ手当出来兼、漸ク八ツ過ニ相調候ニ付、皆乗込船繰出候事、

一 大坂ヨリ(山原身ヲテ)小子出帆ヲ見ヤ、大坂へ残り候浪人モ船ニ乗リ川登リ候事、

一 小子共大坂ヨリ一里計川登リ候処、亦々急キ、是非今夜四ツ時分ニハ京都へ可登着旨申来候、伏見へ相着飯タベ候ハ、早可致上京旨度々ニ及候ニ付、拙者共直ニ船ヨリ下リ、陸道ヲオモヒくニ走行候得共、御存ノ通遠路故、四ツ時分ニ伏見へ相付候事、

一 小子共伏見御仮屋へ相着候処、御長屋へ鈴木勇右衛門・森岡善助手疵負被居候ニ付仰天イタシ、子細承候処左ノ通、

一 高崎・上村、廿三日ノ大鐘時分(今ノ午後四時ノ通)京都へ着ニテ前条ノ企ニ候哉、

和泉様へ被御披露候処、以ノ外被遊 御腹立候、鈴木勇右衛門・江夏仲左衛門・森岡善助・山口金之進・鈴木昌之助・奈良原喜八郎・大山格之助・道島五郎

兵衛八人へ被 仰付、右相止候、頭立ノ有馬新七・

田中謙助・橋口壮介・柴山愛次郎四人ヲ可打果旨

上意有之候ニ付、右頭取四人ノ外衆ハ御趣意篤ト申論、其上不聞入立向フ者ハ誰ニテモ打果候テモ不由承知被致、日入時分ニ京都ヲ立急キ伏見へ被參、彼人々ノ相集居候処ヲ段々手ヲ付相窺候得共不相知、

其内へ最早時刻モ相後レ候半ト手ヲ尽サレ候処、伏見ノ内大坂町過京橋トイフ処ノ隣成茶屋ノ二階へ皆々相集リ、打立候装束被存候段相知レ、右打手ノ八人外ニ上床源跡ヨリ駆付、都合九人被差越候、

一 奈良原喜八郎・森岡善助・山口金之進・道島五郎兵衛四人内へ入、外ノ衆ハ戸口へ被相待候事、

一 彼ノ四人内へ入り、田中・有馬・柴山・橋口へ逢申度旨、二階ノ下ヨリ被申候得共、二階ヨリ下リ不申候テ、御用有之付逢ヒタキ由被申候ニ付、打手四人二階へ上リ 泉州公ノ御趣意、且

叔慮ノ趣被申候処、敵四人ノ衆ハ不承知ニ付、無是非又々下ヘヨイリ、後四人へ是非二階ヨリ下ヘ下リ呉候様被申候ニ付、四人モ格護ヲ究メテ下リ候半、又二階ノ下ニテ論ニ及候得共承知無之候ニ付、道島

声ヲ掛打掛被申候由、然処ニ柴山龍五郎其外二階ヨリ下り来ラレ候ニ付、下ヨリ声ヲ掛暫時御扣可被成旨被申合候処、見合被申候弟子丸・橋口傳藏・西田三人ト抜ツレ被来候ニ付、二階ノ梯子ヨリ下候処ヲ一打ツ、ニテ候由、

一森山ハ其節ハ手水所へ被申候ニ付、出ルヨリハヤク脇差ニテ切掛、森岡額ニ疵付候ニ付、皆々立向ヒ切伏候由、

一右騒動相鎮候テヨリ、二階へ扣居候衆へ下ヘヨイリ吳候様被申候得共不下、其時八人ノ衆皆腰ノ刀ヲ抜き、御疑ニハ及マジキ旨再三被中候ニ付、皆々二階ヨリヲイラレ候、其節篤ト亦々御趣意ト

叡慮ノ趣申諭シ、皆承知ニテ候由、

一有馬一列承引無之候テ、外々致承知候趣モ有之、道島上意ト声ヲ掛抜打ニ切付、其声ヲ相凶ニテ鈴木父子・江夏・大山・上床抜列レ家内へ飛入、思ヒくニ勝負有之候由、橋口傳藏・弟子丸龍助・西田直五郎・森山新五左衛門四人、二階ヨリ抜列レ相下り候テ勝負イタシ候由、

一有馬新七・橋口壮介・柴山愛次郎・橋口傳藏・西田

直五郎・弟子丸龍助即死、森山新五左衛門・田中謙助深手ニ候事、

一田中謙助、真向ニ一ヶ所ヒタヒヨリ鼻迄掛切割有之打倒レ居候ニ付、皆々即死ト存被立退候テ跡ヨリ、御屋敷へ列帰候処息少々有之、暫時イタシ候得共余程元氣ニ相見得、翌廿四日朝六ツ過、京都ヨリ野津(錦旗)七左衛門・仁禮源之丞(景範)兩人被下、七左衛門手添打果候由、

一森山新五左衛門、左ノ小鬢深手、右ノ肩先深手、左ノ肩先少々、其外諸所都合十ヶ所疵相蒙リ倒居候得共、田中同様ニテ仁禮源之丞手ヲ添打果候由、

一有馬新七、向フツラニ二ヶ所(後頭部の方)ポロクト深手諸所、片腹杯皆深手、即死、

一橋口壮介、左ノ頬ニ深手、右ノ腕少々相残り、其外諸所深手突手、即死、

一柴山愛次郎、首少シ残り、片腹半分計リ深手、其外少々、即死、

一橋口傳藏、頬ニ深手、其外諸所、即死、

一弟子丸龍助、左ノ鬢ヨリ口迄掛十文字ニ深手、其外諸所薄手、即死、

一西田直五郎、向頬一ヶ所深手、背ナトニ諸所、即死、
打手ノ人数ヨリ、

一道島五郎兵衛、額ヨリ鼻迄打割、其外諸所深手、即
死、

五郎兵衛下人太郎、入棺ノ節慥ニ見候疵、左ノ半
皮計少々残り、ボロクド八十文字ニ疵有之迄ニテ、
額杯ヘハ少モ無之ト申出候、

一森岡善助、深手負、額ニ一寸計ツ、二ヶ所、右ノ小
鬢ニ二寸計リ一ヶ所、左ノ腕ニ六寸計、

一鈴木勇右衛門、薄手、右ノ耳ニ鬢ヨリカケ薄手、耳
少シ残り、右ノ腕ニ二寸計、

一山口金之進、薄手、耳少シ疵、腕一ヶ所、

一江夏仲左衛門、薄手、腕一ヶ所、

一奈良原喜八郎、腕ニ少々一ヶ所、

一大山格之助、無疵、

一鈴木昌之助、右同、

一上床源助、右同、

一右人数被相働候儀、泉州公別テ被遊 御感悦、道
島・奈良原・江夏・大山・鈴木父子・山口・森岡八
人ヘ 御感状御切米十石ツ、被下候事、

一永田佐一郎自殺イタシ候儀ヲモ 泉州公被聞召、

靱慮ノ趣、且亦 御趣意ノ段ヲ篤ク汲受、一統ヘ抛
身命再三申論候忠誠ノ儀、別テ被遊 御感悦、

御感状御米八石被下候事、

一佐一郎自殺ノ訳ハ相分リ不申候得共、脇方ヨリ相察
候得ハ、有馬新七・田中謙助・深見休蔵・篠原冬一
郎・吉原彌二郎・谷元兵右衛門・有馬休八・岸良三

之助・橋口吉之丞、皆永田佐一郎組ニテ候故、此節
相企候一件ヲ申聞セ、是非同意イタルベキ旨被相

責候ニ付、永田ハ什長ノ身トシテ御趣意ニ背キ候儀
不相成、又ハ諫ハ不聞皆出走イタシ候儀ニ付進退ニ

相迫リ、如此自殺被致候ハン、

一岩元勇助事ハ廿三日朝五ツ時分迄ハ大坂ヘ被罷居、

永田善生杯被存候得共、同組十人ノ内一人被相残如
何被存候哉、俄ニ是モ伏見ヘ被差越同意イタサレ候

哉ニ被察候事、

一一統ノ目印ニテ、皆地半ニ鉄砲袖・白湯手立アケニ
(兵子帯ノ通唱)

テ候事、

一道島ハ廿五日ニ京都東福寺トイフ所ヘ葬リ候由、
一人ノ死骸ハ、廿五日、伏見ノ大黒寺トイフ寺ニ土

中格護被^(仮埋ノ通喝) 仰付、私共夜入時分ヨリ差引へ差越候事、

一統ノ人数存生ノ方ニハ 泉州公ノ御趣意ニ従ヒ候

テ勝負ノ時モ相扞居タル事故、二十三日ノ夜伏見御

屋敷ニテ田代宗次郎組十人、本吉井仲介組今仁禮源

之丞組十人、合二十人ニテ守護イタシ京都へ被發候

事、

一右人数ハ過チヲ改メタル事故、何モ御構ヒ無之候得

共、他出ハ一切不相成、

右田原三之丞、大坂守衛ヨリ伏見京都ノ間ニテ被

召下候由(田原自記)

五五 寺田屋事件届書

五五ノ一
四月二十四日

四月廿三日夜、伏見駅船宿寺田屋伊兵衛方ニ於テ薩

藩及刃傷候ニ付、御届書之写、

昨夜於伏見、修理大夫家来共及刃傷候義、其段不取致

以口達御届申上置候通ニテ、右ハ別紙一印ノ人数主命^(其脱之)

相破リ及亡命候者トモニテ、昨夜大坂藏屋敷出奔、既^(朝之)

ニ昨夜於御当地不勘弁ニ事ヲ破リ、不容易難題引起シ

候形勢ニ付、和泉深及心配、別紙二印ノ人数へ手厚ク

下知致シ、当地ヨリ差出鎮撫方為致候処不致承知、終^(可脱之)

ニ彼方ヨリ刃傷ニ及候処、別紙片書ノ通手負又ハ致即^(即不尼ニ事ヲ破リ候付無致方脱之)

死、御場所柄旁何トモ奉恐入候次第ニ御座候、尤右ノ^(表脱之)

内ニハ、大坂へ取鎮置候諸方浪人トモニモ一列ニ罷居

候ニ付、右ハ当所屋敷へ先当座致鎮撫置候、左候ハ、

前文即死人数等ハ夫々御法矩通り、御檢使等御差下相

成候義ハ御定法通りニテ、何分御差図可被成下候、尤

右ノ趣ハ御用番様並伏見御奉行所へモ同様御届申上候

儀ニ御座候、且前文亡命人数等ノ義ハ、追テ急度国法^(致候脱之)

通り取極可仕候、左候テ死体ノ義ハ伏見屋敷内へ仮格

護致置候、此段申上候、以上、

戊四月廿四日

松平修理大夫内

田中仲右衛門

五五ノ二
別紙即死手負之記書

一印

即死

有馬 新七

田中 謙助

柴山 愛次郎

橋口 傳藏

橋口 壯助

森山新五左衛門

弟子丸龍助

西田直五郎

二

薄手 奈良原喜八郎

深手 山口金之進

即死 道島五郎兵衛

深手 江夏仲左衛門

深手 鈴木勇右衛門

無疵 鈴木昌之助

同 大山格之助

深手 森岡 善助

右之通ニ御座候、以上、

四月廿四日

五六 寺田屋ニ於テ取押ヘタル浪士ヲ京都藩邸

ニ護送ノ始末

文久二年四月廿四日、前夜^{廿三}伏見寺田屋ニ於テ、奈

良原カ説論ニ服シタル田中河内介ヲ初メ、我カ藩士數
十名ヲ京都錦街ノ藩邸ニ護送、寛大ノ処置ヲ以テ給養
出ヲ禁セラレタルノミナリ

近衛殿ヲ初メ公卿方ヘモ右ノ顛末ヲ通知セラレシニ、
驚キ玉フ事一方ナラス、所司代ヘモ事ノ始末ヲ届ケ出
ラレシニ、大ニ驚怖セリトソ (廿三日暴徒上伏、穩ナラサ
ル越ヲ伏見奉行ヨリ所司代ヘ通報セシニ、所司代ハ大ニ驚怖
シ防禦ノ手当ヲナシ、其身ハ二條城ニ避ケ入ラントセシニ、
城番モ備防ヲ嚴ニシ城門ヲ閉チ入ル事ヲ得サリシト、或ハ伏
見奉行ハ殊更防禦ノ備ヲナシタリト、京伏間ノ市街ハ今ヤ戰
争ノ衝トナレリト避遁ノ用意ヲナシ、恟々トシテ夜ノ明ルヲ
俟タルニ、鎮定ノ趣ヲ聞キ安堵ノ思ヒヲナシタリトソ、○所
司代カ二條城ニ近レ入ラントセシ云々、磯永弘卿・大山綱良
カ書類、其他幾多ノ報知ニ記スルカ如シ)、

公卿方ヘハ尚ホモ鎮定ノ始末ヲ告ケラレシニ、大ニ安
堵怡悦セラレ、 国父公ノ英断忠誠ヲ感賞セラレサル
ハナカリシトソ、而シテ此ノ由奏
聞セラレシカバ、

叡感斜ナラス、一回ヒハ驚カセラレ、一回ヒハ喜バセ
ラレ、 国父公ノ忠誠ナルヲ殊更ニ感賞シ玉ヘリトソ、

伏見ニ於テハ暴徒ノ死骸ヲ本田彌右衛門担当シテ懇ロニ埋收シ、寺田屋ヘハ其場ノ片付ケ等残ル処ナク手当ヲナシタリ（寺田屋ヘハ、座席ヲ穢シタルカ故金一百兩ヲ与ヘラレ、而シテ後同屋ハ、鬭争ノ跡見物セント来客充滿シ、大ニ利ヲ得タリト云フ、○暴徒ノ屍ハ同地大黒寺ニ埋收セシメ、道島カ死骸ハ京都葬ラレタリ）（叙述編）
年参照

五七 浪士鎮撫叡感ノ宸翰

文久二年四月廿四日、近衛忠房卿へ左ノ

宸翰ヲ下サレシニ依リ、翌廿五日、小松帶刀ヲ召寄セ

ラレ御短刀ト俱ニ伝達セラレタリ、

宸翰左ノ如シ、（忠房卿御親書）
写ニ依リ記載ス

尚以時氣專自愛可在存候、吳々泉州江宜可申達様
類入候也、

連日夏景増加候、弥其卿壯健満足候、偕ハ泉州即今
浮浪之輩鎮静之儀頼ミ置苦勞ニ存候、且亦総体国論
勤王之志專ニシテ、万事進退可応勅諭之趣実以正論
殊更頼母敷候、弥其趣意深厚行末々迄モ勅命遵奉有
之候様ニト存候、此品鹿軽ニ候得共、從來持古シ候
故、芽出度内々泉州心底可賞旁一笑ニ遣シ度、先其

卿江差出候俟、宜伝達頼入候、決テ極内之儀、其辺
相合候テ取計之儀モ頼置度存候也、

四月廿四日

近衛大納言ノモトへ

（番号二四に同文あり）

此ノ

宸翰ニ御短刀一口ヲ近衛殿へ密カニ渡サレシニ仍リ、
近衛殿ハ小松帶刀ヲ召喚ハレ、写取ラレタル

宸翰ノ写ヲ渡サレタリ、其時忠房卿御添翰左ノ如シ、

尚々、余条ハ帶刀へ可申ト存候事、

今日モ快晴ニ候、弥御平安珍重ニ候、其元誠忠之条々

天朝不淺御満足之

御旨趣、就テハ其元御心底被賞、從來

御物之 御短刀極密々被遣度

叡慮、昨日不存寄

勅書ニテ賜候事何共恐入、於愚拙モ深畏ミ候事ニ候、

御礼厚申上置候事ニ候、仍今日帶刀招寄目出度御伝

申入候、幾久敷御重宝可為存候、賜候

勅書写置候俟、御拜見之様存候、御跡ハ幾久敷其元江

御残シ置之様存候、仍写取目出度内々御伝申入候事、

四月廿五日

島津和泉トノへ

忠房

内々
(番号二六に同文あり)

此ノ御書翰ト

勅書ヲ固封シ小松へ渡サレタリ、上封ハ島津和州先生極内、急、忠房ト三重迄封セラレタリ、御短刀及ヒ御拵飾ノ金ナ物等左ノ如シ、

御短刀 安吉 一口

一 長九寸三分

一 中心二寸九分

一 鉏金目方拾匁五分

一 縁頭金七々子御紋菊四個、栗形同二個、逆角同二個、一文字同一個 鞘尻同三個

一 鞘金梨子地ニ枝菊ノ高時絵

一 柄敷

一 小刀 信濃守高道

一 小柄 金七々子枝菊、目方拾八匁

一 目貫 金枝菊

一 目釘 金乱ノ菊表裏共二

一 下ケ 緒黒糸

一 袋 表大和錦、裏紫絹紫打 長二尺一寸五分、幅四寸三分

一 箱 桐白木、銀金ノ物ニ金粉ニテ銘ヲ書シ、緒

真田打、

斯クノ如ク美麗結構ノ粧飾ナルノミナラス、

宸翰ノ趣実ニ服心肱股ニ頼ミ思召スノ

聖意最ト深重ナル御文外ニ溢レタリ、小松ハ之ヲ拜受

シ守護シテ帰邸、此由言上ニ及ヒシカハ 国父公ハ拜

戴ノ式嚴重ニ執行セラレ、而シテ極密ノ事ナリト雖モ、

要路ノ吏員へハ密カニ拝覽ヲ允サレタリ、是レ文久二

年壬戌四月廿五日ノ事ナリキ、

五八 御上洛ニ就キ供奉云々

(忠實、佐土原藩主) 島津淡路守

来二月

御上洛之節、先格之通供奉被相勤度旨願之趣達

御聴候処、尤之儀ニ被

思召候得共、今度

御上洛ニ付テハ、下々不及難儀様ニトノ厚

御趣意ニテ格別御省略、諸事御先例ニ不被為拘御手輕

ニ可被遊

御上洛

思召ニ付、此度ハ面々御供ニハ不被 召連

名代 島津淡路守

思召ニ候、乍然右御趣意之趣厚被相心得、道中筋人馬遣等ヲ始下々迷惑ニ不相成様ニ見込有之、格別手輕ニ

先代薩摩守儀、存生中為國家抽丹誠、病末ニ及ヒ弟三郎等江遺訓之儀共連

上京供奉被相動候儀ニ候ハ、強テ御差留被遊候儀ニハ無之候間、上京候儀ハ勝手次第可致旨被仰出之、

御感不斜候、先代家久雖存命中、權中納言宣下之家例モ有之候間、格別之

五九 御軍制改正ニ就テ云々達書

叡慮ヲ以贈權中納言從三位可被 宣下旨、京都ヨリ被仰進候故、薩摩守存生中彼是抽丹誠候趣モ有之候ニ付、

此度御軍制御改正被

叡慮之通被追贈權中納言從三位旨被 仰出之、

仰出候ニ付テハ、慶安度々御趣意ニ基キ、御軍役人数等用意可致旨改テ可被

右於御白書院縁類、老中・圖書頭列座、河内守申渡書付相渡之、

仰出之処、昇平之流弊ニテ平生之冗費モ不少、非常之嗜行難行届モ有之哉ニ被思召候ニ付、以後非常之節ハ

六一 万石以上之妻子女手形手續達書

慶安度之人数割大凡半減之積相心得、右人数之内ヨリ別紙之通御軍役之賦可差出旨被

今般被 仰出之趣ニ付、万石以上之面々、妻並家族之モノ、且又家来共妻子等モ銘々存寄次第国邑江差遣候

仰出候、委細之儀ハ講武所奉行・御軍制掛・御目付可被談候、

ニ付、関所通行之節々、御留守居手判ヲ以通行為致候規定ニハ候へ共、万端簡易ヲ主ト致シ候御所置ニ付、

六〇 松平薩摩守贈位

万石以上並交替寄合等之面々、妻女其外国邑江差遣候節、女手形御留守居手判ニ不及、銘々家来ヨリ印鑑江

松平修理大夫

人数書相添御留守居江可差出候、尤右印鑑ヲ以関所ニ

通行為致候段書加へ可被差出候、

六二 有馬新七等処刑申渡書

六一一

川上源十郎組御小姓組

有馬新七

鳥津頼母(久度)組御小姓与

田中謙助

圓貞二男

柴山愛次郎

新納次郎(久徳)四郎組御小姓与

彦次嫡子

橋口壯助

右ハ、三郎様御発駕前ヨリ尊 王攘夷ノ説ヲ以種々致
造言、諸藩浪人等ヘモ其筋申聞、京攝辺御通行ノ節兵
ヲ起シ、九條家並御所司代ヘ可致乱妨相企候段、(兵庫豊)室津
御着船ノ節被聞召上候ニ付、早速理解人御差遣相成、
且御着坂ノ上モ御丁寧御諭方相成候得共、拙モ相用候
勢ニ無之、無御抛其方共矣ニ勤 王ノ志有之候ハ、
内分
朝廷江ノ御都合可被成御伺候間、其内相待候様及度々

厚御諭相成、近衛家へ御参殿委曲被仰上候処、早速議
奏衆御扣御談合有之、其趣

天聽ニ被遊御達候処、以外ノ事候ニ付、是非御鎮靜可
被遊トノ御旨御承知ニテ、其趣再三御使ヲ以理解被仰
付候処、目前ニテハ其私服ノ形ニ候得共、与類ノ者共
江内実ハ急速事ヲ破リ可申トノ御催促ノ筋ニ、暴威ヲ
以実等敷申聞候ニ付、無抛一同致同意、折々上京ノ企
ニヲヨヒ候始末、御国家御難題ハ不及申、
皇国ノ御為別テ不輕次第、殊ニ御発駕前訊ヲ厚被 仰
出候趣モ有之候処、不顧其儀モ右次第別テ不届至極ニ
付、存命候得ハ(極重刑)鋸挽ニテ被行直礫者トモ候得共、於伏
見被打果候ニ付、士被召放於境瀬戸直礫ノ格ヲ以死体
切捨申付候、

六一二

新納次郎四郎組御小姓与

橋口傳藏

川上右膳組御小姓与

亡新蔵嫡子

森山新五左衛門

榎山要人与御小姓与

右八前条同断ニ付、有馬新七外三人張本ノ者共ヘ致同意、上意打チ妨、討手人数ヘ致手向候処被打果候義無相違、右次第別テ不届ニ付、士被召放斬罪相当ニテ、於境瀬戸死体取捨候格ヲ以死体埋捨申付候、

六二七三

弟子丸龍助

肝付兵部与御小姓与

西田直五郎

島津伊織与御小姓与

伊集院直右衛門兼名

右同人与御小姓与

休悦嫡子

永山 萬齋弥一郎 旧名

川上源十郎与御小姓与

源左衛門嫡子

木藤 市助

島津頼母与御小姓与

隈元庄右衛門

川上源十郎与御小姓与

彦八二弟

大山 彌助弥一 旧名

川上右膳与御小姓与

玄禎甥

林 正之進

吉左衛門嫡子

谷元兵右衛門

彦右衛二男

岸良三之助

島津伊織与御小姓与

柴山龍五郎景綱 旧名

島津主殿組御小姓与

三島彌兵衛通庸 旧名

小番

是 枝 萬助柴山景綱 実弟

町田民部与御小姓与

喜左衛門嫡子

吉田清右衛門

島津主殿与御小姓与

大島吉之助弟

西郷 信吾從道 旧名

島津頼母与御小姓与

深見 休蔵

江戸家内叔父

町田六郎左衛門

島津壬生与御小姓与

彦左衛門二弟

吉原彌二郎

仲左衛門嫡子

河野四郎左衛門

六郎兵衛嫡子

森 新兵衛

川上源十郎組御小姓与

岩 元 勇 助

島津伊織組御小姓与

有馬 休 八

新番

篠原冬一郎旧名

右ハ前条同断、不筋儀ヲ暴威ヲ以実等敷申聞候処ヨリ致同意、上京ノ企相反候ニ付、京都ヨリ被召下候上慎申付置候得共、皆共当時ニ相成別テ致後悔候趣被聞召

候内情、実ニ不便ノ至ニ被思召上、殊ニ今般別段ノ觀

慮ヲ以御参内、且不容易御拝領物迄モ被遊重畳結構ノ

御事ニ付、出格ノ御取次ヲ以輕重厚薄ノ無差別御赦免

被仰付候、此旨難有奉承知以來屹ト改是非可抽忠勤候、

右ノ通被仰付候条、一統奉承知候様表方へ致通達、

奥掛御勝手方へ可相達候、

十月 大蔵

右通戌十月十四日被申渡候事柴山景綱 履歴参照

六三 寺師宗道島津登へ書翰

一筆啓上仕候、逐日寒氣相増候之处、益御安泰被為遊御座恐悦之御儀奉存候、私ニも道中無異去ル廿五日安着仕候、乍恐御平意奉仰候、借詰中ニは御懇篤ヲ以御召仕被成下、殊ニ出立之節は御配慮被下不容易過分之仕舞料被仰付、其上御饑別迄も重畳難有恐入仕合奉存候、右御礼申上度、且御伺御機嫌芳如此御座候、期後便候、恐惶謹言、

寺師 善真

「」

九月廿九日

花押

登様

御取次衆

二白、私ニも江戸立より雨降ニて、不二川江六日之川支ニて滞在仕候テ、夫よりハ往々川ニも都合宜敷、且舟中ニも六日程ニて先上都合之仕合御座候、殊ニ道中雨一日も無御座候、珍敷事共ニて、九州之儀は夜白被罷通候、愚弟(弟志)義も疾ク出立も為仕筈ト存申候処、此節安田錢座一件ニ付内々取しらべ方ニ關係仕候て、夫故涯々出立も出来不申候、尤主殿様杯御内意之御訳も御座候、平川(宗之進)ニは廿七日方着相成、安田(徹)ニは未着不申候、鑄製之場所柄杯六ヶ敷様子ニ御座候、色々山者之説杯起り嫌疑も不少候、然し私人物能存知之者ニ御座候へ共、折角事之閉塞ニ不及様心配御座候、何分大業成就候へハ、御国家之御為無此上事ニて、いづれも其所々心配様子御座候、

一此節幕府大變革之御次第追々書付拜見仕候、先々天下一統之結構御座候、就ては弥此涯彼は御政敵ニ付色々御配慮も相増候御時節、乍恐奉恐察候、

上様御事も弥当冬 御参府之御手当ニて、既ニ先日ハ御供 攝津様、御側役山口直紀・谷川次郎兵衛其外奥向御供付之由、

一爰許御役々進退も段々御座候、近日吉河源右衛門・中山甚五兵衛・中村早太閉塞仕候、別紙之通りニ仰出も御座候、弥正議之御所置難有御座候、扱道中筋之義も格別相替候義も無之、酒・彦印之動静は弥御念入候方可被宜哉、道中人足杯之内ニも数多入込有を慥ニ見届置候、道者杯も間々紛レ居候も有之候、此節京・大坂へも数人入込罷居候由、其趣向は認得不申候、乍恐此節 御参府ニ就ては、弥右等之御檢索專要ト奉存候、追々爰許内情方細事見聞之形行可奉申上候、

(島津忠承氏藏本にて校訂)

六四 茂久公將軍上洛供奉請願ノ事実

戊戌十月二十一日町飛脚着、六日仕出候、太守様御用有之候処、佐土原様御登城ノ処、来春太守様御上洛ニ付(島津茂久)御供御願立被成候処、此節ハ至極御手輕ニテ御上洛ニ付御供ニ不及、併是非御供御願ノ儀ナラハ、御出府ノ上御願被成候様被仰渡候トノ飛脚ニテ候ヨシ、

十月二十四日承候事、